

ま ほ ん も の が た り
魔本物語

秋月あきら

プロローグ

私は私であって私ではない。

存在 は 存在 によって 存在 している。

私を創造した魔導師は私に多くの知識を与育てた。

他が 存在 するからこそ私は 存在 するのだ。

私を記した魔導師は全てを私に記す前に朽ち果てた。

世界が広がり続ける限り私は無知であるだろう。

今日も朝から雨が降っていた。

どんよりとした曇天の下、僕は傘を差しながら住宅街を歩いていた。

雨の日は外を歩く人が少ないから好き。

僕と同年代の人たちは今頃学校で勉強をしている。そう、僕は学校に通っていない。それもだいぶ前から行ってない。

中学に入学してすぐに入院して退院できたのが二年生の夏休み明けだった。病院を退院できたのはよかつたけど、クラスや学校に馴染めなくて不登校になってしまった。それから学校には行ってない。

入院中は時間を持て余すことが多くて本ばかり読んでいたような気がする。それ以来、僕の趣味は読書になった。今でも家にいる時はいつも本ばかり読んでる。と言ってもほとんど

家にいるから、一日中本ばかり読んでいると言ってもいいかもしれない。

静かな雨の中、僕は行く当てもなく歩いていった。

目的があつて歩いているわけじゃない。ただ、雨が降っていたから外に出ただけ。雨の日は人通りが少ないから外に出ただけ。人には会いたくないけど、外に出たかった。

よその家の庭から青い紫陽花^{あじさい}が顔を出している。

葉に雨粒が溜まつては雫が地面に落ちて四方に弾ける。

しばらく紫陽花を見ていると、どこからか雨音に紛れて動物の鳴き声が聴こえてきた。たぶん猫の鳴き声だと思う。

僕は鳴き声に誘われるままに歩き出した。その時、僕は呼ばれている気がしたんだ。猫は僕を呼んで鳴いている。

紫陽花を見ていた場所からだいぶ歩いた。それなのに猫は見つからないし、猫の鳴き声が聴こえる。猫の鳴き声なんてそんなに大きくないはずなのに僕の耳には届いた。だから僕は確信した。やっぱり僕を呼んでいる。

しばらく歩いたところで、僕は電信柱のすぐ横にあるダンボール箱を見つけた。僕はそのダンボール箱に小走りで近づいてしゃがみ込んだ。ダンボールのふたは閉まつていたけれど、この中にきつといるに違いない。そう、僕には思えた。

ふたを開けると中には小さな仔猫が僕を見つめながら入っていた。そして、手でそつと頭を撫でてやると、喉を鳴らして顔を僕の手にすり寄せてきた。この時に僕はこの仔猫を家に持ち帰ることを決意していた。

ダンボール箱のふたを閉め持ち上げると、僕は家に向かって歩き出した。もう猫の鳴き声は聴こえない。

濡れた道路の水を跳ね上げながら僕は急いで家に帰り、すぐさま自分の部屋に入ってダンボールのふたを開けた。

すぐに仔猫と僕の視線が合う。

仔猫の瞳は僕から見て右が紅色、左が金色という不思議な瞳をしていた。そして、首輪には金色のコインが付いていて記号のようなものが刻まれているけど、その意味することはわからない。もしかしたらどこかの文字で名前が刻まれているのかもしれない。

仔猫をそっと抱きかかえてあげると、その下から一冊の本が現れた。

僕は仔猫を膝の上に置いてダンボール箱の中から本を取り出した。

表紙が厚くて電話帳よりも分厚い本。動物の皮を貼ったと思われる表紙には金色の文字らしきものが刻まれている。そして、ページをめくっていくと蟻みたいに小さな文字がびっしりと書かれていて、その文字は印刷物じゃなくて手で書いたような文字だった。

ふと僕の頭の中にある名前が浮かんだ 魔導書。

魔導書とは神々やその眷属ケルメクの伝承や魔法に関する膨大な知識を記した書物のことで、ファンタジーが好きな僕はこの手の本にも興味があった。でも、書かれている文字が読めないのです、これが本当に魔導書なのかはわからない。きつと僕の思い違い

の方が確率として高いと思う。

謎の本を読むことを一時断念した僕は仔猫をお腹の上に乗せながら床に寝転んだ。

仔猫を見ながら想像を膨らませる。

この仔猫は異世界からやって来た仔猫で、この魔導書と一緒に敵から僕の世界に逃げてきたんだ。それで、この仔猫の住む世界には動物や人間を掛け合わせた種族がいて、猫人や犬人、翼の生えた人間もいるかもしれない。あとは、魔法が当然のように存在していて、恐ろしいモンスターもいるかもしれない。そんな世界に行ってみよう。

毎日毎日家の中に引きこもって生活して、学校にも行かない僕。でも、本当はいろんなところに行ったり、いろんな人と話したりしてみたい。けど、この世界じゃ駄目なんだ。僕はこの世界に見捨てられた。

誰も行つたことのない世界に行けたら、僕はなにか変わるかもしれない。なんていうのは都合のいい話。僕は逃げたいだけなんだ。けど、僕は……。

「誰も知らない世界を冒険してみたい」

僕がそう呟くと、どこから声がしたような気がした。

仔猫を抱きかかえながら上体を起こして辺りを見回していると、またどこからか声が聞こえた。でも、誰もいない。

また、声がした。

そして、僕はすぐ近くに置いてあつた謎の本に目を向けた。

声がする。それは音じゃなくて、僕の内に直接なにかを語り

かけてくる声。声といつても言葉じゃなくて、感覚的に感じと
取れる想い。そう、本が僕を呼んでいた。

厚い表紙をめくった瞬間、僕の視界は真っ白になった。

第一幕 薔薇ばらの記憶

少年が目を開けると、澄み切った蒼あおい空が目に入った。眩しい陽の下を鳥たちが羽ばたいている。そして、爽やかな風が少年を優しく包み込む。少年は広大な草原の上に寝転んでいた。

こんな天気の良い日は、そよ風に吹かれながら草原の上で寝転ぶと気持ちがいい。風が生命の息吹を運び、青草の香りが心地よい。少年がこんな晴れ晴れとした日に外に出たのは久しぶりだった。

少年がふと首を横に向けると、少年と同じように女の子が寝転んでいた。ただ、その女の子は普通の女の子と違っていた。姿形は少年と同じ年か、それより下のほほ人間と思われるが、頭から覗く猫のような耳、スカートから飛び出している長いしっぽがうにゆうにゆうと動いていた。それはまるでファンタジーでよく見る獣人　猫人だった。

少年は少し前の記憶を辿った。そう、さっきまで自分の部屋にいたような気がする。だとしたらこれは夢かもしれない。だが、少年はこれが現実であることを心の中で願った。

上体を起こした少年は横で眠る女の子に声をかけてみた。

「こんにちは、起きてますか？」

「うう……はっ！」

猫耳の女の子は大きな瞳をクリクリさせながら飛び起き、少

年の前に座って目を輝かせて少年の顔を覗きこんだ。

「こんにちわ、ご主人様！」

「……僕？」

突然『ご主人様』と呼ばれて少年は戸惑った。

この子にご主人様なんて言われる理由もないし、ましてや会ったのも初めてなのに、どうして？

「君はボクの新しいご主人様だよあつ！」

猫耳の少女は少年の身体に抱きついて押し倒した。

「わあつ、なにをするの!？」

驚き押し倒された少年は自分の目の前　少女の首輪に付いている金色のコインに注目した。あの猫と同じなのだ。金色のコインにはあの時に見た記号みたいな物が刻まれていた。偶然とは思えない。

「もしかして、君って僕が拾った猫？」

「さっすがはご主人様、ボクのご主人だけあって頭いいね。ご主人様がボクを拾ってくれたから、ご主人様がボクのご主人様！」

「あのね、その『ご主人様』って呼び方は恥ずかしいから……」

「じゃあ、所有者様！」

「僕の名前はセイっていうから、セイって呼んでもらえるかな？」

「おう、じゃあご主人様、よろしく！」

顔いっぱい笑顔を浮かべた女の子はセイに向かってピース

をした。

セイは思わず苦笑した。自分の言葉がどうやら通じていないらしい。

猫耳の少女はセイが道端で拾った仔猫だった。この手の明るくて元気な少女と話すのが久しぶりだったセイは少し疲れた表情をした。でも、すぐに笑顔を取り戻した。久しぶりの笑顔

を。

「僕こそよろしく。ところで君の名前は？」

「ボクの名前はファティマ。この首輪にもそう書いてあるんだよ」

ファティマは自分の首輪についたコインを指差した。そこに刻まれていたのは文字だったのだ。そうではないだろうかとセイは察しが付いていた。実はそこに刻まれていた文字と、あの謎の本に書かれていた文字が似ていたのだ。

「あ、そう言えばあの本は？」

少し声をあげたセイは辺りを見回してあの本を探した。セイはあの本が自分をこの世界に運んできたのだと考えた。だとすると、あの本はとても大切な物となる。

「セイの探してる本ってこれでしょ？」

ファティマが胸に抱えていた本をセイの目の前に突きつけた。動物の皮に金字の表紙がセイの目に飛び込む。そう、この本だ。

「それだよ、その本」

「この本は大切な物だから手放しちゃダメだよ、はい！」

「あ、うん」

電話帳みたいに厚くて重い本を渡されたセイだが、これを持って歩くのは少し大変だと思ひ少し怪訝けげんな顔をする。

なにかバッグみたいな物があるといいのだが、セイはこの世界になにも持たずに来てしまった。だが、大切な本なので頑張って持ち歩くことを決めた。

セイの脳裏にはじめてこの本を手にとった時のことが思い出される。魔導書。その考えはセイの中で確信されつつあった。「この本ってなんの本なのかな？ 僕には何が書いてあるか読めないんだ」

「ご主人様にこの本が読めないのは当然だよ。この本はこの世界の文字で書かれてる、それもずっと昔のある部族の文字でね」

「この世界……？ やっぱ僕は僕の住んでいた世界に来たんだ……」

セイは嬉しかった。そう、セイは想い憧れていた世界に来たのだ。セイは前の世界から解き放たれたのだ。

「そうだよ、セイが『誰も知らない世界を冒険してみたい』って言ったから、ボクがセイをこの世界に連れて来たんだよ」

「それで、この本はなんの本なの？」

「その本はこの世界のことを書き記した本だよ。この世界のことをいっぱいいっぱい書いてあるの。その本に書いてることなら、なんでもボクは知ってるよ。でも、世界のことを全部知ってるわけじゃなし、よく思い出せないことがあるの。だからこれからボクとセイと一緒にこの世界を冒険するんだよ」

「……うん」

「なんだか相手の勢いに押された感じた。」

勢いよく立ち上がったファティマはスカート裾を風に揺らしながら、遙か草原の向こうを力強く指差した。

「この草原の向こうに花人たちの住む ハナンの町 があるから、まずはそこに行こう！」

「

「花人？」

「そう、花人。花から生まれた種族の名前。見た目はほとんどセイと一緒にだけど、髪の毛の中から花がアクセサリーみたいに咲いてる人とか、手が蔓つるみたいなのとか、まあ、行って見てみるのが一番だと思うよ」

「うん、楽しみだな」

日がまだまだ高い草原の下を二人は ハナンの町 に向かって歩き出した。

セイの足並みは普段よりも軽く、その顔つきはいつもよりも生き生きしていた。

ハナンの町 に向かって歩きながら二人はいろいろな話をした。話と言ってもセイが質問をして、ファティマがそれに答えるというもの。そのお陰でセイはおもしろい話がいっぱい聴けた。

ファティマの説明によると、この世界の呼び名はどの種族のどの言葉でもノースと読んでいるらしく、このノースには大地という意味が含まれているらしい。そして、このノースを造つ

たのは 大きな神 という存在とのことだ。

この世界の創世神話はこうだ。

外なる宇宙から来た 大きな神 は数多の星の中から水に溢れる青い星を選び、その星に 生命の粉 を蒔いて木々や草花を生やし、粘土から昆虫や動物たちを造りだした。

次に 大きな神 は自分の姿に似せて第一のヒトと呼ばれる天人という翼の生えた民を創り出した。しかし、その天人の間で戦争が起き、負けた多くの天人はどこか遠くの世界に逃げた。しまい、勝った天人たちがノースを治めるようになった。やがてノースを治める天人の有力者は 小さな神 と呼ばれるようになり、それ以外の天人たちは身を潜めるようになっていった。

大きな神 は自分の創った世界の発展を気に入らず、天人から翼を取った第二のヒトと呼ばれる地人を創り出した。しかし、大きな神 はそれでも満足せず、地人と動物や植物、ありとあらゆるモノを組み合わせる多くの種族を創った。それでも 大きな神 が納得する種族と世界は創り出すことはできなかったと云う。

そして、いつしか 大きな神 は人々の手の届かぬ 最果ての地 に行ってしまったと云う。

ファティマは歩きながら空のずっと向こうを指差した。

「大きな神 様はあの空よりもずっと上に住んでるの。そこで 大きな神 様はボクたちのことを見守ってるんだけど、ただ見守ってるだけで他には何もしてくれないんだよ」「見守ってるだけで困ってる人を助けられないの?」

「大きな神 様はこの世界と多くの種族を創って、あとは善いことも悪いことも全部黙って見てるだけ、だから 大きな神 様を信仰してる人は少なくて、小さな神 様を信仰してる人の方が多いかな。小さい神 様はたまにだけどみんなの前に姿を見せてくれるからね」

この世界には神が本当にいらしい。セイのいた世界に神がないというわけではなかったが、こつちの世界の方がセイには真実味があるように思えた

この草原には多くの動物たちがいた。セイのいた世界にもいたような草食動物の類だが、あいにくセイたちの位置からは、向こうが警戒しているのか、こちらが避けて通っているのか、その姿をよく観察することはできなかった。

ファティマの足がふと止まった。

「ご主人様気をつけて……イヤゝな感じがする」

「イヤな感じ？」

「そう、例えば獐^{どうもっ}猛な怪物の雰^{ふん}囲気……って上か!？」

巨大な影が二人を呑み込んだ。なにかが二人の上空にいる！顔を上げたセイが大声で叫ぶ。

「わぁーっ！」

「ご主人様怖いよぉ」

腰を抜かして尻餅を付いたセイに、混乱に乗じたファティマが身体を摺り寄せてきた。しかし、状況はファティマがわざとらしくご主人様に甘えてられるような状況ではない。上空には巨大な翼を持った^{とかげ}蜥蜴のような生き物が飛翔していた。

「あ、あれなに？」

巨大生物を指差すセイの指が地面に向かって下がるとともに、大地が轟音を立てながら激しく揺れた。

固い鱗うろこに包まれた体長六メートルの巨大蜥蜴に翼が生え、頭には二本の角と口からは剣のような鋭い歯、長く伸びた爪で引っかかれたら一撃で即死するに違いない。

巨大な怪物を前にファティマは突然口調を変えて説明をはじめた。

「説明しよう。あの巨大生物はドラゴンといい、大まかに分類するとスカイドラゴンという種類に分類される。補足を加えると、こんな草原でドラゴンに出くわすなんて珍しいことなんだよ、ある意味ラッキーだね！ しかも子供のドラゴンだから可愛いね」

「ラッキーなんかじゃない！ 可愛くもない！」

セイの叫びを掻き消すようにドラゴンが咆哮ほうごうし、巨大な舌を伸ばしながら二人に襲い掛かってきた。だが、セイにはどうすることもできなかった。

その時突然、ファティマの身体が閃光に包まれ、セイの視界は真っ白になってしまった。

ドラゴンの咆哮だけが木霊する。

真っ白の世界の中でファティマの声が響いた。

「必殺目暗まし！」

次の瞬間、地面に尻を付いていたセイの腕が強引に引っ張ら

れ、セイは訳もわからずファティマと一緒に全力で疾走していた。

「ご主人様、ボクの必殺技とお？」

「どうって……？」

「取り敢えず目暗ましでとんずらしてみただケド」

「……てつきり僕はファティマがドラゴンをやっつけてくれるんだと思った」

「そんなの無理に決まってるじゃん、ご主人様も意外にバカだなあ」

ここでセイの頭にある考えが浮かび、その考えを現実にするようにドラゴンの咆哮が聞こえた。そう、やっつけてないドラゴンは後ろから追って来ていた。

「わぁーっ！ 追って来てるよドラゴン、ファティマなんとかしてよ」

「じゃあ、もういつちよ目暗ましでも」

セイの手が素早く動いてファティマの頭を撫でるように叩いた。

「バカ！」

「イタゝい、打つことないじゃん。女の子殴っちゃいけないって教わんなかったの？」

「今はそういうことを言ってる場合じゃなくて、ドラゴンから逃げる方法か倒す方法考えてよ！」

「だゝかゝらゝ、ここはボクの必殺目暗ましで」

セイの手が素早く動いてファティマの頭を撫でるように叩い

た。

「イタゝい、二度も打った。打った打った打った打った打った打った！」

二人がこんなしょうもないことをしている間にも、空を飛翔するドラゴンは巨大な翼を広げて、獲物に向かって急降下をはじめていた。

「ご主人様危ない！」

ファティマに後頭部を押されて顔面から芝生に倒れこんだセイとファティマの真上をドラゴンが掠めるように飛んでいった。セイはかなり痛かったが、ドラゴンに連れ去られずには済んだ。芝生に倒れるセイが真っ赤にした顔を上げると、ドラゴンが上空を旋回してこちらに向かって来ているのが見えた。

ファティマはセイと同じように寝転びながら、両手で頬杖をつきながら呑気に言う。

「絶体絶命だね、あはは」

「笑ってる場合じゃなくて、これって魔導書なんだから大きな火の玉とか出せないの!」

「そんなことできたっけ……よく覚えてないなあ」

「役立たず！」

立ち上がった二人はもと来た道を逆走して逃げはじめた。状況はなにも変わっていない。あえて言うならば、セイの体力が尽きようとしている。

逃げる二人の背後で巨大な物体が落下する音が聞こえた。ドラゴンが地面に着地したのだと思われるが、それにしよう

すが可笑しかった。落下音が聞こえてから、何も音がしないのだ。二人は足を止めて恐る恐る後ろを振り向くと、そこには!? 項垂れて地面に横たわるドラゴン。その頭には巨大な槍が突き刺され、その槍はロープを纏う白銀の髪を風に揺らす少女が握っていた。

槍を抜いて地面に飛び降りる少女。その瞳の色は左右で違い、蒼と翠の瞳であった。

「まだ波長が合っておらず使いこなせぬようじゃな」

とても少女の言葉使いとは思えぬ口ぶりで、気高く相手を威圧するようだった。

その場に立ち尽くすセイとファティマの前に立った少女は静かな月のように微笑んだ。

「ドラゴンを嚇けたというのに、なんの役にも立たなかったの」

少女の言葉を聞いたセイの顔色が見る見るうちに曇っていく。

「嚇けたって、君が僕らを襲わせたことだよ。君はいつたいどこの誰で、なんでドラゴンで僕らを襲わせたの？」

「ふふふ、妾たちの目的はやがてわかるじやろうて。妾は

光天の書 とともに生きるエムと申す者じゃ」

エムは空間に溶けるように姿を消してしまった。その表情は嗤う月のようなだった。

「今の人、ファティマの知り合い？」

「ううん、知らない人」

「そう……」

セイはエムにファティマと同じものを感じていた。性格はぜんぜん違いかもしれないが、根本にある何かが同じように感じた。

疑問で頭に抱えながらセイは再び ハナンの町 に向かつて歩き出すことにした。しかし、最初のような会話は二人の間がない。ファティマはなにか話したそうな雰囲気であったが、考え事をするセイの雰囲気それを寄せ付けない感じだった。

しばらく歩いたところで花の香を運んできてくれた風が吹く方向に町が見えてきた。あれがきつとハナンの町だ。

「セイ、あれが花の都ハナン。花人が住む町では三本の指に入る大きさの町だよ」

「いろんな花のいい香りがする」

「あたりまえだよ、花人の住む町なんだから」

「そういうもんなんだ」

花の香りは町の中に入ることによってよりいっそう強くなつた。

大きな通りの横には花壇があつて、いろんな花が咲き誇っている。

この道を歩いている人たちは大輪の花のようなドレス姿の人や、身体中を葉や花に包まれた人だった。みんな綺麗で美しくて華やかな人たちで、少し中世の貴族みたいなイメージがする。そう、この人たちが花人と呼ばれる人たちだった。

花人の見た目はセイとほとんど変わらない。中には身体の一部が植物の者もいるが、ほとんどの者がセイと変わらない種族

に見える。大きな違いを挙げるとすれば、花人の体臭は花の香りがするくらいなものだ。

町を歩いているとセイの目に鳥の足と羽を持った人が入った。「ファティマ、あの人たちは？」

「あの人たちはセイレーン、歌がとっても得意なことでも有名な。あの種族は大きく分けて二つに分けることができる、地上に住んでる人たちとラピュータっていう空中に浮かぶ島で科学校とともに生きてる人たち。地上に住んでるセイレーンとラピュータに住むセイレーンは仲が悪くていつも喧嘩けんかばかりしてるんだよ」

「ふうん。じゃあ、あつちにいる鳥がそのまんま人になったみたいなのは？」

セイが指差した方向には大きなくちばし嘴を持った二足歩行の鳥がいた。二本足で人間みたいに立っていて服も着ているが、手はなくて羽を上手に手にみたいに使っている。

「あれは鳥人。セイレーンに近い種族だけど、普通の鳥の方が近いかな」

「ふうん。じゃあ、あつちのは？」

「もう今日は質問タイムおしま〜い。よっし、まず宿を探してそれから次のことを考えよう！」

セイの腕を引っ張って歩き出すファティマ。ここでセイはある疑問が頭に浮かんだ。

「ところでお金は？ この世界にもお金はあるんだよね？」
突然歩くのを止めたファティマがはっとした表情をしてセイ

を見つめた。

「ああ〜っ！ そうだ、ボクたちお金持ってなかつたんだ。困ったね、う〜ん、これからどうしようか？」

「僕に聞かれても困るよ。だって、僕はこの世界のこと詳しくないし」

「じゃあ野宿しよう、決定！」

「ヤダよ野宿なんて」

「だいじょぶだって、花人の町は比較的 안전한町だから」

セイはキャンプだってしたことないのに、知らない土地の知らない町で野宿なんて絶対に嫌だった。

「誰か親切な人に泊めてもらうことにしようよ」

「でもお、これからだってきつと野宿する機会が来ると思うよ

お

「……う〜ん」

冒険には野宿は付きもの。テレビゲームであれば、敵を倒すとお金やアイテムを拾えるものだが、あれはゲームの話だ。

セイがどうしようか頭を悩ませていると、どこからか大きな声が聞こえてきた。

「ライラの写本 を盗まれたぞ！」

その声は酷く慌てたようすで、その声を聴いた人々も慌てた表情をしている。きつと大切な物が盗まれたのだろう。だが、セイには ライラの写本 と聞いても、それがなんなのかわからない。

「ライラの写本 って何？」

「魔導書のことだよ。ライラっていうのは別名 神の詩 って言ってるね、レイラ・アイラ・マイラ、いろんな種類の魔法があるんだけど、本を正せば全部ライラの派生に過ぎないんだよね。ライラの写本 はそのライラが書かれてるんだけど、普通の人じゃ表紙を開くことすらできなんだよ。ライラについて説明していると夜が明けちゃうから、機会があるたびにちょっとずつ説明していくね」

町中が騒がしくなりはじめ、いろんなところから声が聞こえてくる。

「魔導書を盗んだのは怪盗ジャンクらしいぞ！」

「あの荒くれ者の怪盗ジャンクか!？」

「ジャンクって言ったら変装の名人らしいじゃないか。もしかしたら、この中にいるかもしれないぞ！」

町中に声が飛び交う中、自然と人々の視線がセイとファティマに注がれていた。嫌な予感がする。

そして、セイたちはあつという間に取り押さえられてしまった。見かけない顔っていうことが災いしてしまっただらしい。

「僕は怪盗なんかじゃないよ！」

セイとファティマは腕を強く掴まれ、セイは持っていた魔導書まで取り上げられてしまった。

本を取り上げた男の花人が表紙を開けようとしたが開かない。そして、セイの顔を不信そうに見つめた。

「まさか、この本は魔導書なのか？ いや、こんな子供たちが魔導書を持っているはずがない。どこで盗んだんだ！」

「それは僕の魔導書です、返してください！」

「うるさい黙れ！ こいつらを早く牢屋らっやの中に入れてしまえ！」

牢屋と聞いてセイは脅えた。セイたちはなにも悪いことをしていないのに、どうして……？

セイたちは大勢の花人たちに捕まえられ、引きずられるようにしてこの場を後にした。

地下室の暗くてジメジメしている陰湿な牢屋の中にセイたちは入れられていた。

この牢屋には窓すらなく、牢屋のすぐ前には見張りの男が一人いる。どう考えても逃げられるような状況ではなかった。

「どうして僕らが掴まらなきゃいけないんだろ。花人たちはあんなに綺麗で美しいのに、僕の話はぜんぜん聴いてもらえなかった」

セイが肩を落として冷たい床に座っていると、ファティマがセイに肩を寄せて座ってきた。

「見た目が綺麗でも心まで綺麗な人とは限らないんだと思うよ。それに花人はノエルのことをあんまりよく思っていないだよねえ。ちなみにノエルって言うのはご主人様みたいな人種のことね」

「なんで僕らが嫌われてるの、花人になにか悪いことでもしたの？」

「過去の歴史の中で花人はノエルの奴隷として扱われていた時

代があつたんだよ。だから、今でも根に持つてる花人は多いわけ」

「じゃあなんで僕をこの町に連れてきたのさ、危ないじゃないか」

「そーゆー偏見はよくないなあ、花人にだってノエルに好感を持つてる人だっているよ」

「現に僕らは捕まえられじゃないか」

セイの声は沈んでいた。

捕まえられたのも事実だし、話を聞いてもらえなかったのも事実だった。セイからしてみれば花人はもういい人には思えない。

落ち込んでいるセイの背中をフェアティマがポンと軽く叩いた。

「まあ元氣出して、きつとなんとかなるよ！」

「そうだといけれど……」

なにも悪いことをしていないのだから、そのうちここを出してはもらえるだろう。だが、セイは元氣にはなれなかった。異世界の冒険はもつと楽しいものだと思っていたのに、これじゃあもとの世界にいた方がよかつたかもしれない。どこに行っても自分は不幸なんだとセイは心の中で思った。

しばらくしてから、白い薔薇の花をさりげなくあしらった服を着て、手には装飾の美しい杖を持つといういでたちの男が現れた。その男は牢屋の見張りをしていた花人と何やら話をして、話が終えると見張りの花人はどこかに行ってしまった。

残った男が杖を突きながらの牢屋に近づいて来る。長身です

つきりとした身体つきで、とても美しくて清楚な顔立ちの顔に
ついた両目は閉じられていた。もしかしたら、この人は目が見
えないのかもしれない。

牢屋の前に立った男は何やらセイたちに話しかけているのだ
が、セイには聞いたこともない言葉で何を言っているのかさっ
ぱりだった。

「ファティマ、あの人なんて言ってるの？」

「言葉わかんないの？ ああ、そうか、本を取り上げられ
ちゃったからか。とにかくあの人がここから出してくれるんだ
って、早く出よう」

男が牢屋の鍵を開けてくれて、セイはファティマに手を引か
れて牢屋の外に出た。すると、そこで男がセイに話しかけてき
た。

「申し訳ありませんでした。これをお返しいたします」

今のは何て言ったかセイにも理解できた。でもどうして？

男は首に提げていたバッグの中から一冊の本をセイに手渡し
た。取り上げられたあの本だ。

ほっとした顔をしたファティマはセイの顔を覗き込んでため
息を吐いた。

「一時はどうなることかと思っただけど、この本が戻ってきてよ
かったよかった。でも、これからは絶対手放しちゃだめだよ。

この本が近くにないとご主人様はこの世界の言葉がわからなく
なっちゃうんだから」

「なるほど、だからか」

深く頷いたセイは納得した。この魔導書は翻訳機の役目を果たしてくれていたのだ。そうでもなければ、セイが知らない世界の言葉を理解できるはずもなかった。

男は自分の首に提げていたバッグをセイに手渡しながら言った。

「このバッグを差し上げましょう、そんな重い本を手で持っているのは大変でしょうから。わたくしの名前はセシル・ローズと申します。セシルとでも呼んで下さい。それで、二人の名前は？」

セシルはセイとファティマの顔を交互に見て言った。それはまるで目を開けて見ているような動きだった。

「ボクの名前はファティマ、こっちがボクのご主人様のセイだよ」

「ご主人様と申されましたが、召し使いなのでしょうか？」

セシルの顔色が曇り、セイは花人がノエルの奴隷だった話を思い出した。

「とんでもないです、あだ名みたいなものです。僕とファティマは友達で一緒に旅をしているんです」

「お二人はこんなにお若いのに、二人だけで旅を？」

少しびっくりした表情をしたセシル。そして、彼は「こんな」と言った。それはまるで見えているとしか思えない発言だった。

「あの、セシルさんは僕たちのこと見えているんですか？」

セイがそう聞くとセシルは笑って答えた。

「この目でもものを見ることはできません。けれど、わたくしには物の形やその位置が手に取るようにわかるのですよ」

続けてセイはもうひとつ質問をした。

「じゃあ、その杖はなんで持つてるんですか？」

「ああ、これはわたくしが魔導師だからですよ。この杖が魔法を使う時に力を増幅させてくれるのです」

セイが他の質問をしようとする、その前にファティマが口を開いた。

「ボクたちお金なくて泊まる場所がないんだけど、セシルの家に泊めてよ」

「よいですよ、わたくしの職務は困っている方に力を貸すことですから」

「やったねご主人様、これで今晩は困らないねっ！」

「うん、そうだね」

そのままセイたちはセシルに連れられて、階段を上り建物の外へ出た。

辺りは黄昏色たそがれに染まり、真っ赤に燃える陽が沈もうとしていた。町を歩く人通りも少なくなってきた、もうすぐ夜闇が世界に下りてくる。

夕暮れの中、セイたちは大きな通りを歩いた。その途中でセイがどこに向かっているのかとセシルに尋ねると、彼は前方に聳そびえ立つ建物を指差した。

「あれがわたくしの務めるハナン聖堂。わたくしはあその司教でしてね」

セシルは教会の司教だったのだ。そう言われてみればセシルからはそんな物腰が感じられる。落ち着いていて誠実そうな人柄が全身から出ている。この時やっぱり花人にもいるんな人がいるんだとセイは考え直した。

この道から見える聖堂は石造りで大きくて、二階部分には光を通す巨大なステンドグラスがあり、聖堂全体を白と赤の薔薇の花が覆いつくしていた。

聖堂の中はとても静かで　　と思いきや、聖堂の中は大勢の人々でごった返して、うるさくて耳を塞ぎたいくらいだった。

セイたちが赤い絨じゅうたん毯の上を歩いていると、すぐにシスターがやって来てセシルに声をかけた。

「こんな大事な時にどこにいらっしやっていたのですか、聖堂からくれぐれも出ないように申し上げておいたはずですが？」
「すまない、この事件のせいで不審人物として捕らえられてしまったこの子たちを引き取りに行っていたのだよ」

シスターはセイとファティマに向かってニツコリと微笑んだが、すぐに恐い顔になってセシルを睨みつけた。

「わざわざ司教様がお出向きになられなくても、他の者に頼めばいいことではありませんか。ライラの写本　が盗まれると　いう大事件の最中なのですよ！」

「確かに　ライラの写本　が盗まれたことはわたくしも一大事だと思いますが、わたくしたちが慌てても仕様がなない。盗まれた写本を取り戻すのはわたくしたちの仕事ではなく、治安官の仕事ですよ」

「だからと言って私たちがなにもしないわけにはいきません。あのライラの写本を守るのは我々の務めのですから」
「ですが、今はなにもできることはありません。取り敢えず、ここに集まった人々に帰ってもらい、シスターたちには普段の仕事に戻ってもらいましょう」

セシルは人々が集まる輪の中に入って行ってなにやら話すと、同じ制服を着た治安官たちが聖堂の外に不機嫌そうな顔をして出て行き、シスターたちはバラバラに消えていった。

セイがセシルの方に歩いて行こうとすると、セイよりも早くさっきのシスターがセシルに駆け寄った。

「なぜ治安官まで帰したのですか!? 治安官たちは捜査のために来ていたのですよ!」

「なぜと言われましても、彼らはこの場に不必要な人間でしたから、こんなところで調査などしていないで怪盗本人を探すように言って帰ってもらいました」

シスターは絶句したようすで、そのまま何も言わずにセシルに頭を下げて足早に消えてしまった。

セイはすぐにセシルに駆け寄って彼の顔を見上げた。

「本当に治安官たちを帰してよかったですか?」

「ええ、神聖な聖堂であも騒がれては迷惑でしたし、怪盗はまたここに来ると思いますから、あのような輩がいては入りづらいでしょう」

「えっ?」

セシルの言葉にセイは心底驚いた。

もしかして、セシルは一人で怪盗を捕まえる気なのだろうか？

セシルはセイが首から提げているバッグを指差して言った。

「先程の魔導書をわたくしに貸していただけませんか？」

「はい」

魔導書をバッグの中から取り出しセシルに手渡すと、彼は魔導書の表紙に手をかけて力を込めているようだった。

「やはりわたくしには開けられない」

「どうのことですか？」

「力のある魔導書は普通の人にはページを開くことはできません。ある一定の力を持った魔導師でなければ開くことはできませんし、中には力を持っていても開いてくれない魔導書もあります。持ち主を自ら選ぶ魔導書もこの世界にはあるのですよ。つまり、早い話が盗まれたライラの写本はわたくしにしか開けないということです。それを怪盗が知ればまたここに来る可能性は高いでしょう」

「でも開かないから捨てちゃうかもしれないじゃないですか？」

「開かない魔導書はそれだけ価値のある魔導書です。捨てるなどほしくないでしょう」

優しく微笑んだセシルはセイに魔導書を返して歩き出した。

「こちらへいらっしやい、部屋に案内して差し上げます」

セイはセシルに質問したいことがまだあったのだが、タイミングを逃してしまったので、また次の機会にでも訊いてみるこ

とにした。

セイとファティマは同じ部屋に案内された。つまり、セイは今晚ファティマと同じ部屋で寝ることになってしまったのだけれど、セイは女の子と同じ部屋で寝ることに少し緊張していた。だから言って部屋を分けて欲しいとは、ずうずうしい気がして結局セイは言えなかった。

夕食をこの部屋で食べて、その後は特にすることがなかった。そのため自然とセイはファティマと会話をするのだが、セイは密室で二人きりにされることに緊張を感じた。

セイがなにをしゃべろうかと考えていると、ファティマの方からセイに話しかけてきた。

「どお、この世界は気に入った？」

「わからないよ、まだ来たばかりだし。でも、疲れたってことはだけは言えると思う」

「疲れたって感想はないと思うよ、なんかつまんなそうに聞こえるう」

「だって、こんなに歩いたの何年ぶりだし、知らないものをいっぱい見たから疲れたんだよ。もう寝よう、つかれたから」

「つまんないのお」

セイはファティマの声を無視してランプの火を消すとベッドの中に潜った。

しばらくして、誰かがセイのベッドの中に潜り込んできた。

「ファティマ？」

「うん」

「うんじゃないよ、ベッド二つちゃんとあるんだから自分のところまで寝なよ」

「別にいいじゃん、二つあるんだからどっちで寝ても」

「そういうことを言ってるんじゃないでしょ」

セイがベッドから起きて隣のベッド移動しようとする、フアティマも枕を持ってセイについてきた。

「ついて来ないでよ」

「ご主人様はボクのこと嫌いなのです？」

「そういうことじゃなくて、君は女の子だから……その……」

「女の子だどご主人様は偏見するの？ そーゆーのはよくないよお、世界に存在する全てのは平等なんだから」

「この話はおしまい。ちよつとトイレ行つてくる」

無理やり話を終わらせたセイは足早に部屋を出た。その時に人とはったりあつてもいいように魔導書を入れたバッグもいちよう持って出た。

廊下は数多くのランプで照らされていて明るかった。だが、ランプの明かりは蒼白くて、火でなくて別のものであった。静かな蒼い光は明る過ぎず夜にはちょうどいい明るさに思えた。

部屋を出たついでに本当にトイレに行こうとセイは思ったが、トイレがどこにあるかわからず迷っているうちに聖堂の外に出ってしまった。

空を見上げると星々が騒がしく瞬いていた。こんなにたくさん星が輝く夜空を見たのははじめてかもしれないとセイは静

かに思った。

空を眺めていると月らしきものもあった。それもセイのいた世界とぜんぜん変わらない月だった。セイはこの世界の月は二つあったり色が違うんじゃないかと思っていたので少し残念だった。

夜の町を歩いてみるのもいいかもしれないと思い、セイはぶらぶらと歩き出した。

鈴蘭すずらんの花みたいなランプをつけた街灯が道路の脇で闇を照らし、それ以外にもあちらこちらで明かりが灯されて、この町の夜はとても明るかった。

町を歩く人の中には顔を赤くして足取りの覚束ない人や、薄手の服を着た綺麗な女の人がいた。昼間とは歩いている人たちの雰囲気が違う。

セイが首をいろんな方向に回して辺りを見てみると、後ろの方からセイは呼ばれたような気がして振り返った。

「おい、子供がこんな時間になにやってんだ？」

顔を真っ赤にしたオジサンだった。顔は犬のようで全身がボサボサの毛に覆われている。獣人の中の犬人だ

「別に用はありません。ただ、町の中を散歩してただけです」

「こんな夜更けに子供一人でか……よく見ると上手そうな顔してるな」

犬人は舌でベロリと唇を濡らして、突然セイの腕を掴んできた。

「離してください！」

「ちょうど腹が空いてたんだ」

「ま、まさか本当に僕を食べる気？」

セイが脅えた声で聞くと、犬人は鋭い牙を覗かせながら笑った。

本当に食べられると思ってセイが目をつぶった時、近くで凜とした女の人の声があった。

「この子嫌がつてるじゃない、放しなさい！」

セイが目を開けると、セイのことを掴んでいたモジャモジャの手が細くて綺麗な褐色の手に掴まれていた。その手から視線を上げていくと、ベールで顔を隠したペリーダンサー風の人がいた。それは褐色の肌を薄手の衣装で隠したペリーダンサー風の女性だった。

ダンサー風の女性はセイの腕から犬人の手を引き剥がし、そのまま犬人の腕を捻った。

「イタタタ……」

犬人は情けない声をあげて、女性に腕を放されると地面にしがみ込んだ。

「俺が悪かったよ、ちょっと小僧をからかっただけじゃないか」

「ふん、あんた子供をからかうなんて最低だね」

相手を見下しながら女性が強い口調で言うのと、犬人は怒ったようにすて吼えて女性に飛びかかった。けれど、女性は踊りでも躍るように軽く犬人をあしらうと、艶めかしい脚で犬人の股間に一発くらわした。

もの凄い表情をした犬人は吼え回りながらぴよんぴよん飛び跳ね、女性に向かって叫んだ。

「覚えてるよ、今度会った時はおまえを食ってやる！」

「おう、いつでもアタシは相手してやるよ！」

「クソーツ！」

犬人は股間を押さえながら去って行った。ああいうのを負け犬の遠吠えって言うんだと思う。

「大丈夫だったかい坊や？」

両膝に手を突いて背を屈めた女性にそう言われてセイは取り敢えず頷いてみた。

「そりゃーよかった。お礼するつもりがあるんなら、今度アタシの踊りを見に来てちょうだいって言いたいとこだけど、相手が子供じゃねえ。じゃ、機会があったらまたね坊や」

歩いて言ってしまうおうとする女性の背中にセイは声をかけた。

「あの、名前は？」

「アタシの名前はアズイーザ。よい子はさっさと家帰って寝な」

そう言っただけで後ろを振り向いたアズイーザはセイに投げキッスをして消えてしまった。

セイはその場で少し惚とぼけてしまったけど、辺りに人だかりができてくることに気づき、顔を真っ赤にしてこの場から逃げるように走り出した。

あんなタイプの女性に会ったのははじめてだった。澁はつ刺しな精神たぐまとしなやかな身体を持っている遅たい女性だった。また会

えることをセイは心の中で誓った。

そして、朝になったらあの人のことを探すことを決意し、い
い忘れたお礼も言うことにした。

セイが心を弾ませながら走っていると、すぐに聖堂の前まで
来てしまった。

夜の街の危険さが身に沁みてわかったセイは、今日は部屋に
帰ることにした。

部屋に戻るとファティマが寝ないでセイのことを待っていて
くれていた。

「遅いから心配しちゃったよ、これから探しに行こうかと思っ
てたんだよお」

「ちよつと夜の街を散歩してたんだ」

セイがニコニコしながら言うと、ファティマは顔を赤くして
膨らませた。

「うつそ〜っ、ボクを置いて楽しいことしてきたの？ 信じら

れないよお、ご主人様のイジワルう〜！」

「別にイジワルしたつもりはないんだけど……」

「いいもん、いいもん、心配して損しちゃった。もおボクは寝
る、おやすみご主人様」

「怒らないでよ」

声をかけたのに無視された。ファティマは返事もしないでセ
イに頭を向けている。セイはファティマをそんなに怒らせたつ
もりはなかった。

「怒らないでよ、別に楽しいことがあったわけじゃなし、犬男

に襲われそうになつて危険な目にだつて遭つたんだよ」

「危険な目!？」

「ファティマが目を丸くして飛び起きた。」

「ご主人様が危険な目に遭つたの？ 駄目じゃん気をつけなきゃ。これからはいつもボクと一緒にいるんだよ」

「僕を子ども扱いしないでよ。ファティマだつて子供だし、ファティマが僕を守ってくれるの？ 昼間だつて僕らが捕まつた時、なんの抵抗もしないで掴まつてたじゃないか」

「ボクから見ればご主人様なんて赤ちゃんだよ。ボクこう見えても千年以上生きてるんだから。それにいざとなつたボク強いんだよ」

「あ、あ、あのさ、今千年つて言つたよね？」

「うん、千年以上つて言つた。う〜んとねえ、だいたい一三〇〇歳くらいだったかなあ？ いっぱい年取ると数えるのがめんどくさくなるんだよねえ。ご主人様も年取つてみるとわかるよ」

「セイはそんなに生きないから一生わからないと思う。だが、セイはファティマが千年以上も生きてることに心底驚いた。人は見た目によらないって言うけど、その言葉がぴつたりだ。ファティマが嘘をついていなければの話だが。」

「セイは手を叩いてさっきの女性のことを思い出した。」

「明日になったらある女の人を探したいんだけどいいかな？」「女の人？ ま、まさか、もしかして早くも外に恋人を作ってきたとか？」

「違うよ、犬男に襲われたのを助けてもらっただよ。お礼言
うの忘れちゃったし、もう一度会えたらいいなと思って」

「ほお、もしかして恋？」

「違うよ。とにかく明日になったらその人を探しに行くから。

おやすみ」

セイは強引に話を治めてベッドに潜った。

今日はいろいろなことがあった。あつちの世界にいたら一生
出会えなかった出来事をセイは体験した。

少し口元を緩めるセイ。そして、いろいろなことを考えてい
るうちに、セイの意識は闇の中に落ちていった。

翌朝、セイはずいぶん早く起きてしまった。

ベッドから起きたセイの身体を酷い筋肉痛が襲う。

すぐにファティマも目を覚ましてセイの身体に抱きついて来
た。

「ご主人様おはよ！」

「ううっ」

セイの身体を激痛が襲う。

「どうしたのご主人様？」

「筋肉痛」

「運動不足なんだよ。だめだよ普段から運動してなきゃ」

セイはベッドに引き返して寝転んだ。もう動くの嫌だった。

しばらくセイが横になっていると、シスターが訪ねて来て朝
食の用意ができたことを告げた。

セイはしかたなく筋肉痛の身体に鞭を打って食堂に向かった。筋肉痛を庇うセイの歩き方がカッコ悪く、シスターが口を押さえて笑いを押し殺し、ファティマは盛大に指差して笑っていた。セイは顔を赤くして足を速めた。

食堂でセシルを含めた数人のシスターたちと朝食を食べた。セイがこんなに大人数で食事をするのは久しぶりかもしれない。ずっとセイは自分の部屋でひとりで食べることが多かったのだ。食事も終わり、シスターたちがバタバタと後片付けをしている中、セシルは朝に似合った爽やかな表情で手紙を読んでいた。セシルは目を使わずに手紙まで読むことができるのだ。

「誰からの手紙ですか？」

とセイが尋ねると、セシルは飲み物を一口飲んでから爽やかに答えた。

「予告状ですよ、怪盗ジャンクからの」

ガシャン！

近くで食器類を運んでいたシスターが思わずお皿を床に落としてしまった。そして、落としたお皿には目もくれず、セシルの前に立ってテーブルを両手で強く叩いた。

「司教様、どうしてそんな大事なお手紙のことを皆に話さないのですか!？」

「いや、みなさんお忙しそうでしたし、そんなに慌てることではないでしょう」

「な、なにを仰ってるのですか、十分慌てる事態です!」

「慌てるも空回りしてしまうだけですよ、ティアナはもう少し

落ち着きを持つた方がよいですよ」

「司教様が落ち着き過ぎなのですよ！」

ティアナと呼ばれたシスターは昨日もセシルに対して怒っていたような気がする。二人は犬猿の仲なのかもしてない。

予告状の話を聞いたファティマがセイのわき腹を肘で突付いてきた。

「予告状だって、なんかドラマチックだね」

「ドラマチックとか言ってる場合じゃないでしょ」

セイが呆れた顔して言ってもファティマには効果がないらしく、ファティマは予告状に胸をときめかせていた。

「すっごいよね、予告状を出すなんてカッコイイよね。ところでなに盗むんだろうね？」

「はいでいるファティマにセシルが予告状を手渡した。」

「どうぞ、興味がおありでしたらお読みください」

「わぁ〜い、やったね、予告状なんてはじめて読むよ」

予告状を開けようとするファティマの手をセイが止めた。

「ファティマ待つて、セシルさん本当に読んでいいんですか僕らが？」

「ええ、聖堂の外に漏らさないとお約束してくださいれば、特に治安官には内密に」

セイは少し首を傾げたが、ファティマはそんなことなど気にせず予告状を読みはじめた。

「え〜と、夜間の町に鐘が九つ鳴る時、薔薇の黙示の鍵をいただきに参上する 怪盗ジャンク。だってさ」

セシルはテーブルの立てかけていた杖を持つと、セイとファティマに説明をはじめてくれた。

「薔薇の黙示 とは盗まれた ライラの写本 の正式名称。そして、鍵とはこの杖のことです。薔薇の黙示 はこの杖を持つ者にしか開くことができないのです」

「僕たちのそんな大事な秘密を教えて平気なんですか？」

「この杖が鍵になっていることは、この町の者でしたら誰でも知っていることですから」

セイがふと横を見ると、ファティマが犬みたいに予告状に鼻を付けてクンクン匂いを嗅いでいた。

「何やってるの？」

「セイも嗅いでみるう？ いい匂いがするよ」

予告状を渡されたセイも匂いを嗅いでみたが、微かな匂いがあるだけでよくわからなかった。この町中にいろんな花の匂いが立ち込めているために、鼻がよく利かなくなってしまったのかもしれない。それにこの聖堂の中は薔薇の匂いがこもっているのも、それも原因かもしれない。

手紙をセシルに返してセイはある質問をした。

「盗まれた本には具体的になにが書かれていたんですか？」

「申し訳ない、それはお答えできないのですよ」

まあ大切な物らしいから、内容を教えてくれないのも当たり前かもしれない。

内容と言えはセイの持っている魔導書はセイには読むことができない。

セイがバッグから魔導書を出してテーブルの上に乗せると、セシルがセイに話しかけてきた。

「わたくしには開けることができませんでしたが、やはりあなたは魔導書の選ばれた？」

「はい、僕には簡単に開けられるんですけど」

セイが表紙をめくって見せるとセシルは微笑ましい表情をした。

「あなたがこの魔導書の所有者ということですね。ところでこの魔導書はどのようにして手に入れたのですか？」

「拾いました、そこにいるファティマと一緒に」

「ボクはセイに拾われましたあゝ」

両手を挙げてブラブラさせるファティマをセシルは見つめて、次にセイの顔を見つめて不思議な顔をした。

「どうということなのですか？」

「僕に聞かないでください。聞くならファティマ本人に聞いてくれますか。僕にもよくわからないことが多くて……」

セシルが再びファティマに視線を向けると、ファティマは胸を張って話しはじめた。

「ボクの正体が知りたいって顔してるね、うんうん、答えて進ぜよう。ボクはズバリその魔導書の精霊みたいなもんかな？」

自分で説明しておきながら、なぜか疑問系？

「ボクねえ、最近物忘れが激しくて……あはは」

頭の後ろに手を当てながらファティマは明るく笑って見せた。この時、セイは心の中で少しだけ思ったことがある。 マヌケ。

でも、愛嬌あいきょうのある仕草だった。

「僕からファティマに質問なんだけど、この魔導書の名前は？」

盗まれた魔導書にも 薔薇の黙示 という名前があったのなら、セイの持っている魔導書にも名前があるはずとセイは考えたのだ。

「あー、その魔導書の名前はボクと同じ ファティマの書だよ」

ファティマという名前を聞いて少し考え込むセシル。そして、静かに口を開いた。

「……確か アウロの庭 と呼ばれていた砂漠地帯にそのような名の大魔導師がいたと記憶していますが、まさかこの魔導書はその？」

少し驚いた顔をしているセシルと一緒にセイもファティマの顔を見つめた。

「……ボク？ ボクってそんなに有名なかなあ？ でも、いっどこでボクが書かれたか覚えてないんだよね、これが……あはは」

ファティマは自分に関することはあまり覚えていないらしいけれど、ファティマが持つこの世界の知識は多い。の割になんてこんな軽い感じの女の子なのだろうか、落ち着きがない。

しばらく落ち着いたところでセイは昨晚出会った女性 アズイーザを探しに行くことをセシルに告げた。するとセシルもついていくと言い、特に断る理由もなかったので、セイたちは

三人で町の中を散策することになった。

町の中は昨日と変わらない。ただひとつ違っていたのは街中に人だかりができていたことくらいだった。

セイが人だかりを掻き分けて、その中心で見たのは喧嘩をしている二人だった。その二人にセイは見覚えがある。一人目は昨日セイを襲った犬男、もう一人は顔をベールで隠したアズイーザだった。

「さっそくアタシに喧嘩を売りに来るとはいい度胸じゃないかい！」

「今日は痛い目見せてやるぜ！」

犬男が吼えると、彼はポケットの中からタマゴを取り出して地面に叩き付けた。すると、割れたタマゴから煙がモクモクと昇り、その煙の中に巨大な影を映し出された。

セイの横にいたファティマがその影を見て驚いた表情をした。「マジカルエッグ……それもスゴイのが入ってる。ちなみにマジカルエッグっていうのは、タマゴの中に物体を封じ込めた物で、強大な力を持つ怪物を入れるには、それなりのお……」

ファティマは説明の途中で首を上へ向けて行く。そして、ここにいた全ての人たちの首が上へ向けられる。タマゴから出てきたモノが、それほど大きなモノなのだ。

岩みたいな鱗に包まれた長くて巨大な物体が天を突いて伸びている。簡単に例えるなら、ゴツゴツした皮膚を持つミミズ。その巨大生物のあんな小さなタマゴの中から現れたのだ。

ファティマが巨大ミミズを見ながら呟く。

「ワームちゃんだね。でも、一〇メートルくらいの小物でよかつたねえ」

「あれが小物!？」

セイが驚いた声を出すと、ファティマは大きく頷いた。

「うん、普通は五〇メートルくらいあるからね」

ワームが身体をくねらせながら動くとき、近くで腰を抜かしていた犬男を下敷きにして押し潰した。その時に耳を覆いたくなくなるような絶叫が聴こえて、セイの足はすくみ上がった。

早く逃げなきゃ！

そう思って辺りを見回すと、すでに集まっていた人々は叫びながら逃げ出して、この場に残っていたのはセイとファティマとセシルと、それにアズイーザだけだった。

逃げ遅れた。

どうすることもできずセイがその場に立ち尽くしていると、信じられないことが目の前で起こってしまった。

それは一瞬だった。ワームは一瞬にして姿を消してしまったのだ。それを見たセイは目をパチパチさせるだけだった。

ワームの尻尾が建物を壊し、セシルが杖を構えてワームに向かって行こうとしたその時、ワームは一瞬にして消えてしまったのだ。

分厚い本を開いたアズイーザが何かを唱えた次の瞬間に、ワームはその厚い本に吸い込まれるようにして消えてしまった。それだけおしまいだった。

セイのすぐ横でファティマが何時になく真剣な顔をしていた。

「あの人、魔術師だよ。それもすっごい魔導書を持つてる」

そう言ってファティマは身体を震わせ、その顔色は少し悪い。すぐにこの場を立ち去ろうとしたアズイーザの腕を掴んだのはセシルだった。

「少しお話がしたいのですが、それは魔導書ですね？」

「アタシは忙しいから行かせてもらうよ」

アズイーザはセシルの手を強引に振り払って走って行ってしまった。セシルは無理に追おうとせずにその場に立ち尽くした。

ワームの一件の後、三人はすぐに聖堂に戻ってきた。そして、セイとファティマはセシルに話があると言われてセシルの部屋に案内された。

家具の少ない片付いた部屋にあるソファアにセイとファティマが座り、セシルはデスクに座りながらセイに質問をした。

「あの女性に昨晚会ったと言っていましたか、名前は聞いていますか？」

「ええと、アズイーザと名乗りましたけど、それがどうしましたか？」

「アズイーザですか……名前は違いますが、おそらくあれは生き別れになったわたくしの姉でしょう。会った瞬間にわかりました」

セイとファティマは驚いた顔をして、セシルは話を続けた。

雪の積もる人里離れた山岳地帯にその家族はひっそりと暮ら

していた。

その家系は代々魔導師の家系であり、生まれて来る子供は魔導師の才能を色濃く受け継ぐ子供であった。そして、その家には二人の子供がいた。姉の名をアリア、弟の名をセシルと言った。

二人の子供はこの家系の歴代の魔術師の中でも群を抜いた才能を持ち、一〇歳になった姉のアリアは家にある魔導書を全て開くことができたのだ。

その日はいつもと変わらぬ朝だった。

セシルは朝一番に精霊に祈りを捧げて、それが終わると窓の外を眺めた。

八歳の少年の背には窓の位置は高く、背伸びをしたり飛び跳ねたりしていると、姉のアリアがやって来て椅子を窓の前に置いてくれた。

「ありがとうお姉ちゃん」

「どういたしまして」

アリアはニツコリと笑うと、セシルと一緒に窓の外を眺めた。白銀の雪が深々と降っている。これから寒くなってくると、この山は外からの侵入者を拒む。この家族はそんな厳しい自然の中に住まいを構えて暮らしていた。

「もうすぐ朝食ができるから手伝いに行きましょう」

アリアはそう言ってセシルの手を取って椅子から下ろした。

そして、二人は台所に駆け足で向かった。

台所ではセイレーンの母メヌエットとノエルの父セトが楽し

そうに食事の準備をしていた。そう、セシルとアリアは違う種族同士の混血児であったのだ。そして、セイレーンの血を強く受け継いだセシルには真つ白な翼が生えていた。

ノエルであるセトの住んでいた村では他の種族と一緒にいることをタブーとして、もしも他の種族と一緒にいることがあれば、極刑を下されて最悪の場合は火あぶりの刑にされるような村だった。だから、その村を飛び出してこんな雪山に住んでいるのだ。

そして、いつもと同じ朝食の風景が訪れるはずだった。

ガラス窓が何者かに割られ冷風が部屋に吹き込み、窓から大勢の獣人たちが家の中に侵入してきた。

涎よだれを垂らした獣人たちから子供を守るようにメヌエツトは二人の子供を胸に抱きかかえて後退した。そしてセトは家族を守るように獣人たちの前に立ちはだかった。

獣人たちを分け入って一人の少女が姿を現した。白銀の髪を持つ左右色の違う瞳を持つ少女。

「ドゥローの禁書 はどじじゃ？」

見た目よりもずっと大人びた声。その言葉を聴いたセトは驚愕した。

ドゥローの禁書 とはこの家系に代々伝わる魔導書のことだ、その書物の存在を知る者はこの家の者以外はいないはずであった。その魔導書は大変危険な力を持つために門外不出の書であったのだ。だから、その名を銀髪の少女が知るはずがなかった。

「ドゥローの禁書 など聞いたことがないな」

セトは表情一つ変えず少女に言った。しかし、少女は信じなかった。

「書を渡せば危害を加えるつもりはない。じゃがな、渡さぬと申すのなら命ないものと思え」

「ないと言ってるだろう」

口ではそう言ったものの、セトは内心では嘘をつくことが意味を成さないことを悟っていた。

獣人たちは目をギラつかせ、子供たちを舌舐めずりしながら見ている。子供たちは脅え母の胸で振るえた。もはや、緊張の糸ははち切れる寸前であった。

家族を守るか、魔導書を守るか、セトはどちらも守らなければならなかった。そして、少女が獣人たちに合図を送ったのと同時にセトの身体も動き、彼は呪文の詠唱をはじめた。

「風よ、見えない鎖となりて敵を捕らえよ エアチエー
ン！」

巻き起こる風によって食卓に乗る皿が地面に落ちて割れ、風はそのまま獣人たちの身体を拘束した。傍目からはなはためにが起きたのかわからないが、獣人たちの身体は風の鎖によってぐるぐる巻きに去れ、唯一できる動きは両足で飛び跳ねることぐらいだ。そんな中、銀髪の少女だけは身体を自由に動かすことができた。風の鎖は彼女を捕らえることができなかつたのだ。

「汝なれの魔法など妾には通用せぬ」

少女が蒼い月のような笑みを浮かべて次の瞬間、セイとは家

族に向かつて叫んだ。

「早く逃げるのだ！」

もはや遅かった。獣人たちを拘束していた魔法をいつの間にか解かれ、獣人は母と子に襲い掛かるうとした。それを止めるため獣人たちに魔法を放とうとしたセトの胸を鋭いなが貫いた。

銀髪の少女が持つ槍がセトの胸を貫いていた。長い柄を伝って少女の手を染める紅い鮮血。それを目の当たりにしてしまった家族は言葉を失った。逃げることも忘却した。

立ち尽くす母の手を引くアリア。

「お母さん早く！」

我に返ったメヌエツトが子供に手を引かれて走り出そうとしたその時、獣人の鋭い爪がメヌエツトの背中を抉えぐった。

苦痛に顔を歪ませながらメヌエツトは二人の子供に向かつて叫んだ。

「早く逃げなさい！」

メヌエツトに襲い掛かった獣人は彼女の白い羽をもぎ取り、鋭い歯を立てながら腕に脚に噛み付いた。

血に染まる母を見ないようにしてアリアは弟のセシルの手を引いて逃げ出した。

玄関ではすでに獣人たちが待ち伏せしており、二人は地下室に逃げ込んでドアに鍵を掛けて立てこもった。

地下には幾つもの本棚の中にたくさんの魔法に関する書物が並べられ、中には魔導書もあったが、アリアが探している魔導

書は本棚にはない。

顔を真つ青にしてなにも言わず震えるセシルの手を引きながら、アリアは地下室の石壁を手で探りながら微妙に出っ張っていた石を引き抜いた。すると壁が音を立てながら動き出し、左右に開かれた壁の中に小さな部屋が現れ、その部屋の中心には小さな箱が置かれていた。その箱の中に目的の物が入っている。アリアは箱のふたに手をそつと掛けて力を込めた。この箱はこの家の血を引く者にしか開けることのできない箱であった。そして、箱はアリアを認め、静かにふたが開いた。その中に入っていたのが、ドウローの禁書 であつた。

アリアもセシルも、ドウローの禁書 の存在は聞かされていなかったが、そこになにが書かれているのかは聞かされていない。ただ、その書は大変危険な物であり、命に代えても守らなければならぬことは知っていた。

ドウローの禁書 を手に入れたアリアは再び石壁を手で探つて石を引き抜いた。すると、また別の壁が左右に開け、外へと続く人工洞窟どつくつが現れたのだ。

激しい音を立てて地下室のドアが壊され、獣人たちが流れ込んできた。二人の子供は明かりも持たずに暗い洞窟の中に駆け込んだ。

暗い洞窟の中に足音が響き渡り、獣人たちが唸り声をあげながら追ってくる。今はひたすら逃げるしかなかった。出口を抜ければどうにかなるかもしれない。

真つ白な光が次第に視界の中に広がっていく。そして、つい

に二人は洞窟を抜けた。しかし、そこには槍を構えた銀髪の少女が待っていた。

雪の降る白い世界に白銀の髪が溶けていた。

「童子を殺めたくない、ドウローの禁書 を渡すのじゃ」

伸ばされる少女の手。後ろからは獣人たちが迫っている。アリアは魔導書を胸に抱えて走り出した。その背後でセシルの叫びが聞こえた。

「お姉ちゃん助けて！」

アリアが後ろを振り返ると、セシルの身体は獣人たちに捕らえられていた。そして、アリアの目の前でセシルの純白の羽が無残にももぎ取られた。

耳を覆いたくなるようなセシルの叫びが白銀の世界に木霊した。だが、アリアは弟を置いて逃げた。

アリアに置いていかれたセシルは涙を流しながら獣人たちの手を振り切って逃げようとした。だが、その顔の前に鋭い爪を持つ獣人の手が振り下ろされた。

顔を抑えてうずくまるセシルは幼くして死を覚悟した。

暗闇に包まれたセシルの腕に獣人が噛み付く。

「その童子に構うな、魔導書も持って逃げた童を追うのじゃ！」

セシルは少女の声とともに自分の周りにいた獣人が去って行くのを感じた。だが、もう遅かった。セシルは動くこともできず、雪の中に身体を埋めながら意識を失った。

「わたくしは姉を恨んではいませんよ、姉は正しいことをしたと思います」

そう語ったセシルにファティマが怒鳴った。

「弟がバカなら姉もバカだね。弟を置いて逃げるなんて酷すぎるよ！」

難しい顔をするセイはなにが正しいのかわからなかった。確かに弟を置いて逃げたのは酷いと思っただけだ……。

「家族を犠牲にしても守らなきゃいけない魔導書だったんだと思っ」

静かに言ったセイの顔をファティマが顔を膨らませて見つめた。

「だからって弟を置いてくなんて酷いよ、サイテーだね、最低セシルのお姉ちゃんは自分が逃げたかっただけなんだよ、死ぬのが怖かったんだよ、きつと」

「姉のことを悪く言わないでもらいたい」

デスクに両手をつけて立ち上がったセシルの物腰は静かでもと変わらなない。しかし、その内にはファティマに対する怒りが込められていた。そのことを感じたファティマは少し肩をすくめてセイの身体に身を寄せた。

静かに座ったセシルは再び話をはじめた。

「雪の中で気を失ったわたくしは運良くすぐに人に見つけられて一命を取り留めました。そして、身体の傷も高名な魔女医によつて跡形もなく消してもらいましたが、背中に生えていた羽を失い、喰い千切られた左手は切除して義手となり、両目は光

を失いました。その後、わたくしはこのハナン聖堂の前司教に引き取られました。そして、今に至る訳です」

セイはセシルの話全てに驚いた。セシルに起きた過去の出来事やセシルが花人ではなかったこと。そして、話の中に出てきた白銀の髪を持つ少女が頭の中に引っかかった。

ハナンの町は夜を向かえ、ハナン聖堂の中ではシスター総出で見回りが行われていた。セシルは本当に治安官に怪盗ジャックからの予告状のことを知らせなかったのだ。そして、セイとファティマはセシルに怪盗を捕まえる手伝いをして欲しいと頼まれていた。

怪盗の目的はセシルの持つ杖であり、彼はセイとファティマと一緒に自分の部屋に閉じこもっていた。

部屋の外では二人のシスターが見張りをし、扉と窓にはしっかりと鍵が掛けられていた。

もうすぐ町の鐘が九つ鳴る。だと言うのにセシルは落ち着きたようすで椅子に腰掛けていた。

セイは内心ドキドキしながらも椅子に腰掛けて冷静になろうとしていた。だが、一番落ち着きのないファティマが部屋を歩き回っているのを見ると、自分の心までが焦りを覚えてくる。

「ファティマ、セシルさんを見習ってじっとしててよ」

「だってもうすぐ怪盗が来るんだよ、ドキドキしちゃうよね」

「この状況を楽しんでどうするの、もっと真剣になつてよ」

「ボクは真剣だよお、頑張つてセシルの杖を守るんだから」

なんでこんな自分たちが怪盗を捕まえることに協力して欲しいと頼まれたのかセイは疑問だった。

「セシルさん、本当に僕たちもここにいた方がいいんですか？」

「ええ、ここにいてください。人数が多い方が怪盗を捕まえることができますから」

「だったら、治安官に来てもらった方がいいんじゃないですか？」

「心配なさらずとも大丈夫ですよ。怪盗は我々の手だけで捕まえて見せますから」

セシルの考えがセイには理解できなかつた。

急に慌て出したファティマが柱時計の前で大声を出した。

「もうすぐ鐘がなるよお！」

町の中心に聳^{そび}える鐘楼の鐘が夜の街に響き渡つた。怪盗は？

セイが息を呑んで待つていると、突然部屋のドアが強クノックされて女性の声が外から聞こえた。

「私です開けてください、ティアアナです！」

シスターティアアナがドアを開けるように要求し、セシルはセイの方を向きながらドアを指差した。

「セイさん、わたくしの代わりに開けてください」

セシルに頼まれたセイはなんの疑問も抱かずにドアの鍵を開けた。すると血相を変えたティアアナが部屋の中に飛び込んだ。

「大変です、見慣れないシスターが聖堂の中に侵入して、何人かのシスターが捕まえようとしたのですが逃げられてしまいました。セイさんとファティマさんもそのシスターを探しに行ってください！」

すぐに言われたとおりセイとファティマが部屋を出て行くことすると、それを凜としたセシルの声が止めた。

「お待ちなさい、行く必要はありません」

そして、すぐに杖を構えて呪文の詠唱をした。

「薔薇よ、その蔓を持って全てを拘束しろ　薔薇呪縛！」

杖に取り付けられた宝玉の中から薔薇たちが飛び出し、その蔓によって全身を縛り上げられたティエルはバランスを崩して床に倒れた。

「なにをするのですか司教様！」

床に倒れるティエルに静かに近づいたセシルは全てを見透かしていた。

「小芝居はわたくしには通用いたしませんよ」

この言葉を聞いてセイはまさかと思った。

「この人が怪盗ジャックなんですか!？」

怪盗ジャックは変装の名人と聞いていた。しかし、目の前にいるのはティアナその人であった。いくら変装の名人だからと言つて、ここまでの見た目と声を真似することができるのだからか？

「司教様も私が怪盗だと思っていらいらしゃるのですか!?　私はティアナです、ですから早くこの薔薇をどうにかしていただけま

せんか？」

「わたくしの目は人よりもよいものでして、あなたがティアナでないことはお見通しです。そして、わたくしはあなたにこの町ではじめて出逢った時に二つのことにすぐに気が付きました。一つは予告状に残っていた匂いとあの時出会った踊り子の匂いが同じだったこと。二つ目はあなたがわたくしの姉であること」

怪盗ジャックとアズイーザとアリアは同一人物であるとセシルは言っているのだ。

床に倒れているティアナが突然笑い出した。

「ふふふ、そうよアタシが怪盗ジャックよ。でもね、アタシはアンタの姉なんかじゃないわよ」

「いいえ、あなたはわたくしの姉アリアです」

「アタシに弟なんかいないわよ」

「わたくしは光を失いましたが、その代わりに素晴らしい“眼”を手に入れました。わたくしにはあなたがわたくしの姉であることが視えている。そして、あなたの持っていた魔導書はドウローの禁書 だと思えます」

ドウローの禁書 と聞いて怪盗ジャックの顔つきが明らか
に変わった。

「なぜその名を知ってるの…… ドウローの禁書 を知っているなんてアンタ何者？」

「わたくしの名はセシル、ノエルの父とセイレーンの母を持ち、
純白の翼を持つ子として生まれました」

「嘘よ、弟は死んだのよ！」

「いいえ、生きています」

そう言ったセシルはおもむろに服を脱ぎはじめ、怪盗ジャックに自分の背中を見せた。そこには縦に入った生々しい傷跡が二つ残っていた。

「わたくしは両親を殺され、姉に置いていかれ、翼をもがれ、光を失った。翼をもがれた傷跡だけは消さずに残し置いたので。しかし、姉のことは怨んでいませんよ、こうしてわたくしの前に現れてくれたのだから」

いつの間にかファティマはセイの背中に隠れて震えていた。

「怖い、怖いよセイ」

「なにが？」

ファティマがなにに対して恐怖を抱いているのかセイにはわからなかった。

床に倒れて身動きを封じられている怪盗ジャックの懐からセシルは一冊の本を抜き取った。その本は表紙と背表紙の厚さ以外の厚さがほとんどないような薄い本であった。そう、この本がドウローの禁書 のなのだ。

「わたくしはドウローの禁書 の内容について父に聞かされていなかった。しかし、姉が街中でワームを魔導書の中に取り込んだのを見て、それがすぐにドウローの禁書 だとわかりました。なぜだかわかりますか？」

誰に問うているわけではなかった。セシルは恍惚こうつこうつとした表情をして自分に酔っていたのだ。そして、ファティマの脅えの原

因は ドウローの禁書 に対してのものではなかったのだ。

「ヤバイよ、セシルヤバすぎ……なんで今まで気づかなかったんだらう」

脅えきつたファティマはセイの背中の服を掴んで震えた。そう、ファティマはセシルに対して脅えていたのだ。しかし、セイにはその理由がまだわからない。

「どうして、セシルさんはいい人じゃないか。なんでそんなに脅えているのさ？」

「ボクには見えるの、セシルの心が壊れているのが」

心が壊れているとはいったどういう意味なのか？

セシルはすでに誰の話も聞いておらず、誰に語りかけるでもなく話をしていた。

「ドウローの禁書 について触れられている書物をわたくしはたまたま見つけることができた それが 薔薇の黙示 ですよ。薔薇の黙示 にはわたくしの興味をそめることが多く書かれています、その中でもわたくしが最も興味を引かれたのは 混沌 についての記述でした」

混沌 とは天地創造よりも、宇宙ができるよりも遙か以前の空間に存在していたモノであり、古の大魔導師は ほんまの物質 と称した。

「わたくしは常日頃から全ての人に救いを与えたいと思っておりました。しかし、この世界をお創りになられた神は人々を救わない。そして、わたくしは全知全能の神ではない。それが悲しくて堪りませんでした。ですがわたくしは 混沌 に出会い、

悟りを得たのです」

セシルは肩を震わせてくつくつと笑っていた。この時、セイにもファティマの脅えがわかったような気がした。

怪盗ジャック セシルの姉アリアが脅えた表情で叫んだ。

「セシル……アンタいつたい何をしようとしてるんだい!？」

「この世界を全て 混沌 に還してしまえばいい。そうすれば、全ての感情は消え失せ人々は救われる。そう、わたくしは全てを無に還したいのですよ。ああ、そして、今わたくしの手元には ドウローの禁書 がある。今こそ ドウローの禁書 の真の力を使う時なのです!」

ドウローの禁書 の表紙がセシルの手によってゆっくりと開かれた。その本の中身は塗りつぶされようにページが真っ黒で、その黒が蠢いていた。

セシルの口元が微かに動いた次の瞬間、床で拘束されていたアリアの身体が ドウローの禁書 の中に吸い込まれてしまっただではないか!?

「わたくしは姉を怨んではいませでした。だからこそ一番初めに救ってあげたのです。さあ、次はあなた方を救って差し上げましょう」

セシルが一步踏み出したところでファティマはセイの腕を掴んで逃げ出した。

「セイ逃げるよ!」

「どうしてセシルさんが……?」

セイにはセシルの考えが理解できなかった。とにかくセシル

のやろうと止めなくていけないような気がした。けれど今は逃げることしかでなかった。

廊下を駆け抜け、セイたちはとにかく聖堂の外に出た。そして、外に出たセイは目の前で聖堂が消えるのを見た。ドウロの禁書 は聖堂をも呑み込んだのだ。恐らく中にいた人々も一緒に呑み込まれたに違いない。

聖堂が消えるのを目撃したものが他にもいた。その者は上空を旋回する翼の生えた馬ペガサスの上から聖堂が消えた瞬間を見た。

「あれが ドウロの禁書 の力が、おぞましき力じゃな」

白銀の髪を夜風に揺らしながら少女は静かな月のように微笑んだ。

夜の町は騒然とした。

聖堂が突如消失したかと思うと、その周辺にあった木々や家々人々までもが消失してしまった。そのことに気づいた人々は状況も理解できないままに我先にと逃げ出した。

静かだった町は人々の恐怖の声で溢れた。

逃げ惑う人々に混じって逃げていたセイは突然足を止めてフアティマの手を引いた。

「僕の魔導書でどうにかすることはできないかな？」

「ご主人様はバカだなあ、こんなすっごいことになってるのに何する気？ こーゆー時は逃げるが勝ちだよ！」

「でも、セシルさんを止めなきゃいけないと思うんだ」

「そんなこと言ったってボクはか弱くて可憐な女の子だし。
こーゆー時は逃げるが勝ち！」

「でもさ」

「ご主人様は自分の力でなんかできると思ってるの、ご主人様は“普通”の人間なんだから無理無理」

これを言われたセイはシヨックを受けた。少しセイは自分のことを特別な存在だと思っていたところがあつた。魔導書を手に入れて、この世界にやってきた自分を特別な存在だと思っていたところがあつたのだ。

その場に立ち尽くすセイの腕をとってファティマは走り出した。

呑み込まれる町を尻目に逃げる人々であつたが、町の出口に突如目に見えない壁が現れ人々の行く手を阻んだ。

微かに月明かりが目ない壁に反射して輝く。その反射した壁にはびつしりと文字か記号のようなものが刻まれている。

セイたちもあと一歩というところで町の中に閉じ込められていた。

「ご主人様絶体絶命だね、どうしようか？」

「……………」

ファティマに尋ねられたセイは無言のまま来た道を逆走しはじめた。

「ご主人様どこ行くの!？」

「セシルさんのところに決まってるじゃないか！」

町の中に開かれた荒地の中心にセシルはただ佇んでいた。す

でに ドウローの禁書 は閉じられていた。しかし、なぜセシルは ドウローの禁書 を閉じたのか？

セシルのもとへ辿り着いたセイは息を切らせながら佇むセシルを見つめた。セシルは少し哀しそうな顔をして空に顔を向けている。そして、セシルは ドウローの禁書 を懐にしまい咳いた。

「何かが違うような気がするのです」

「セシルさん！」

セイが声をかけるとセシルはゆっくりと顔下げてセイのいる方向を振り向いた。

「ああ、セイさんですか。それにファイマさんも」

セイのすぐ後ろから慌てたようすのファイマが追いかけてきて声をかけた。

「ご主人様、危ないから早く逃げようよあ」

「待って、僕はセシルさんと話したいんだ」

けれどセイは何を話したらいいかわからなかった。その場の感情に任せて勢いでセシルの前に来てしまったのだ。だから、そのまま思いついたことを口にするにした。

「セシルさんは全ての人々を救いたいから全部無にしちゃえばいいって言ってたけど、僕はそれは違うと思います。人を救いたいって思うのはいいことかもしれないけど、みんなそれぞれには意思があるわけで、辛くたって悲しくたって生きたいと思っっている人たちはいるから、その人たちを無に還すっていうのは絶対間違ってる」

セシルはセイの言葉に静かに耳を傾け、そして口を開いた。

「辛くとも悲しくとも生きたいと思う人の執着心。そんな人々がこの世界にどのくらいいるのでしょうか、おそらくは数え切れないほどいるでしょう。しかし、わたくしにはその全員を救うだけの力はありません。いることがわかつているのに、時として見え見ぬふりをしなくてはいけないのです。救うことのできないのに手を差し伸べても相手の負担になるだけですから。人を幸福にする力はわたくしにはありませんが、今わたくしの手元には世界を無に還すほどの力を持つ魔導書があるので

これで世界は救われるのです」

全部なくなってしまうばという気持ちはセイにもわからなくてはなかった。自ら命を絶つ勇氣はないけれど、世界が全部なくなってしまうばどんなに楽だろうと考えたことはあった。セシルの考えはその極致であり、本当に全てをなくしてしまおうと行動した。

セイが何をいつたらいのか考えていると、セイの背中に隠れながらも威勢よくファティマが声を張った。

「ボクはこの世界が好きだし、ご主人様と旅してる今がすごく楽しい。辛くも悲しくもないから誰かに救って欲しいなんて考えてよくだ！」

世界には救いを求める人々もいれば、救いなど必要としてない人々がいる。必要もないのに手を差し伸べられても、それをお節介と感じる人がいる。それがここにいるファティマだった。セシルがふと自虐気味に嗤った。

「実際に多くのモノを魔導書の中に取り込み、わたくしはわたくしの思い描いていたことをしたはずだった。なのに虚しさを感じるのです。わたくしの求めていたものとは違うような気がする。なにが間違っていたのでしょうか？」

杖に寄りかかりながらセシルは地面に膝をついた。

ドウローの禁書 は使用者の体力や精神力を消耗させ、セシルはついに膝を地面につけた。しかし、セシルの陰が語るものはそれだけではない。落胆を通り越した空虚。セシルの心は空虚に蝕まれていた。

動かなくなつたセシルのもとへセイが駆け寄つた。

「セシルさんがやるうとしたことはやっぱり間違えだつたんだと思います。セシルさんもきつと心のどこかでそれに気づいてるから虚しいような気がするんじゃないですか？」

「わたくしが間違っていたのか、それはわかりませんね。何が正しいことか、何が間違つたことなのか、それは人それぞれだと思えます。今でもわたくしは自分の行いが正しいと思つています」

「そんな」

セイは落胆した。人それぞれだと言われてしまえばそれでおしまいだ、セイはセシルにどうにかして考えを変えてもらいたかつた。

ゆつくりとセシルは懐に手を入れて ドウローの禁書 を取り出した。それを見たファティマはセイの腕を取つて逃げようとした。

「ご主人様一時退却！」

「あ、でも……」

口ごもるセイをファティマは強引にセシルから遠ざけた。しかし、セシルのようすが少し可笑しい。セシルは肩を震わせて笑っていた。

「ふふっ……究極の悟りが今わかりました。そうです、わたしがこの世界から消えてしまえばいいのです。そうすれば本当に何も見ずに済むのです！」

表紙に手をかけて開こうとした瞬間、セシルの手が急に止まった。その手はブルブルと震え、血管が浮き出て力を込めているように見える。

「身体が動かない……!？」

セシルがそう呟いた次の瞬間、煌く夜空の白銀の髪を持つ少女が振って来た。

落ちてきた少女は地面に槍を突き刺しながら着地し、槍を地面に抜きながら宙を舞い地面の上に降り立った。その目の前にはセシルがいる。

「君はいつたい何者ですか、わたくしの動きを封じたの君ですか？」

「いかにも妾がうぬの動きを封じたのじゃ」

白銀の少女にセイは見覚えがあった。ドラゴンに追いかかれていた時に自分たちを救ってくれた少女エム。そして、エムはドラゴンを睨けたとは自分だとも語った。

エムの声、エムの気配を感じ、エムを視たセシルの顔つきが

険しく変わっていく。セシルにとってもエムは見覚えのある人物だったのだ。

「君はまさか……あの時の!？」

セシルの脳裏に映し出されるビジョン。獣人たちを従えて自分たちの前に現れた、白銀の髪を持ち左右色の違う瞳を持つ少女。

憎悪に駆られたセシルは呪縛を解き放ちエムに襲いかかろうとした。だが、すぐに再びセシルの身体は見えないなにかに拘束され身動きを封じられてしまった。動けぬセシルの鼓動は激しく脈打っていた。

動けないセシルの臉の上にエムがそつと手を乗せた。

「うぬにはまだ滅びてもらっては困る。血と成り肉と成り、糧となるがよい」

エムの手がそつと離され、セシルの目が開かれた刹那。辺りは紅い光に呑み込まれ、何もかもが紅に染まった。

思わず腕で目を覆ったセイが腕をゆつくりと下げて目を開けると、そこにはすでにエムの姿はなく、セシルだけがその場に立っていた。そして、見開かれたセシルの目は紅く輝いていた。いつの間にかセイの後ろに隠れていたファティマが、ちよっぴり口調を変えて説明をはじめめる。

「説明しよう。薔薇の宝玉 とは妖魔の君が幾千人もの処女の血を結晶化したアイテムであり、その力を使いこなすことができればありとあらゆるモノを視ることができると云う。という伝説のアイテムをセシルは義眼にしてたわけだね、うん納得。

でねでね、あのアイテムはちゃんと使いこなせれば過去・未来も視れるらしいよ」

「説明はいいから、セシルさんの雰囲気さがつきと違うんだけど」

セイの指摘するとおりセシルの雰囲気は先程と明らかに違っていた。禍々しい邪気がセシルの全身から立ち込め、この辺りを満たす空気を吸うだけで気分が悪くなってくる。

ファティマはセイの背中を掴みゆっくりと後退していた。その表情は明らかに悪く、巨大な力に脅えていた。

「ボクが思うにあの銀髪つ娘エムが 薔薇の宝玉 細工をしたんだと思うんだよね。だってね、あの宝玉が放つ光に闇が、穢れが混じってるんだもん。薔薇の宝玉 は一点の穢れもあっちゃいけないだよ。ってことで、ご主人様、ここは退却しよう！」

町が黒い雲に覆われていく。どこから呼ばれた悪霊たちが町を飛び交い、町に閉じ込められている人々を殺戮きつろくしていく。町中から苦痛に満ちた声が聞こえてくる。花の都八ナンは地獄と化そうとしていた。

セシルが持った ドウローの禁書 に全てが吸い込まれていく。木が根っこごと地面から引き抜かれ、家々は土台ごと宙に浮き、人々も全て吸い込まれた。辺りは一瞬にして荒地と化し、その場に残っていたのは三人だけだった。

ドウローの禁書 を持ってセイとファティマに近づいて来るセシル。セイとファティマだけが吸い込まれずにこの場に残

っていた。その意図は？

セイの服を掴んで逃げようとしていたファティマの腕をセイが力強く掴んだ。

「なにもできないかもしれないけど、なにもしないで終わるのは嫌だ。これどうやって使うか教えて！」

セイは肩に下げていたバッグの中から魔導書を出して表紙を開けた。真剣な顔をしたセイの眼差しは邪気を纏うセシルに向けていられていた。

ため息をついたファティマがセイの顔を覗きこんで微笑んだ。「ボクは平和主義者だから戦うのは好きじゃないんだけど、ご主人様がどうしてもって言うなら仕方ないね」

開かれていた魔導書のページが風もないのに勝手に捲めくれ、あるページを開いた。セイはそこに書かれた文字を読むことができた。そして、セイはその言葉を紡ぎ出す。

「ライラ、ライラ、リリララ……幾星霜の時を重ね、天を舞い躍る輝ける戦士たちよ、戦いの時が来た。輝く槍を持って地上に舞い降り破壊の限りを尽くすがいい、スターランス！」

遙かなる夜空に幾つもの輝きが現れ、それは巨大な槍と化して地上に降り注ぐ。それは流れ星であった。光の尾を引く流れ星が槍のように地面に降り注ぐ。それも一点に向けて。

爆音と爆風と激しい光に辺りは呑み込まれた。

立ち込める煙の中でセイはファティマが魔法で張ったドーム型のシールドに守られていた。

何も見えない煙の中でセイがファティマに向かって叫んだ。

「僕がしたかったのはこんなことじゃない！ 僕はただセシルさんを止めたかっただけなんだ、殺したいなんて思っていないよ！」

「でもご主人様、力で相手をねじ伏せないといけないことだっ
てあると思うよ」

煙の中から杖が現れファティマの張ったシールドを叩き割った。シールドが硝子のように弾け飛び破片が宙を煌く中、血に染まった腕がファティマの首を鷲掴みした。

セイの顔が蒼ざめ、セイは目の前にいる人物を見上げて行った。そこにはファティマの首を掴んで身体を持ち上げているセシルの姿があった。セシルの身体はボロボロに傷つき、衣服は破れ全身から血が流れ出ている。もはや、いつ死んでも可笑しくないような状態でセシルはファティマの首を締め上げていた。「ファティマを放してくださいセシルさん！」

セイがそう叫ぶと、セシルは身体を震わせながらファティマの身体を地面に下ろし首から手を放した。そして、セシルはそのまま膝を突いて苦しみもがきはじめた。セイはただ呆然とそれを見ているだけであった。セシルの身にいったい何が起きているのか？

地面についたセシルの手が持ち上げられ、すぐに地面に戻り、また手を上げようとすする。それはまるで自分自身の身体と戦っているようであった。そう、セシルは自分の意思に反して動く身体に抵抗しようとしていた。

セシルの手が激しく持ち上げられ、彼は自分の顔を手で覆っ

た。セイがセシルがしようとしていることに気づいて止めようとした時にはすでに遅かった。セシルは自分の両目を自らの手で抉り取ったのだ。

セイは目の前で起きたことに目を背けたいのにできなかった。地面に力なくして倒れたセシルは震える手でゆっくりとドゥローの禁書の表紙を開き何かを呟いた。

開かれた ドゥローの禁書 から多くのモノが還っていく。吸い込まれた町や人々が元に戻っていくではないか!?

やがて、町は元通りに戻り、最後に ドゥローの禁書 はセシルの身体を吸い込んでその表紙を固く閉ざし、ドゥローの禁書 は炎に包まれて焼かれ消えた。

地面に膝をついたセイは動く気力も起きず、無表情のまま目から涙を零した。

夜の闇はセイの心も蝕んだ。

ハナンの町を離れ数日 セイとファティマはある町でこんな噂を耳にした。

怪盗ジャックが現れたらしい。

怪盗ジャックの話をよくよく聞いてみると、ジャックは世間から悪人と呼ばれる富豪の家で金品を盗んでは、貧しい家庭にそれをばら撒いているのだという。そのため民衆の間ではジャックがヒーローのように扱われていることセイ知った。そして、じゃあなんで魔導具とかも盗んでいるのかと訊ねると、首を傾げられて答えは返ってこなかった。

セイは内心でいつかジャックに逢えるような気がした。そして、その時にいろんな話をして、これを渡せばいいと思った。

首から提げたバッグの中には一冊の魔導書と二つの紅い宝玉がしまわれていた。

第二幕 かぜそうそう
風蒼々

放浪の旅をする途中、セイとファティマは森の中に開けた小さな湖に立ち寄っていた。

燦然さんぜんと輝く太陽の下で、ファティマは服を脱いで水浴びをしながらはしゃいでいた。その間、セイは湖のほとりで膝を抱えながら深い森の中に視線を向けていた。

「ご主人様も一緒に入ろうよお、気持ちいいよお！」

「僕はファティマが出てから入るから」

「なんでえ、一緒に入ろうよ」

女の子の裸なんて恥ずかしくて見れないし、すぐ近くで水浴びをされているだけで胸が弾けそうなくらいドキドキするといふのに、一緒に水浴びなんてとんでもなかった。セイは頑なに森の奥深くを眺め続けた。

「ねえっ！」

背中が声がしてビックリしたセイは思わず後ろを振り返り、すぐに両手で顔を覆い隠した。

「服着てよ、僕の前に裸で立たないでよ恥ずかしいじゃないか」

「別に裸なんて見られても減るもんじゃないし……ボクの身も心もご主人様だけのモノだよ！」

「そういう冗談は心臓に悪いから言わないでくれるかな」

日を追うごとにファティマの性格がとんでもない方向に向かっていることをセイは日々実感していた。

ファティマの性格が初めて出逢った時から徐々に変わっているのは確かで、セイはファティマの先行きに若干の不安を覚えていた。そして、セイはため息をつくのが最近のクセになった。少ししてからセイは自分の後ろでガサゴソしていたファティマに声をかけた。

「着替え終わった？」

「おう、ばつちり終わったよ」

セイが振り向くとファティマの着替えは終わっていて、安堵感とともにセイはため息をついた。

「じゃあ、僕水浴びするから見ないですよ」

「うん」

「絶対だよ」

「うゝん」

「悩まないですよ」

深く息をついたセイは重い足を引きずりながらも湖に向かって、ふと立ち止まって振り返る。

「見ないですよ」

「うん」

元気のいい返事をしながらもファティマはセイのことを見めていた。

水浴びを断念してセイは首から提げていたバッグから皮の水筒を出した。その水筒のふたを開け、湖に水筒を沈めて中に水

を入れた。水筒の口から出る泡が止まったところでふたを閉める。水の確保はこれでオーケーだ。

立ち上がったセイはファティマに次の町に行こうと言おうとしたが、ファティマの視線が遙か上空を見ているのを見て、セイも空の上に視線を向けた。

空の上には羽の生えた何かが円を描きながら飛んでいた。

「鳥かな？」

とセイが呟いたのも束の間。それが鳥でないことがすぐにわかった。

上空から人を乗せた羽の生えた乗り物が落ちてくる。飛行機みたいなものだろうか？

乗り物は円を描きながらクルクルと落下し、円を描くのを止めて上空で一瞬止まったかと思うと、次の瞬間には急落下していった。

口をポカンと開けるセイの首が上から下に縦に振られ、羽の生えた乗り物は水飛沫を上げながら湖に落下した。

水の粒が空気中に舞い、セイの全身は水浸しになってしまった。

「これで水浴びの必要はなくなった……」

深く息をセイがついていると、ファティマがすぐに駆け寄ってきて湖を指差した。

「すつごい、すつごい、今の見た？」

「見るもなにも、目の前に落ちたんだから」

「あれに乗ってた人平気かなあ？」

「どうだろうね、浮いてこないけど？」

二人が湖を眺めていると水面に大きな泡ぶくが上がり、すぐに若いゴーグルをかけた男が顔を出して手をバタバタさせた。

「おい見てないで助けてくれ、俺泳げないんだ！」

必死に叫んだ男はすぐに沈んだ。それを見たセイは慌てて水の中に飛び込み男を陸まで引き上げた。

陸に男は水を口から噴水みたいに吹くとすぐに飛び起きてセイの両手を掴んだ。

「ありがとな命の恩人！」

「見て見ぬフリができなかっただけです」

少し疲れたような顔をしてセイは正直な感想を述べると、男はセイの肩を何度も両手で叩いた。

「ありがとう、ありがとう、助かったぜ」

ゴーグルをかけた男は結わいていたボサボサの髪を解き、簡単に結わき直すと背中に生えた翼を何度もバタバタ動かして水飛沫を飛ばした。そう、この男はセイレーンと呼ばれる種族であった

男の見た目はこの世界でセイのような人種を示すノエルと変わらないが、その足は鳥のようで背中には純白の羽が生えていた。

「俺たちセイレーンは羽が邪魔で泳げないんだ。ちょうど溺れ
たところ
に人がいて助かったぜ」

セイレーンの男は人懐っこい笑みを浮かべてセイに握手を求めてきた。

「俺の名前はウインディだ、よろしくな！」

「あ、僕の名前はセイです、でこつちが」

「ボクの名前はファティマだよ、ご主人様の従順なる愛人」

セイの手が素早く動いてファティマの頭を撫でるように叩いた。

「愛人なんて言ったら勘違いされるでしょ！ 僕らはただの旅仲間ですから、誤解しないでください」

「痛いよあ、打つことないじゃん」

頭を両手で抱えるファティマはセイにあっかんべーをした。

それを見たウインディが笑ってこんなことを言う。

「仲のいいカッブルだな」

「だから僕らはそんな関係じゃなくって」

「愛人だよ」

余計なことを言うファティマの頭に再びセイの平手打ちが炸裂する。

「話をややこしくしないでよ」

「うえ〜ん、ご主人様が苛めるう」

この頃のセイの悩みはファティマの性格がとんでもない方向に向かっていっているような気がするようになった。

セイとファティマが夫婦漫才もどきをする中、ウインディは湖に浮かぶ羽の生えた乗り物を見ていた。

「どうやって引き上げたらいいもんか、俺は泳げんしな……」
とウインディはセイに顔を向けた。

「僕ですか？」

「そうかそうか、おまえが引き上げてくれるか、いやあ、おまえっていいやつだな」

セイは心の中でなんて強引な人なんだろうと思った。そう心で思いながらもセイはバッグの中からロープを出すと湖の中に飛び込んだ。

ロープを手を持ったセイはそれを乗り物に結びつけると、陸に上がってロープの端をウィンディに渡した。

「僕らも引っ張りますから、所有者のウィンディさんが一番頑張ってください」

「俺、力仕事得意じゃないんだよな」

「つべこべ言わずに、自分の物なんですから引っ張ってください」

しぶしぶ顔のウィンディとともに、セイとファティマはロープを引いて乗り物を陸まで引き上げることにした。

乗り物は元から重さが軽かったことと、水の上に浮かんでいたので簡単に陸まで引き上げることができた。

陸に引き上げられたその乗り物を見たセイは、やはりそれが飛行機のような物だと思った。

小型の機体は二人乗りのようで、羽はついているのだが、肝心のプロペラやジェット噴射口などがない。この乗り物にはコックピットと羽以外の物が取り付けられていなかった。だからと言ってハングライダーのような物かという形は飛行機に近い。では原動力は何か？

「あの、質問していいですか？」

セイがウィンディに質問しようとすると、質問の内容を聞く前にウィンディが乗り物の説明を勝手にはじめた。

「そうか、やっぱりこの乗り物が気になるみたいだな。こんな乗り物は世界にこれ一つしかかなから当然だろうな。なんとこの乗り物は空飛ぶ機械でな、俺が発明したんだぞ、すごいだろ？」

セイはなんとなく頷いて見せたが、内心では自分のいた世界にも似たような物があったと言いたかった。

そして、セイはさつきしようとした質問をした。

「この乗り物は何を原動力にして飛ぶんですか？」

「風に決まってるだろ。風に乗ってゆったりと地面に下りていくんだよ」

「はあ、それで上に行きたい時は？」

「下から風が吹いたら上がるんじゃないか？」

「はあ」

「冗談に決まってるだろ」

すっかり騙された。

ウィンディは乗りについていたふたのような物を開けると中から蒼く輝く丸い物体を取り出した。

「これが原動力だ」

ウィンディの手に乗る蒼い玉を見たフアティマが目を輝かせて話題に飛びついた。

「これって飛空石だよな、すっげえ、はじめて見たあ」

「おっ、譲ちゃんは飛空石を知ってるのか。見た目のわりに物

「知りだな」

「えっへん！」

二人の会話についていけないセイはすまなそうに手を上げた。
「あのさ、飛空石について説明して欲しいんだけど」

「おう、飛空石っていうのはだな」

ウィンデイが説明をしようとすると、その上に声を乗せてフアティマがいつもの調子で説明をはじめた。

「説明しよう。飛空石とはその中に風の力を秘めている石のこととで、天空都市ラピュータを飛ばす原動力になっている。世界一大きな飛空石はちょー有名で、蒼風石なんて名で呼ばれている。以上説明終わり」

先に説明を言われたウィンデイは悔しそうな顔をした。

「まあ、その通りだな。俺の持つてる飛空石は小さいものだが、これでも貴重品で町の教会からちよつと拝借してきた」

拝借という言葉が少し気になりはしたが、セイは別の質問を投げかけた。

「ウィンデイさんは羽があるのに、なんでこんな乗り物に乗ってたんですか？」

「いいところに目を付けたな。では、積もる話もあるだろうから、ウチの招待しよう。では、乗れ！」

なんて強引な人だとセイは思ったが、フアティマはすでに乗り物に乗って、それも操縦桿そうちゅうかんを握って「ニコニコ」していた。

「早く行こうよお！」

早く行こうもフアティマが操縦桿を握っていることにまず聞

題があるし、第二にこの乗り物は二人乗りだった。

セイがあたふたしているのと彼の身体はウインディによって持ち上げられ、ファティマの後ろの席に乘せられた。

「あ、あの僕たちだけ……？」

困った表情をしたセイを見てウインディは何も言わず笑うと、飛空石を取り付けて機体に一発蹴りをかまし、ファティマに簡単に操縦の仕方を説明して自らの羽で空に舞い上がった。

「俺のあとについて来い！」

手招きをするウインディの真横を無音で宙に浮いた機体が天を突くように昇って行った。その後にはセイの絶叫が空に木霊した。

ウインディは苦笑いを浮かべながらすぐに機体の後を追って空に昇った。

空中に浮くその島は大地をそのまま割り貫いて宙に浮かせたようである。島の周りは緑で溢れ、水も豊富にあり、鳥や他の動物たちもこの島には住んでいる。そして、島の中心にはセイレーンたちの住む都市があった。この島の名は天空都市ラピュータ。

セイは真つ青な顔をしながら口元を手で押さえてソファーに寝転んでいた。

気持ち悪い。ファティマの操縦する空の旅は決して快適とは言えなかった。ジェットコースターなど目ではない。

起き上がったセイが猫背になって嗚咽おえっを漏らしていると、ウ

インデイが湯気の立つコップを持って現れた。

「これ飲んだらだいぶ気分がよくなると思うぜ」

「ありがとう」

コップを受け取ったセイはフーッと湯気の立つ液体を冷ましてから口に運んだ。花の香りが鼻を抜け、口の中に爽やかな味が広がった。

「美味しい」

と顔を上げたセイの目に映るウインデイはゴーグルを頭の上に乗せていて、この時はじめてセイはウインデイの顔を見た。結構カツコイイかも。

「ご主人様ーっ！ 起きたあ？」

ドタバタと床を駆けて来たファティマがジャンプしてセイに抱き付いた。セイは必死にコップを上げて中身が零れないように死守する。セーフ。

「僕が手に物を持つてる時は抱きつかないでくれるかな？」

「じゃあ、今度からは何も持つてない時に抱きつくねっ！」

「僕が言ってるのはそういう意味じゃなくて、抱きつかないでくれると嬉しいんだけど？」

「ええーっ、男の人は女の子に抱きつかれると嬉しいって聞いたよ」

「どこで？」

「街で」

あゝなるほど、とセイは思った。最近街に着くとセイとファティマは別行動をすることが多くなった。これがこの頃ファ

ティマの性格がとんでもない方向に向かっている原因かもしれないとセイは考えたのだ。

少し困った顔をしたセイがウィンディの顔を見ると、ウィンディが笑っていたのでセイはすごく恥ずかしくなって、それを誤魔化すように飲み物を一気に飲みました。

少しセイが落ち着いてきたところで、突然何かを叩くような激しい音が聞こえてきた。その音を聞いたウィンディは渋い顔をして玄関に向かって行く。

ファティマが興味津々でウィンディを追いかけていこうとしたのをセイが背中を引っ張って止めた。

「ファティマが行ってどうするのさ」

「だって、なんかおもしろそうなこと起きそうだし」

「まあね」

結局セイもファティマと一緒に廊下の陰から玄関を覗き見ることにした。

嫌な顔をしたウィンディがドアを開けるとセイレーンの男たちが数人、どつと家の中に流れ込んできた。

「おまえってやつは飛空石をなんじゃと思っておるのじゃ！」

年老いた男にこう言われ、ウィンディは両手を胸の前に突き出して相手を宥めながら後退りをはじめた。

「まあまあ爺さん落ち着いてくれよ、ちよつと借りただけじゃねえか」

若いウィンディの方が完全に押され気味だった。

「借りただけじゃと！」

老人の勢いの押されてウインディは尻餅を付いてしまった。

そして、観念して飛空石を懐から出して老人に渡した。

「返すよ返す、だからもう返つてくれ客人が来てるんだ」

「客人じゃと？」

客人と言われてセイが止めるのも聞かずファティマが真っ先に飛び出して行った。

「ボク客人で〜す！」

元気よく飛び出して来た娘を見て老人は物珍しそうな顔をした。

「もしかそなたは魔導書に宿る精霊か？」

「うん、ボクは ファティマの書 とともに存在する者だよ」

「やはりな、この娘を捕らえるのじゃ」

「えっ!？」

ファティマは目を丸くして、すぐ横にいたウインディも驚いた顔をして、廊下の陰から見ていたセイは声をあげた。

「ええ〜っ!？」

啞然とセイがしている中、ファティマは老人の連れの男たちに連れて行かれようとしていた。だが、セイはなにがなんだかわからず、足を動かすことすら忘れて立ち尽くしてしまった。そして、ファティマを救おうとしたのはウインディだった。

「ちよつと待て、その子は俺の客人だぞ、どうして連れて行くんだ!？」

ファティマを捕まえていた男たちにウインディが飛び掛かるうとすると、老人が静かに何かを唱えてウインディは金縛りに

遭ってしまった。

そして、ファティマは連れ去られた。

少しして我に返ったセイが変なポーズのまま固まってしまっているウインディに駆け寄った。

「ウインディさん大丈夫ですか？」

「いや、身体が動かん」

「僕はどうすれば？」

「少し立てば動くようになると思うんだが、俺のことを引きずって部屋の奥に運んでくれないか？」

「あ、はい」

セイはウインディの身体を抱きかかえ、床にウインディの足を引きずりながら部屋の奥まで運んでソファの上に寝かせた。

「ありがとなセイ」

「あ、あの僕、ファティマを助けに行きます」

「待って待って、そんなに心配しなくても悪くて牢屋に入れられるくらいだ」

「牢屋に入れられるなんて十分悪いですよ」

「俺の身体が動くようになるまで待て。そしたら俺も行くから」

一緒に行くと言ってくれたのは嬉しいが、セイはいても立つてもいられなかった。

「でも、ファティマにもしものことがあったら大変ですから僕一人で行って来ます」

「だから慌てるなって。セイひとりで行っても掴まるだけだ

ぞ」

「……………」

そうかもしれないと思ったセイは押し黙ってしまった。

「ファティマを助けに行く前に、なんでファティマが連れて行かれたのか考えようぜ。心当たりはなんかあるか？」

「いいえ。でも、あのお爺さんはファティマが魔導書の精霊かどうか確かめてましたよね、それがなにか関係あるのかも？」

「あのよお、そのファティマが魔導書のつていう話を詳しくしてくんねえか。魔導書つていう物についてはまあまあ知ってるが、魔導書の精霊つてなんだ？」

「さあ、僕もよく知らないんです、ごめんなさい」

正直な答えだった。セイはファティマの存在をよく知らない。そして、ファティマ自身も自分の存在がなんであるかよく思い出せないらしい。

ファティマは多くの知識を所有しているが、自分のことになると首を傾げる。本人は最近物忘れが激しくてと笑うが、セイは記憶喪失なのかもしれないと考えていた。

困った顔をしたウィンディは動かすことのできる首を動かし、窓の外に見える赤い屋根の家を顎で示した。

「そこに赤い屋根の家があるだろ？」

「はい」

「あの家に俺の知り合いが住んでるから、すぐにここに連れて来てくれ」

「はい、わかりました」

なぜ人を連れて来なければならぬのかわからなかったが、セイはウィンディに言われた通りに急いで家を飛び出した。

石畳の敷き詰められた人工的な道路と石造りの家々が立ち並ぶ住宅街。この辺りで赤い屋根の家は珍しくとても目立っていた。セイはすぐさまその家の玄関に立ってドアをノックした。

「あの、すみません！」

返事は返って来なかった。そこで、もう一度セイはドアをノックした。

「すみません、急用なんですけど、いないんですか！」

やはり返事は返って来なかった。

あきらめてセイが帰ろうとドアに背を向けると、ドアの鍵が開いて中から女性の声がした。

「どなた？」

セイが振り返るとそこには、黒いローブを着たセイレーンの女性が立っていた。その女性を見てセイは少し不思議そうな顔をした。理由はこのセイレーンの翼が黒かったからだ。今までセイが見てきたセイレーンの翼はみな純白だった。

翼に目を奪われ何も言わないセイを促すように女性が口を開いた。

「ノエルのお客さんとは珍しいわね、わたしになんの用かしら？」

「あ、あのウィンディさんの家に来てもらえませんか？」

「嫌よ」

即答されてしまった。

困った顔をしながらセイはすぐに言葉を返した。

「あの、どうしてですか？」

「あんな奴の顔見たくないの。あの男はいつもいつもわたしの研究を莫迦ばかにするのよ。自分だって莫迦ばかみたいな発明ばかりしているクセにね」

「どうやらこの女性とウインディは仲がよくないらしい。」

「僕はあなたを連れて来るように言われたので、どうしても僕とあなたを連れて行かないといけないんですけど」

「あの男が天敵であるわたしを呼ぶとはどういうこと、喧嘩でもしに来ていつてことなの？」

「それが、ウインディさんは今金縛りみたいな術をかけられて動けなくて」

「ああ、なるほどね。わたしにその術を解いて欲しいってことね……でも嫌よ。いいざまだわ、そんな時だけわたしを頼るうなんて虫のいい話よ」

今の状況ではこの女性はウインディの元に来てくれそうもなかった。

女性はドアノブに手を掛けると残った手の指先だけでセイに手を振った。

「じゃあねノエルくん、あの男に一生そのままでもいいって伝えて頂戴」

閉まろうとするドアにセイは足を踏み入れて止めて言った。

「あなたがウインディさんことをあまり好きじゃないのはわかりました。でも、来てもらわないと僕が困るんです。ウインデ

「伊さんが動けるようになったら、一緒に友達を助けに行ってくれるって約束したんです。だから、僕のためにウインディさんの所に来てください、お願いします」

ドアが再び開かれた。

「しょうがないわね、行ってあげるわ。でも、あなたのために行くんだからね」

「ありがとうございます！」

セイが誠意を込めて頭を下げると、女性はため息をついてセイを置いてさっさとウインディの家へ歩き出した。

慌ててセイも歩き出し、二人はウインディの家に向かった。

「おい、やっと来てくれたか！」

ソファで横たわるウインディに出迎えられた女性は不機嫌そうな顔をしていた。

「あなたのために来たんじゃないわよ、この坊やの頼みで来たのよ」

「誰の頼みでもいいから、取り敢えず俺にかかった術を解いてくれよ」

「ほんと都合のいい男ね、あなたってひとは……」
ため息をつきながらも女性は静かに呪文を唱えた。

「闇よ、力を奪い去れ　スワロウ！」

ウインディの身体を一瞬間が包み込んだかと思うとすぐに消え、ウインディは身体を自由を取り戻した。

「おう、ありがとなクラウディア」

「この恩高くつくわよ」

「そのうち返してやるよ」

そう言ったウインディは笑い、クラウディアも軽く笑った。それを見ていたセイは二人の仲を少し考え直した。

セイとクラウディアはウインディに椅子に座るように促されて座った。そして、ウインディがセイたちと出会った経緯を話して、ファティマが連れて行かれたところまでをクラウディアに説明した。

「そんなわけでセイの恋人のファティマが王宮お抱え魔導師の爺さんに連れて行かれたってわけだ」

「だから僕とファティマは恋人同士じゃありません」

ウインディの説明中にセイはこれと同じセリフを五回ほど言ったが直らなかつた。

セイの発言は今は無視されてクラウディアが話しはじめる。

「えっと、それで、ファティマって子は魔導書の精霊ってなんだけど、その魔導書本体はどこにあるのよ？」

「僕が持つてます」

セイがバッグの中から魔導書を取り出すと、その魔導書にクラウディアが手を掛けて開けようとした。しかし、開かない。

「わたしには開けないってことかしら、生意気な魔導書ね。どうやらこの魔導書は本物らしいわね、ということとはファティマって子も本物の精霊ってことになるかしらね」

魔導書の持ち主がすまなそうに小さな声でクラウディアに質問する。

「あのすみません、魔導書の精霊について詳しく説明してくれませんか？」

「あなた魔導書とその精霊の主なのに、それについて知らないの？」

「はい、魔導書はたまたま手に入れた物ですし、ファティマ本人が自分のことをよくわかっていないみたいで」

「精霊本人が自分のことを？」

「はい、僕が思うに記憶喪失かなって」

「精霊が記憶喪失だなんて話はじめて聞いたわ。まあ、ないとも言い切れないけど」

セイとクラウディアが二人だけで話している横で、ウィンディが体調の悪そうな顔をしていて、それに気が付いたセイが声がかけた。

「どうしたんですか、顔色が悪いですけど？」

「いやな、俺は魔導学の類が苦手で、どうもその手の話を聞いとると頭が痛くなってくる」

天空都市ラピュータは世界一の科学力を誇る島として有名であった。その島には下界では見ることのできない機械仕掛けのからくりがあると云う。そして、この都市には魔導師の数が極めて少なく、その極めて少ない魔導師のひとりがクラウディアであった。

クラウディアはウィンディのことなど労わるようすも見せず魔導学に関する話を続ける。

「魔導書の中にはとても力の強いものがあって、稀まれに魔導書自

身が意思を持つ場合があるのよ。その意思が具現化されたものが魔導書の精霊ってわけよ。つまり、魔導書とその精霊は同じ存在ってことになるわね。もしも本当に魔導書の精霊が記憶喪失になったとしたら、魔導書本体になんらかの問題が起きたと考えるのが自然でしょうね。例えばページが抜け落ちてるとか」

ページが抜け落ちてしていると聞いてセイは魔導書のページを捲めくって見たが、破れたりして破損していそうな部分は見つからず、ページが抜け落ちているかどうかも文字を読めないセイには確認できなかった。そこで、魔導書の中味をクラウドディアに見せると、クラウドディアはこんなことを言った。

「真っ白よ。わたしには真っ白にしか見えない。随分と嚴重なセキュリティーのされている魔導書ね。所有者本人しか文字を見るのができないのね」

クラウドディアの話聞いて大分気分の悪くなったウインディは、床に手をつきながら這って移動し、四角い箱についたボタンを押した。

「科学の香りを……」

そのまま力尽きて手を伸ばしたウインディのその先にある四角い箱に映像が映し出された。それを見たセイは目を丸くして声を漏らした。

「テレビ？」

セイが発した言葉を聞いて、ウインディが水を得た魚のように生き返って、飛び上がった話をはじめた。

「下の人間がテレビを知っているのか、驚きだな」

ラピュータに住む人々は地面の上で暮らす人々と自分たちを大きく区別して、上や下という表現をよく使う。

セイはテレビという単語が通じたことに驚いたが、自分の持っている魔導書が適当な単語を選んで翻訳されたのだろうと思っただ。

映し出されていたテレビにはドラマらしきものが放送されていた。だが、すぐに映像が変わり、難しい顔をした女の人が臨時ニュースを読みはじめた。

《護送中の凶悪犯が治安官たちを負傷させ街に逃亡しました》

セイはこのニュースを聞いて嫌な予感がした。そして、予感
は当たる。

《逃げた犯人は猫人の少女で》

頭を抱えたセイはテーブルに突っ伏した。

「ファティマです、絶対ファティマに決まっています」

自分が悪いことをしたみたいに落ち込むセイの横で、うぐんと唸ったクラウディアが何かを思い出そうと宙を仰ぎ見た。

「言い伝えは本当だったのかしらね」

「言い伝えてなんですか？」

顔を起こしてセイが尋ねると、ウィンディもクラウディアの
話に注目した。

「わたしが小さい頃に養父母から聞いた話なんだけど、左右色の違う瞳を持った少女がこのラピュータに現れる時、災いが起き、ラピュータが地に墮ちる……。左右色の違う瞳は魔導書に

宿る精霊の象徴だから、ファティマが連れて行かれたんでしょ
うね、年よりはそういう迷信が好きだから」

「俺もその言い伝えを祖父さんに聞いたような、聞かなかった
ような。だが、そんな莫迦らしい話あるわけねえよな」

「わたしもそう思うわ。ラピュータを墮ちるなんてあるわけな
じゃない。でも、ファティマが凶悪犯扱いされてることは確か
で、逃げたのも確か、追われてるもの確かで、ニュースによる
と治安官も負傷させたらしいわね、最低」

災いとまではまだいっていかないかもしれないが、このままフ
アティマを放っておけば本当に災いの元凶になる可能性がある。
そのことを思ったセイが慌て出す。

「早くファティマを探しに行かないと！ ウインデイさん急ぎ
ましよう」

「おう！ クラウディアはどうする？」

「愚問ね。ファティマは仮にも犯罪者、ごたごたに巻き込まれ
るのはごめんよ。と言いたいところだけど、魔導書の精霊にも
興味があるわ……ふふ、研究対象を見ず見ず政府には渡さない
わ」

不吉な陰を纏うクライディアは不敵に笑い、それを見たセイ
は不安を覚えた。

三人が家の外に出ようとした時、部屋の窓から猫耳の少女が
飛び込んで来た。見間違えようもなく、それはファティマだっ
た。

「お主人様助けて！ よくわかんないんだけど大勢の人に追っ

かけられちゃって、ボクのファンなのかな？」

それは絶対違うとセイは心の中で否定した。なぜなら、重装備をした男たちが窓から流れ込んできたからだ。銃火器を持ったその男たちはどう見てもファティマのファンには見えない。

男たち　治安官がいつせいに銃火器を構えた。

「手を上げる！」

ファティマを含まない三人は困った顔をしながら手を上げた。そして、ウィンデイが叫んだ。

「逃げる！」

声をあげたウィンデイが手に持っていた何かを床に投げつけると、大量の煙が辺りを包み込んで治安官たちの目を眩ませた。その隙にウィンデイがセイとファティマの腕を引いて玄関に走る。しかし、玄関が打ち破られて治安官たちが流れ込んできた。狭い廊下の左右から挟み撃ちにされてしまったのだ。

すでにクラウディアも治安官に取り押さえられ、三人はゆっくりと手を上げた。

人生で二度もこんな経験をするとは思っても見なかった。セイは牢屋の中で頭を抱えていた。

「なんで僕が牢屋に入れられなきゃいけないの。僕にも悪いことしてないのに」

「俺もしてない」

「ボクもなにもしてないよお」

「ううあのううんうっ！」

『あなたのせいでしょ!』と言ったつもりでクラウドディア。ここにいる全員が足や手を縛られている中、クラウドディアだけは口に布を噛まされ縛られていた。魔法を使う彼女は口を塞がれることよって魔法を封じられていた。

魔法を唱えられない魔導師はただの人と変わらない。しかし、クラウドディアは魔法を封じられる前に大きな功績を残していた。彼女は治安官が家に入って来てすぐに、セイのバッグを自分のローブの中に入れて隠していたのだ。身体検査をされなかったために、運良く押収されずに済んだのだ。

セイは芋虫みたいに動いて口でバッグを開けると中からナイフを取り出した。

「いちようナイフ持つてるんけど?」

そのナイフをセイは背中の後ろで縛られている手で持ち、ウインデイの手を縛っていたローブを切った。その後はウインデイが全員のローブを切って、すんなりと全員は身動きの自由を得た。しかし、真の自由はまだ先だ。

ウインデイは辺りを見回しながら歩きはじめ頭を掻いた。

「さて、どうやって出るかな。周りに部屋がなかったから壁は破れるほど薄くない。クラウドディア、鉄格子破壊できるか?」

「鉄を破壊できる魔法は使えないわね。でも」

とクラウドディアは天井を見上げて静かに微笑んだ。

「天井なら壊せるわね。少し下がっていてくれるかしら?」

セイたちが壁に背をつけて離れると、クラウドディアのローブが風もないのに揺れた。クラウドディアに力が集まってくる。

「風よ火よ、爆炎を巻き起こし障壁を破壊せよ　ファイアーボール！」

クラウディアの掌てのひらから紅蓮くれんの炎が飛び出し、爆音とともに天井を打ち破った。硝煙に紛れて天井から石の破片が落ちてくる。そして、煙が晴れてくると、天井にポツカリと空いた穴が顔を見せた。

「俺がセイを運ぶから、クラウディアがファイーマな」

ウインディはセイを後ろから抱きかかえると、翼をはためかせて天井に空いた穴に向かって飛び上がった。そのあとをファイマを抱きかかえたクラウディアが追う。

あれほどの爆発を起こしたというのに騒ぎを駆けつけて来る者はいなかった。

薄暗い石造りの廊下は静かなもので、セイたちは慌てずにゆっくりと足音を立てないように歩いた。

静かな廊下に大勢の足音が響いた。セイたちがT字路で物陰に隠れると、向こうの廊下を重装備に銃火器と言ったいでたちの男たちが走り抜けて行った。それを見たウインディが静かに声を出す。

「王宮の兵士たちだな。大きな事件でも起こったのか……？」
セイたちが連れて来られたのは町にある治安所の牢屋ではなく、王宮の地下にある牢屋であった。

物陰を飛び出したファイマがはしゃぎながら兵士たちのことを追って行く。

「事件だ、事件だ！」

しかも声をあげながら。

すぐにセイがファティマに飛び掛かり口を押さえる。

「静かにして……」

セイたちの目の前を兵士たちは遠ざかって行った。どうやら気づかれなかったらしい。そして、セイの目に映った兵士たちは大変緊迫していたように映った。

急に後ろを振り向いたウィンディが呟く。

「また兵士たちが来るぞ」

慌てたセイたちは思わず近くにあつた扉を開けて中に入った。荘厳華美な広い部屋。人目で位の高いに者の部屋であることがわかるその部屋に、白い薄手のドレスを纏ったうら若き乙女が驚いた顔をして立っていた。

声にならない声を漏らす乙女に対してウィンディが膝を突いて頭を下げた。

「ナディール皇女様、我々は決して怪しい者ではありません」

目の前にいる乙女はこの国の皇女であつたのだ。

ナディールは未だに驚いた顔をしている。その視線は目の前に跪くウィンディではなく、その後ろに立っているクラウディアの羽を見ていた。漆黒の翼を。そして、声を出そうとしたナディールはクラウディアに睨みつけられて言葉を呑んだ。その一瞬をセイは見逃さなかつた。

気を取り直したナディールは凜とした表情をして、静かに重みのある声で話しはじめた。

「そなたたちのような者がなぜわたくしの部屋に入って来たの

ですか？ わたくしはこの国の第一皇女ナディールなのですよ。わたくしの許可なくして部屋に侵入してくるなど、大罪にあたりますよ」

皇女と言われてもセイはピンとこない。その地位にいる人が偉いということを知っては理解していても、横にいるウィンディのように、すぐさま膝を突くような考えは浮かばなかった。

この国の者であるクラウディアも膝をついていなかった。

「皇女様にお聞きしたいことがございます」

静かなクラウディアの口調。その口調はナディールの表情を一瞬怯ませたが、すぐに彼女は威厳のある表情に戻った。

「なにでしょうか、言ってみなさい」

「兵士たちが慌ただしい動きを見せましたが、何か事件でも？」

「ええ、地上に住むセイレンたちが攻め入ってきました。敵の狙いは恐らく蒼風石でしょう」

この場にいた中で一番驚いたのはウィンディだった。

「なんだって、下の者たちが攻め入って来ただって!？」

地上に住むセイレンとラピュータに住むセイレンたちは仲が悪いことで有名だった。今は二つの部族として分かれてしまったセイレンたちだが、以前は一緒に暮らしていたのだ。それが数百年前の内戦により、二つの部族に分かれたのだ。その内乱を 蒼風の戦い と歴史の中では呼んでいる。

今、地上で暮らしているセイレンたちが 蒼風の戦い に勝利を治めることとなったのだが、負けたセイレンたちはセ

イレインの宝であつた蒼風石を持ち去つて天空に逃げたのだ。それが今の天空都市ラピュータである。

長い間、地上と天空に住むセイレーンたちは、細かい衝突は頻発していたが、大きな衝突はなく、冷戦状態を保っていた。

それが今回、地上のセイレーンたちがラピュータに直接攻め入ってきたのだ。

突然、鈴のような電話のベルが鳴り、ナディールは急いで受話器を取つた。そして、少し黙り込み電話を切つた。

「宮殿内に敵が侵入し、わたくしに早く国外に逃げるようにと連絡が入りました。あなたたちも早くお逃げなさい」

この言葉を聞いてクラウディアが冷たく言う。

「王族が国を捨てて逃げるということは、情勢はそれほど悪いと？」

「わたくしは逃げるように言われただけです」

ドアの向こうで男の声がした。

「失礼いたします！」

ドアが開かれ慌てたようすの兵士が入つて来た。

「皇女様の護衛に……貴様ら何者だ!？」

兵士の目に飛び込んで来た見知らぬ者たち。彼はすぐさま剣を抜いて構えた。そして、すぐにナディールが兵士の元へ歩み寄る。

「この者たちはわたくしの友人です。剣を収めなさい」

「はっ、失礼いたしました」

剣を鞘に収めた兵士はそのまま話を続けた。

「自分は皇女様の護衛に参りました。早く隠し通路を使って外に逃げ出しましょう」

「俺も皇女様の護衛をする」
声をあげたのはウィンディだった。

ナディールはウィンディを見た後、他の者たちも見回した。

「護衛の話は別として、みなさんもわたくしたちと隠し通路を使って逃げましょう。わたくしにはひとりでも多くの国民を守る義務があります」

どこからか重いものが動く音がして、ファティマが声をあげた。

「隠し通路ってこれでしょ？」

壁に開いた闇の中を指差したファティマはそのまま闇の中に飛び込んで行った。そのファティマを追って歩き出したナディールが途中で後ろを振り返って言う。

「あれが隠し通路です。わたくしたちも急ぎましょう」

隠し通路の中は壁そのものが淡く輝いていた。

長く真っ直ぐだった道が途中で二手に分かれていた。

ナディールが右手の道を指差す。

「あちら側に向かえば町の外れに出ることが来ます。あなた方は早くそちらにお逃げなさい」

セイたちにあちらに行けと言うことは、ナディールは逆の方向に行くと言うこと。セイはそのことについて質問した。

「皇女様はあちらに行くんですか、あっちになにが？」

「蒼風石が心配なので、わたくしは蒼風石の安置所に向かいま

す」

「僕らも行きます」

「俺も行くぜ」

セイとウインディが同伴を申し出ると、ナディールは首を横に振った。

「あなた方はお逃げなさい。聞いてもらえぬというのなら、皇女としての命令で言います」

命令と言われてはウインディはそれに従うしかなかった。

皇女と兵士の背中を見送りながら、セイたちは皇女たちとは逆の方向に足を運んだ。

しばらくセイたちは走り、出口の扉が見えてきたところでセイが突然足を止めた。

「あ、あのさ、一人足りないと思うんだけど？」

ウインディが辺りを見回し、クラウディアが呟いた。

「ファティマがいないわね」

セイは唸りながら頭を抱えてうずくまった。

「あゝっ、皇女様について行っちゃったんですよ、きっと」

「早く探しに行こうぜ」

すぐにウインディが道を引き返して走り出し、慌て顔のセイと呆れ顔のクラウディアがそれを追った。

円形ドーム型の部屋の中心に長方形の黒石がひとつ立っていた。ナディールの腰ほどの高さのその石の表面には文字や図形が映し出されていた。

「まだ蒼風石は奪われていないみたいね」

ほっと胸を撫で下ろしたナディールが引き返そうとすると、兵士が剣を素早く抜いてナディールの首元に突きつけた。

「王族しか蒼風石を取り出すことができないと聞いた。早く錠を解除してもらおう」

「敵の者でしたか、迂闊うかつでした。しかし、わたくしひとりでは錠を解除することはできません。錠を解除を解除するには王族の血を引く者が二人必要なですよ」

部屋にドタバタと足音が響き、小柄な影が宙に浮いた。

「ファティマキック！」

スカートを激しく揺らしながらファティマの飛び蹴りが兵士の後頭部に炸裂した。兵士はそのまま前方に倒れて気を失い動かなくなつた。

「皇女様、平気？」

ファティマがクリクリした大きな瞳で聞くとナディールは優しく微笑んだ。

「ありがとうございます。あなたはわたくしの命の恩人です。あとで褒美をとらせましょう」

「わぁーい、ご褒美ご褒美」

「では、早く逃げましょう。王族がこの場にいないければ、ラピユータが敵に侵略されようと、蒼風石は敵の手には落ちません」

ファティマの手を引いてこの場を立ち去ろうとしたナディールの前にひとりの少女が立ちはだかった。左右色の違う瞳を持

つ銀髪の少女 エムだ。

「蒼風石を頂き参った。蒼風石に掛けられている錠を解除するには王族の血を引く者が必要と聞いた。妾に協力して錠を解除してもらいたいのじゃが？」

「あなたも知らないようですが、わたくしひとりでは錠の解除はできません。錠の解除には王族の血を引く二人の人間が必要なのです」

「ならば、力づくで錠を解除するまでじゃ」

「できるものならやってみなさい」

ナディールは冷やかに笑い、エムも微笑を浮かべてどこから槍を取り出すと、天高く舞い上がった。

「魔導の波動 その下じゃな！」

部屋のある黒石に槍の穂先を向けてエムが落下する。

巻き起こる閃光。黒石を中心にしてドーム状の半透明に輝く壁が現れ、エムの一撃を受け止めた。

宙に浮いたまま壁に槍を突き刺し力を込めていたエムの身体が、凄まじい勢いで後方に吹き飛ばされた。

しなやかに空中で上体を捻って地面に着地したエムは月のような笑みを浮かべていた。

「おもしろい、妾のロンギヌスの槍が通じぬとは」

「あなたには蒼風石を手に入れることは不可能。早々にこの場から立ち去りなさい」

凜と言い放つナディールに臆することなくエムは静かに静かに微笑んだ。

「王族の者が二人必要と申したな……そちと同じ血の香りがする者がこの場に近づいてくるぞよ」

「わたくしと同じ……!？」

ナディールはファティマを見つめて部屋の扉を見つめた。ファティマがこの場にやって来たということは、あの者も来てしまいかもしれない。

部屋の扉が開けられ、三人が部屋の中に飛び込んで来た。セイとウインディとクラウディア。クラウディアを確認したナディールは心に焦り覚え、エムがクラウディアを見て微笑んだのを見て、クラウディアの焦りは頂点に達した。このエムという者はラピユータの葬られた歴史を知っている。

エムの顔を見たセイは驚かずにいらなかった。

「な、なんで君が!？」

「セイの知り合いなのか？」

ウインディがそう聞くとセイは小さく頷いた。

「でも、友達なんかじゃないんだ。あの人は僕の敵なんだ、きつと」

エムがセイに敵だと名乗ったことはない。しかし、今までのエムの行動を見てきたセイにとって、エムは敵としか考えられなかった。

左右色の違う瞳。それを見たクラウディアが言う。

「この子も魔導書の精霊ね……でも、こんなところはどうして？」

「妾は蒼風石を奪いに頂に来たのじゃ。地を這うセイレーンど

もを煽^{あお}つてラピユータに戦争を煽^{ほしか}けさせたのも妾^{めかけ}じゃ」

銀髪の少女は妖艶^{ようえん}な笑みを浮かべた。子供の顔がこんな笑みを浮かべることができのたろうか。その笑みは美しくも、内に残酷さを秘めた笑みだった。

ウインデイが怒りで顔を赤くして怒鳴り声をあげた。

「おまえが戦争を煽けただと……セイレーンでもないおまえがなんでだ！ おまえの目的はなんだ！」

「妾たちの目的は蒼風石を破壊することじゃ。セイレーンたちを使ったのは事を運びやすくするため。……それに地上に残っている者が少ない方が、計画が運びやすいのでな」

計画？

ファティマの身体がガタンと揺れて前のめりなり、ゆつくりと顔を上げたファティマの表情はファティマであって、ファティマとは別の者の表情だった。無邪気で可愛らしい表情ではなく、大人びた気高い表情。そして、ファティマの口から発せられた声も、別の女性の声だった。

「大きな神 の書き綴りし 光天の書 に宿る精霊工ム。

大きな神 を何度世界を創造し破壊し、幾つもの種族を創り殺し、いつになれば 大きな神 が満足する世界が創造されるのだ？」

この女性の声を聞いた工ムが少し目を丸くして微笑んだ。

「ほう、大魔導師ファティマの残留思念か。偉大なる人に隠れてファティマが取っていた不審な行動はそれであったのじやな。ファティマは ファティマの書 に自らを書き写した。

じゃが完全とは言えず、妾たちの計画は誰にも邪魔はさせぬぞよ」

目にも止まらぬ速さで地面を駆けたエムはセイの首元に槍の穂先を突きつけ微笑んだ。

セイを人質に捕ったエムはクラウディアに顔を向けた。

「この国の真の第一皇女クラウディアよ、ナディールとともに蒼風石に掛けられておる錠を解除のじゃ！」

この言葉に誰もが驚きを隠せなかった。中でも一番驚いたのはウインディであった。

「クラウディアが皇女だって!? 莫迦な、そんなことがあるわけないだろ、俺はこいつのことガキの頃から知ってたんだぜ？」

ウインディに見つめられたクラウディアはうんざりした感じで鼻で笑った。

「本当らしいわ。小さい頃に王宮から大臣が隠密に訪ねて来て聞かされたのよ。この国の第一皇女として生まれたわたしは捨てられたのよ」

クラウディアの話を継いでナディールが話をはじめた。

「小さい頃わたくしは姉は流産したものだとかえられて育ちました。ここまででは国民全員が知らされていた公式のラピュータ史です。ですが真実は違います。わたくしは母に姉が生きていることを知らせれ、なぜ国民に姉が流産したと嘘をつかなければならなかったのか聞かされたのです。それは生まれた子の翼が黒かったからです」

この話を聞いたウインディは理解した。

この国では黒い翼を持って生まれた子は災いをもたらずと云われ、過去には黒い翼を持った子は生まれてすぐに殺されるか、国の外に捨てられることがあった。しかし、現在ではそのようなことなくったが、昔の迷信は今でも語り継がれ、黒い翼を持ったセイレーンは迫害を受けることが多い。ウィンディの知るクラウディアもそうであった。クラウディアは小さい頃から虐めに遭い、今でも他人との交流を多く持たず生活をしている。

セイに突きつけていた槍をエムが近づけた。

「早う蒼風石に掛けられておる錠を解除のじゃ！」

だが、クラウディアもナディールも首を横に振った。そして、クラウディアとナディールが順に話をした。

「蒼風石を奪い、守るための戦争に多くの命が失われた」

「もし、ここで蒼風石が奪われれば、ラピュータは地に墮ちるでしょう。その子には悪いですが、わたくしはこの国の民を優先して守る義務があるのです」

「でもね、わたしは思ったことがあるのよ。蒼風石なんてなければいいのにつてね」

クラウディアは部屋の中央にある黒石の上に手を置いた。すると、どこからか人の合成音を聞こえた。

《ロツクを解除するには、もう一人の認証が必要です》

全員の視線がナディールに向けられた。

「わたくしは手をお貸しできません。その子を殺すなら殺しなさい」

その言葉を受けてエムが槍を素早く動かした。

「止めて！」

叫んだのはナディールであった。

槍を離されたセイの首筋には紅い線が走っていた。

すでに気高い皇族の表情を取り戻しているナディールがクロウディアの横に立った。そして、長い静寂を置いて、手をゆつくりと黒石の上に乗せた。

「王族二人を認証しました。ロックを解除します、この場から速やかにお下がりにください」

部屋中から齒車の動く音が聞こえ、クロウディアとナディールが黒石から離れると、床が動きはじめた。

部屋全体が輝きだし、黒石を中心にして辺りの床に円形の線が走り、線の走った床が底からゆっくりとゆっくりと上がる。

そして、半径二メートルほどの透明な筒状の入れ物が現れた。

その中が淡く蒼く輝く巨石　これが蒼風石だ。

部屋中に巻き起こる風がドーム状の部屋を休むことなく回り続ける。その風は立っているのもやつのほどで、セイは地面に手を突いてしまっただった。

エムは蒼風石を目の当たりにして笑みを浮かべた。

「まだ完全に封を切られてもいないのに、なんたる力じゃ。

偉大なる人の脅威になることがよくわかる」

槍を構えたエムが蒼風石の入れられた筒に向かって駆け出す。そして、槍は筒を貫かんとする風を切る。

エムの持つロングヌスの槍が、蒼風石を安置する透明の筒を

貫くその瞬間、煌きとともに甲高い音が部屋中に響き渡った。

「妾に牙を向けるか」

ロンギヌスの一撃を受け止めたのはファティマの持つ槍であった。その槍は燦然と太陽のように輝き、切っ先は五本に分かれていた。

「私はこの世界が好きだ。この世界を書に綴り、旅をしているうちにその想いは強くなった。私は貴女に牙を向けているわけではない、大きな神にだ！」

そう声をあげたファティマは槍に力を込めて、エムの身体を相手の槍ごと突き放した。

後ろに突き飛ばされたエムが止まることなく、地面を蹴り上げてファティマに飛び掛かる。それに合わせてファティマも軽やかに地面を蹴り上げ、エムの攻撃を迎え撃つ！

ファティマとエムの激しい攻防戦が繰り広げられる中、クラウディアが静かに呪文の詠唱をはじめていた。

「風よ火よ、爆炎を巻き起こし障壁を破壊せよ　ファイアーボール！」

紅蓮の炎が渦を巻きながらエムに向かって飛んでいく。

エムはファティマとの戦いに集中しながらも、他に気を配ることも忘れてはいなかった。炎を見取ったエムはファティマの一撃を弾き返し、片手を槍から離して人の使えない術を放った。「水よ唸れ呑み込め！」

エムの手から放たれた水は渦巻く蛇と化し、巨大な口を開けて炎をひと呑みにして、地面に落ちて水飛沫を上げた。

一瞬の隙を突き、ファティマがエムに槍を突きたてた。エムはそれを振り払おうと槍を振り上げたが、ファティマの一撃の方が早かった。

「妾を……」

五本に分かれていた切っ先がエムの身体を貫いていた。血は出ない。そのかわりに光り輝く粉が宙を舞っていた。

エムが月のような静かな笑みを浮かべた瞬間だった。槍で身体を射抜かれてもなお、片時も離さなかったロンギヌスの槍が離されたのだ。

投げられたロンギヌスの槍が風を切り透明の筒を破った。筒が硝子のように弾け飛び破片が舞い、ロンギヌスの槍は蒼風石を貫いていた。

轟々と風が唸り、蒼風石が碎け飛んだ。

さらに強い風が巻き起こり、すでに身体を構成する物質が煌く粉となっていたエムが風に煽られ消えた。

この場にいた者はすでに立つことさえ困難な状況に追いやられ、その中でウィンディが声を荒げた。

「みんなこの部屋を早く出るんだ！」

破壊された蒼風石があった場所には闇色の穴が口を空け、その間は全てを吸い込もうとしていた。出口に向かおうにも闇色の穴に引きずられて、地面にへばり付いているのがやっとだった。

爆風の中でファティマが声をあげた。

「私が一時的に 混沌 を封じるから、その隙に出口に走

れ！」

蒼風石が破壊されて現れた穴は 混沌 と呼ばれるものであった。

ファティマの持つ槍の穂先が激しく輝きはじめる。そして、その穂先に大人が手を広げても抱きかかえられないほどの大きさの光の玉が現れた。

槍でバツドのスイングでもするようにファティマが光の玉を飛ばした。

「今だ走れ！」

ファティマの合図で全員がいつせいに出口に向かい、光の玉は空間に開いた 混沌 の入り口を塞いだ。しかし、それも一瞬で、光の玉はズブズブと音を立てながら 混沌 に吸い込まれていく。

四人までが部屋を抜け出したところで、光の玉を呑み込んだ 混沌 は再び辺りの空気を吸い込みはじめる。

五人目のファティマが部屋の出口まで辿り着く前に身体が宙に浮いてしまい、ファティマは慌てて槍を前に突き出した。その槍の柄をセイが掴み、セイの身体をウインディが、ウインディをクラウディア、クラウディアをナディールが、と続いた。

混沌 が辺りのものを吸い込む力は次第に強くなっていった。ファティマの足を浮かせて、宙に真横に浮かびながら身体を激しく揺らす。揺れれば揺れるほど、その手を掴むセイの手は引きちぎられそうな痛みが走った。セイはファティマの身体を引き上げる力はなく、ファティマの手をやっとの思いで掴んでい

た。

セイの後の三人が力を込めて、セイの身体を後ろに引く。ゆっくりとゆっくりとファティマの身体は部屋の出口へと引き寄せられ、やっとの思いでファティマは部屋の外まで引つ張られ、そこでファティマは瞬時に部屋の扉を閉めた。

「これで安心だ。あの部屋に張られている結界で 混沌 も外に出れまい」

混沌 に対しての不安はなくなったとファティマは語るが、別の不安についてナディールが語った。

「ですが、蒼風石は壊され、ラピュータはやがて地に墮ちます」

「俺が思うにだな。蒼風石から送られていたエネルギーの貯蓄が尽きるのは、ざっと一時間から二時間つてところだな」

ウインディがそう説明すると、残りの者たちは沈黙して頭を抱えた。

ラピュータの落下は緩やかなものではなく、急落下だ。ラピュータを宙に浮かせていた蒼風石のエネルギーはある程度の貯蓄がある。そのため、すぐに落下ということはないのだが、貯蓄されていたエネルギーが尽きた時、ラピュータは急落下をはじめめる。

しばらくしてナディールが口を開いた。

「国中の人々にラピュータから脱出するように、宮殿内にある管理室から呼びかけましょう」

その意見に一同は頷いて、隠し通路の中を走り出した。

しばらく走っていると前方から剣を構えた男たちが狭い廊下の中を走って来た。それを見たナディールが声をあげる。

「我が国の兵士ではありません」

となると民間人が敵かということになるが、向かってくる男たちは明らかな殺気を示していた。

クラウディアが呪文の詠唱をする。

「風よ、見えない鎖となりて敵を捕らえよ　エアチエーン！」

敵の男たちの身体を見えない鎖が拘束し、身動きのできなかった男たちは地面に倒れこんだ。その上をウィンディが踏んで走り、あとに続いた者たちは男たちの隙間を縫いながら足を運ばせて通過した。

振り返って倒れた男たちを見たウィンディが呟く。

「そう言やあ、宮殿内には敵がいるんだったな」

ウィンディの言葉を受けてナディールが頷く。

「そうですね、敵もどうにかしないとけませんね。宮殿内だけでなく、町でも戦いは続いていると思います」

戦いを終わらせ、蒼風石が破壊されたことも告げ、ラピュータを墮ちることも告げなければならぬ。一分一秒も無駄にできない状態だった。

五人は足を速め隠し通路の中を駆け抜け、曲がり道が現れると先頭を走るウィンディに、後ろを走るナディールから道順の指示が飛ぶ。

前方に扉が見えてきた。そこでナディールがウィンディに指

示を出す。

「扉を出たら廊下に出ます。すぐに右に曲がって突き当たりにまで走ってください。そこに管理室があります」

隠し通路を抜け出し、ウインディはすぐに右に向かつて走り出した。その後をあの者が追うのだが、セイはすでに体力の限界であった。

「僕もう駄目です、みなさん先に行ってください」

その場に止まったセイに合わせて他の者も足を止めた。

ファティマが槍を廊下の向こうに指し示す。

「セイのことは案ずるな。私がここに残るから、皆は先を急ぐがよい」

「では、わたくしたちは先を急ぎます」

そう言つてナディールが頭を下げた走り出し、次にウインディ、クラウディアと続いた。

「じゃあなセイ、後で会おうな！」

「ファティマはあたしの研究対象だからね」

そう言つてウインディとクラウディアはナディールの後を追つて行つた。

残されたセイは膝に手を置いて肩で息をしていた。

「こつちの世界に来てだいぶ体力ついたけど、まだまだ駄目だな」

「少し休んだらすぐに後を追おう」

今更ながらファティマの口調を聞いて、セイはまじまじとファティマの顔を見つめた。その顔つきはいつものファティマと

は違う、大人びた表情だった。

「ファティマってファティマだよ。でも、いつものファティマとは違うよね、君って誰なの？」

「ふふ、私はファティマだよ。でも、君が最初に出逢ったファティマとは違う存在だ」

「意味がよくわからないんだけど？」

「私は人から 砂漠の魔女 と呼ばれていた魔導師だった。けれども今はこの世にはいない」

「はあ？」

まだ理解しきれていないセイが首を傾げると、ファティマは優しく微笑んで語りはじめた。

「魔導師ファティマが私の名。そして、私が書いた魔導書 ファティマの書 に宿る精霊の名もファティマと言う。私は死ぬ前に自分の精神を魔導書に書き記して置いたのだよ。つまり、今ここにいる私は精霊ファティマの身体を借りて語っている亡霊のようなものということになるかな」

「精霊の方のファティマはどうなっただんですか？ 死んじゃったんですか？」

「いいや、死んではいない。今は私の方が外に出ているだけで、この身体の奥で眠りにについているようなものだ。彼女が目覚めれば私が眠りについて、彼女が外に出ることになる。その正確な時期はわからないが、そのうち彼女は目覚めるから心配しなくても平気だよ」

「もうひとつ質問いいですか？」

「なんだね？」

「なんで魔導書に自分のことを書いたんですか？」

「それは……彼女が目覚めそうだ。すまない、この話は今度聞かせてあげよう、では」

「あっ」

目をつぶったファティマの身体から力がスーッと抜けていき、手に持っていた槍が消えてパツと大きな瞳を見開いた。

「あれ、ボクいつの間にかこんな廊下来たんだっけ……寝ながら歩いてきたのかな？」

どうやら魔導師ファティマが外に出ていた時の記憶はないらしい。ということとは二人のファティマは記憶を共有していないのかもしれない。それにしても魔導師ファティマの方は、セイのことをよく知っていたような雰囲気だった。魔導師ファティマは精霊ファティマの記憶を共有していて、精霊ファティマの方だけが記憶を共有していないのかもしれない。

少し休憩も取ったことだし、セイは大きく深呼吸してみんなの後を追うことにした。

「ファティマ行くよ」

「行くつてどこに？」

「とにかく、廊下の向こうの部屋に行くの」

「うん、なんとなく了解！」

二人は管理室に向かって走り出した。

セイとファティマが廊下を走っていると、曲がり角から兵士

たちが飛び出ししてきた。セイはその兵士たちに見覚えがある。ラピュータの兵士だ。

銃火器を構えた兵士の一人が声をあげる。

「おまえらのような子供がなにをやっている！」

「あの、僕らはその……」

セイは口ごもってしまった。なにをやっていると聞かれても、一言では説明できないくらいいろいろいることがあった。

困った顔をセイの横でファティマが呑気に言った。

「ボクたち牢屋を脱走したんだよ、すごいでしょ？」

思わずセイが身を凍らす。そして、兵士たちがいつせいに銃火器をセイとファティマに向けた。

「そう言えば、左右色に違う瞳を持った猫人の少女と、その仲間が牢屋に入れられたと聞いているが……貴様たちか！」

セイはまた捕まえられるか、最悪殺されるかもしれないと思ったが、ちょうどこの時に宮殿中、そして国中に取り付けられたスピーカーから声が聞こえた。

《争いをしている者たちよ、その手を休めわたくしの話をお聞きなさい！》

その声はこの国皇女ナディールのものだった。

《わたくしはこの国の皇女ナディール。我が国の兵士たちよ、武器を休めなさい。そして、地上から攻めて来たセイレンたちも、どうか武器をお納めください。もし、休めぬと仰るならば、わたくしが王に代わって敗戦を認めてもいい。だからどうか武器を収めてわたくしの話を聞いてください》

ナデイルの声は国中に響き渡り、ラピュータ軍はすぐさま武器を収め、ナデイルの敗戦宣言を聞いた地上から攻めて来たセイレーンたちも武器を収めた。ラピュータの民は失意の底に沈み、戦いに勝ったと思い込んだ地上のセイレーンたちは歓喜に沸いた。しかし、次の瞬間にはこの国いた全ての者たちに動揺が走った。

《わたくしの話を聞いてください。セイレーンの宝　蒼風石が破壊されました。あと一時間もすれば、ラピュータは地上に落下します》

セイの目の前にいた兵士たちは武器を地面に落として倒れるように座り込んだ。

「蒼風石が破壊された……俺たちはなんのために戦って来たんだ……」

「あ、あの、みなさんも早く逃げてください」

肩を落とし頂垂れる兵士たちにセイは声をかけて先を急いだ。セイたちはすぐに管理室に辿り着いてドアを開けた。部屋には管理モニターや通信機などが置いてあり、この国の科学的な面が伺えた。その部屋で三人はパイプ椅子に座りながら困った顔をしていた。

「おうセイ、どうにかまた会えたな」

軽くウインディは手を上げてセイに挨拶をしたが、その声にはいつもの覇気がなかった。

「どうしたんですか？」

とセイが訪ねると、クラウディアがため息をつきながらお手

上げのポーズをした。

「どうもこうもないわ。大問題発生よ」

「事件だ、事件だあ！」

はしやぎ出すファティマの口を塞いだセイが、ナディールに相手を絞って質問した。

「大問題ってなんですか？」

「この国にはセイレーン以外の種族も多く住んでいます。セイレーンは空を飛んでラピュータから脱出することができるでしょうが……」

ナディールは最後まで言わなかったが、セイはその言葉の意味を理解した。

「でも、この国にセイレーン以外の種族が住んでるってことは、空を飛ぶ交通手段があるはずですよね？」

「それがあると言えるほどないんだ」

ウインディがそう言って話を続けた。

「この国は他の国との交流を極力控えているんだ。だから大型の交通手段はないというか、そんな乗り物はこの世に存在しない。セイレーンは空を飛べるから空飛ぶ乗り物なんて必要ないのさ。この国に来る商人たちは巨鳥や小型のドラゴンを交通手段として使ったりするが、この国に住む全てのものを運ぶには数が足りなさ過ぎる。仮にもセイレーンが羽のない種族を担いで運んだとしても、この国には動物たちもいるんだ。全部は無理さ」

この話をナディールが引き継いだ。

「地上に住むセイレーンたちとわたくしたちは長い間、争いばかりしていました。しかし、セイレーンはもともと自然を愛する種族であり、この国住む動物たちを見捨てるわけにはいかないのです。ですから、やれるだけのことはやらなければいけないのです」

そう言っただけで立ち上がったネディールは、マイクの電源を入れて国中に放送を流した。

ネディールは放送によつてこの国にいる全ての者に協力を仰いだ。翼の持たない所屬と動物たちを運んで欲しいと。しかし、その願いが本当に届いたかわからない。

そして、モニターをチエックしていたウィンディがいきなりデスクを両拳で叩いた。

「クソっ！」

全員の目がウィンディに向けられ、ウィンディが怒ったような困ったような、なんともつかない表情をした。

「まったく、悪い知らせがある。ラピュータの真下に国がある。ラピュータの移動速度じゃ、避けきけることは不可能だ。わかるだろ、この意味？」

その意味はわかる。天空都市ラピュータの大きさは、真下にある国を押し潰すだけの大きさがある。もはや被害は天空都市ラピュータだけでなく、他国の都市まで及ぼうとしていたのだ。クラウディアが力なく手を上げて発言をした。

「今思いついたことあるんだけど、この高さからラピュータが落ちたら、木っ端微塵になることは間違いないんだけど、その

なんていうか、蒼風石の安置されていた部屋も壊れるわけじゃない？ 封じ込められていたあれも出てくるわよね……」

あれとは 混沌 のことである。あの部屋に封じられていた混沌 が外に出れば、ふたたび全てのモノを吸い込みはじめるだろう。

芋づる式に状況は悪化していく。

大きく息を吐いたウィンディが再びデスクを強く叩いて立ち上がった。

「だからって、もう何もできないだろ！ ラピュータは絶対に落ちる」

沈黙が辺りを包み込む。

しばらくしてファティマが元氣よく手を上げた。

「はい、はい。ラピュータが落ちなきゃいいんだよね。だつたら、蒼風石を復活させればいいじゃん。みんなこんな簡単なこと思いつかないなんて、意外におばかさんなんだね」

ファティマの言うことは決して簡単なことではないと誰もが思った。そして、クラウディアが突っかかるようにファティマに質問する。

「復活ってどうやってやるのよ？」

「説明しよう。蒼風石を創り出したのは 小さな神 の中でも実力のある四界王のひとりゼーク。彼女に頼んで蒼風石を直してもらえばいいんだよ！」

「その風の女王ゼークをどうやって呼ぶのよ、神様がそんなに気軽に来てくれるわけないでしょ？」

「ボクさつき夢見てた時、いろんなことを思いだしたんだあ。ボクのことを書いた 砂漠の魔女 はゼークが蒼風石を創造する時に立ち会ったんだよ。だから 砂漠の魔女 の友達はボクの友達。ボクが呼べばすぐに来てくれるよ。じゃあ、そういうことでみんなで屋外の広いところに行こう！」

しかし、誰も動こうとしない。ファティマの話を信用していないのだ。そんな簡単にゼークが現れるとは考えにくい。それにゼークは気まぐれな神としても有名だった。

少し顔を膨らませたファティマがセイの服を引っ張る。

「ねえ、早く行こうよ、時間なんですよ？」

「僕、ファティマと一緒に行ってきます」

セイがそう言うと、クラウディアが椅子から立ち上がった。

「わたしも行くわ。魔導師の力が必要になるかもしれないし。ウインディとナディールはここで国をモニターしてて頂戴」

ナディールは頷き、ウインディも少し遅れて頷いた。しかし、ウインディは不満そうな顔していた。

「俺だって本当はなにかしたんだよ。でも、もう無理だ」

卑屈になっているウインディをクラウディアは鼻で嗤った。

「科学のことにになると夢とか希望とかでいっぱいなのクセして、こんな時はすぐにあきらめるのねあなたは」

ウインディが言い返す前にクラウディアは部屋を駆け出して行った。その後をセイとファティマが追った。

クラウディアの横を走るセイが声をかけた。

「あの、道わかってるんですか？」

「大丈夫よ、管理室で宮殿のだいたいの道は把握したから、中庭とかでいいんでしょ？」

とクラウディアがファティマに顔を向けると、ファティマは大きく頷いた。

「うん、外に出ればいいんだよ」

宮殿内はすでに静けさに満ち溢れていた。もうすでに人々は非難してしまつたに違いない。本当はセイもファティマも、クラウディアもウインディもナディールも、早々に非難しなければならなかった。しかし、残つたのだ。

やがて三人は水と花々に囲まれる中庭に辿り着いた。細かく張り巡らされた水路に水がせせらぎ、花の香りがそよ風に舞う。風の女王を呼ぶには相応しそうな場所だった。

「そんじゃ、ご主人様は魔導書を出して呪文を唱えるんだよ」
ファティマに言われセイは首に提げていたバッグの中から魔導書を取り出した。不思議なことに、魔導書のページが風もないのに勝手に捲れ、目的のページを開く。そして、この世界の文字が読めないはずのセイに文字は読めた。読めたというより、頭に直接入ってくる感覚だった。

「我は汝なんじを召喚する。おおゼークよ、我は至高の権威をよるいて汝に強く命ず……我が前にその姿を現したまえ！」

強風が吹き荒れ、花が散りて空に舞った。天高く舞う花びらは渦を巻き、陽の光を浴びて輝く。そして、何者かが逆光を浴びて舞い降りてきた。

羽の生えた透明感に溢れる美少女が、薄絹を纏って天から優

美に舞い降りてくる。その姿を見たセイはこう呟いた。

「……天使？」

天から軽やかに舞い降りてきたゼークはわざわざ腰を曲げて、魔導書を持ったセイの顔を下から覗き込んだ。

「アンタがアタシのこと召喚したわけ？ アタシ、ちょー忙しいんだケド？」

……セイが思っていた神のイメージとはだいぶ違う存在だった。近くいたクロウディアも口をあんぐり開けている。クロウディアもまさかゼークこんな少女だとは思ってみなかったのだろう。

「僕が召喚しました。それで、あの……」

「アタシ嫌よ。召喚されちゃったからなんとなく来てみたケド、こんなガキにだって知ってたら来なかったわよ」

なんてワガママでいい加減な感じのする神様なんだろうと、セイは心の中で思った。しかし、この神に頭を下げてでも頼まなくてはいけないことがある。

「あの、蒼風石が破壊されちゃって、直して欲しいんです。お願いします！」

頭を下げたセイの目の前にいるゼークは驚きを隠せないようすだった。

「マジでーっ!? 蒼風石が壊せれちゃったの、どこの誰に?」
どこの誰にとゼークが三人に顔を向けると、クラウディアが答えた。

「大きな神 の書き綴りし 光天の書 に宿る精霊エムでよ
かったかしら？」

その名を聞いたゼークはため息をつきながら、オーバーリア
クションでおでこに手を当てた。

「あゝっ、あの 大きな神 の僕 メシア・エムか。大き
な神 の計画にはアタシら 小さな神 も反対で、大きな
神 を探し出してぶっ潰してやろうと思ってるんだケド、あの
エムってガキが世界を滅ぼす方が早そうで困ってるんだよね
え」

ゼイはゼークがなにを言っているのかよくわからなかった。
けれど、大きな神 が 小さな神 の敵であることがわかつ
た。大きな神 とは善の象徴ではないのかもしれない。そし
て、大きな神 とはもしかしたら自分の敵なのかもしれない
とゼイは考えた。

大きなあくびをして背伸びをしたゼークが急に凜とした表情
になった。

「蒼風石があった場所に案内しなさい。おそらくあれは今、
混沌 になっっているんでしょ」

ゼークは蒼風石を直してくれることを約束してくれたのだ。
ファティマがガッツポーズをしてゼイに抱きつく。

「やったねご主人様、ゼークはやっぱりいい人だね！」

「だからさ、僕に抱きつかないでくれるかな、ちょっと恥ずか
しいから」

近くにいたクラウディアもツッコミを入れる。

「時間がないんだから、イチヤつくなら全部終わってからにしないさい」

セイは顔を赤くしてファティマの身体を無理やり離れた。

はしゃいでいるファティマの顔を見ていたゼークが呟いた。

「アンタどこかで会ったような気がするのよねえ、名前は？」

「ボクの名前はファティマ。偉大なる大魔導師ファティマによつて書き綴られた魔導書に宿る精霊だよ！」

「アンタがあの中の魔導書!? しかも、あの人を書いたとは思えない精霊が生まれちゃったのね」

呆れ顔で笑ったゼーク。しかし、すぐに真剣な顔に戻り、ファティマを指差して指先をぐるりと回した。それを残りの二人にもすると、ゼークになにかをされた三人の身体が宙から少しだけ浮いた。ゼークは三人に宙を浮く魔法を施したのだ。

「そっちの方が移動速度が速くて便利でしょ。そっちの方に行きたいなって思えば勝手にと飛ぶから、スピードの出しすぎには気をつけてね。じゃ、蒼風石があつた場所まで案内して」

クラウディアが最初に飛び出した。それはまるで風のようなスピードだった。すぐに残りの三人も宙を舞って先を急ぐ。

廊下を飛び抜け、隠し通路を使って蒼風石が安置されて居場所まで向かう。そして、風のようにあつという間に扉の前まで来てしまった。この扉の向こうに混沌は今も渦巻いている。

なんの躊躇ためらいもなくゼークは扉を開けた。

部屋いっぱい広がっていた混沌は一步一步部屋を歩くゼークに押されていた。そのゼークは小声でなにかを呟いてい

る。

「アタシはアタシ、アンタは蒼風石。混沌 なんてやってないで、さっさと蒼風石になりなさいよ」「

それは 混沌 と自分を明確にわかる。

それは 混沌 に命令をする。

それは 混沌 を変える。

ゼークに押されている 混沌 は徐々に部屋を中心に集まり、その形を変化させていった。混沌 に形が与えられる瞬間だ。

目の前の光景を見てクラウドディアが声を漏らす。

「小娘だと思ったけど、やっぱり神だわ……」

そして、混沌 は蒼風石に変わった。しかし、全員はあるものを見て驚愕した。

「妾を見て驚いているのかえ？」

静かな月のような笑みを浮かべる少女。蒼風石のすぐ横にはエムが立っていたのだ。

エムの姿を見たゼークが騒ぎ出す。

「マジで、なんであんなのまで生まれんのよ。混沌 にあんなのが混じってるなら、先に言えよ、ばーか、ばーか、ばーか！」

すでにゼークとクラウドディアは戦闘態勢に入っていた。そして、エムも。

ロンギヌスの槍を片手に持ち、エムは残った手を四人に向けていた。

「火よ唸れ燃やせ！」

エムの手から放たれた火炎が渦を巻き襲い掛かってくる。すぐさまゼークが前に飛び出した。

「風よ我らを守りなさい！」

ゼークたちを守るように風が巻き起こり炎を防ぐ。そして、ゼークが再び声をあげる。

「風よ運びなさい！」

炎が風に運ばれエムに向かっていく。だが、エムは余裕の笑みを浮かべている。

「水よ唸れ呑み込め！」

エムの手から放たれた水は渦巻く蛇と化し、巨大な口を開けて炎をひと呑みにして、地面に落ちて水飛沫を上げた。

ゼークとエムが戦う中、セイとファティマは壁に寄って身を潜めていた。

「ご主人様、ここが男の見せ所だよ。魔導書を開いて呪文を唱えて」

「え、あ、うん、でも……」

以前に一度だけ使った魔導書の力はセイの想像を超えたものであった。あんな力をこの部屋の中で使ったら、どんなことになるか考えただけでも恐ろしい。

「ご主人様、魔導書を開いてよ」

「そう、大丈夫。あの子の動きを止める魔法を選べば大丈夫」

セイは魔導書のページを開き、ここだと思つところを選んだ。そのページに書かれた文字がセイの脳に流れ込む。

「風よ、見えない鎖となりて敵を捕らえよ エアチエー

ン！」

セイが持つ魔導書から放たれた風がエム向かって飛んでいく。ゼークとの戦いに集中していたエムは向かってくる風に身体も向けず、槍を使って簡単に風をなぎ払い消してしまった。セイの放った魔法など眼中にないのだ。

「ご主人様、もつと強力な魔法でやっちゃってよ！」

「駄目だよ、僕にはできない。お願いだから、もう一人のファティマ出てきてよ」

ファティマはきよとした表情をした。ファティマにはセイの言う、もうひとりのファティマの意味がわからないのだ。

戦いの情勢は五分と五分だった。風を操るゼークを槍と魔法でエムが応戦する。この状況で戦いは五分と五分だった。

クラウディアは離れた場所で呪文の詠唱をしていたのだ。

「　　ダークネメシス！」

クラウディアの黒い翼が大きくなったように見えた。それは巨大な黒い鎌だった。クラウディアの背後に巨大な鎌が幾つも見つても現れ、その鎌は全てを切り裂く勢いでエムに向かって飛んでいく。

ゼークの放ったサイクロンが渦を巻きながらエムに襲い掛かり、その背後からは闇の鎌が迫っていた。エムは逃げ場を失い、地面を蹴り上げ舞い上がった。しかし、エムの顔が歪む。

舞い上がったエムのその上にファティマはいた。そう、“もうひとり”のファティマが　　。

「油断したなエム！」

ファティマの言葉とともにエムの身体は槍によって射抜かれていた。

宙に浮きながらファティマは槍を抜き取りエムから素早く離れた。

ゼークの放っていたサイクロンが地面に落ちる途中だったエムを巻き込み、クラウディアの放った雷の鎌がエムの身体を切り裂く。鎌はサイクロンによって渦巻き、その中心にいるエムの身体は跡形もないまでに切り裂かれていった。

サイクロンの中で煌く粉が舞った。それはエムの破片であった。

やがてサイクロンは治まり、その場には何も残っていなかった。

「やったの？」

クラウディアがそう呟いてサイクロンがあった場所に走り寄った。それを見てファティマが叫んだ。

「まだだ！ その場を離れる！」

「えっ……!?」

クラウディアが目を見開き、セイは顔を手で覆い隠した。

「妾はまだ生きておるわ」

槍を伝って紅い雫がエムの手を鮮やかに染め上げた。

息を呑むクラウディア。その身体はロンギヌスの槍によって射抜かれていた。深く深く射抜かれていた。深く。

槍を抜かれたクラウディアが地面に堕ちる。セイの目に映ったその光景は音もなくスローモーションに見えた。信じら

れない。

セイが手に持った魔導書のページが激しく捲り上がる。そして、燦然たる輝きがセイの身体を包み込み、魔力のこもった風が当たりに吹き荒れる。力が解放されようとしている。

エムは淡く輝く月のように微笑んでいた。

ゼークは恐怖に身震いした。

そして、ファティマの目が見開かれる。

魔導書と精神を共有するファティマは、なにが起ころうとしているのかを悟ったのだ。

「セイ、その呪文は唱えていけない！」

ファティマの声はセイに届かない。セイの精神はすでにこの場になかった。今の彼は無意識の中に動いていた。

セイの口元が微かに動いた刹那、世界は輝きに包まれた。

「セ
」

誰かが叫んだ。しかし、眩い光に全ては呑み込まれていた。音すら吞まれた。

そして、全ては白になった。

闇の中から目を覚ました。

セイが目を開けると、そこはふかふかのベッドの上だった。

「僕は……？」

ふと横を見ると、椅子の上に一冊の魔導書が置かれていた。下半分が焼け焦げ消失してしまっている魔導書。それはファティマの書 だった。

セイは慌てて魔導書を手に取った。

「どうして……?」

わからなかった。なぜ、魔導書が焼け焦げてしまっているのか。そう、ファティマは?

部屋に誰かが入って来たのを感じてセイが叫ぶ。

「ファティマ!」

違った。

「俺だ、すまんファティマじゃなくて」

部屋に入って来たのはウィンディだった。そして、その後ろにはクラウディアもいた。

クラウディアの顔を見てセイはほっと胸を撫で下ろした。

「よかった、生きてたんだ」

「わたしのこと勝手に殺さないですよ。まあ、ゼークがいなかったら死んでたけど。彼女のお陰で一命を取り止めたのよ」

「あの、ファティマは?」

セイが尋ねるとクラウディアとウィンディは顔を見合わせて黙り込んだ。その沈黙はセイの心に不安と重圧感を与えた。

「ファティマはどうしたんですか!」

ウィンディはセイと視線を合わさず、クラウディアが静かな口調で答えた。

「いかなかったの。辺りが突然光に包まれて、世界に色が戻ったと思ったら、エムもファティマもいなかったのよ」

「いないってどういうことですか? 魔導書はここにあるのにファティマがなんでいないんですか!」

焼け焦げた魔導書を見てセイははっとした。表紙に手をかけて開こうとしても開かない。セイは愕然がくぜんとした。

クラウディアが言葉をセイに乗せた。

「その魔導書の力は明らかに弱まっているわ。精霊の宿る魔導書は強大な力を持っているのよ。その魔導書には、もうその力はない」

ファティマはいない。

それが事実だった。

第三幕 果てない

ラピュータは墮ちることなかった。

左右色の違う瞳を持った少女がこのラピュータに現れる時、災いが起き、ラピュータが地に墮ちる……。迷信は外れたのか？

左右色の違う瞳を持つ二人が消えたからかもしれない。

セイはしばらくの間、セイレーンの友人であるウィンディの家で世話になっていた。しかし、そのウィンディはある日突然、書き置きとセイを残して旅立ってしまったのだ。

外の世界が見たくなかった。

書き置きにはそう書かれていた。なんだかウィンディらしいかもとセイは思った。

ウィンディがいなくなった後もセイはウィンディの家に留まった。その間、度々隣に住むクラウディアが訪ねて来た。そして、彼女はこんなことを語ったりした。

蒼風石なんてなければいいって考えたこともあったわ。

でもね、本当になくなったなら最低ね。蒼風石のロックを解除したのはわたしだし、だからついて行ったんだけど、とんだ目に遭ったわね、刺されるなんて。

と笑っていた。それにつられてセイも笑った。

そう言えば、ナディールもちよくちよくお忍びでセイのもと

にやって来ていた。本当はセイのところに行って来るのが目的ではなく、姉のクラウドディアを訪ねたついでにセイのもとを訪れるといった感じだった。

ナディールはセイのもとに行って来るといつも同じ話をした。

わたくしはお姉さまに皇女の地位について欲しいのです。お父様もお母様も、お姉さまを皇女として正式に迎えることを約束してくださいのに……、お姉さまは承諾してくれないのですよ。わたしは皇女なんて柄じゃないわつて言うのです。セイさんからもお姉さまになんとか言ってください。

ナディールは皇女になることよりも、今までどおりの生活を選んだ。小さい頃から羽が黒いことによって迫害を受け、今でも周りの目は冷たいのに。セイは自分だったら喜んで皇女になるけどなと思った。

そんな日々が流れ去っていった。平穏な毎日だ。

そして、ある日セイは旅立つことを決意した。どこに向かうでもない。ただ旅をしたかっただけ。

地上まではクラウドディアに送ってもらった。その時に王宮を抜け出して来たナディールも見送りに来てくれて、旅に必要な金品をセイに渡してくれた。

セイは二人にお礼を言つて旅立った。いつかまた逢うことを約束して。

旅の途中でセイは多くの人と出会い、立ち寄った町で日雇いのバイトをして、時には旅の同伴を得て楽しく旅を続けた。

日々は流れ去り、ある日の夕暮れ時に、セイは砂漠の真ん中

にある小さな集落に辿り着いた。

乾いた砂が地面を覆いつくし、土を固めて作られたと思われる四角い家が立ち並ぶ。この集落はもともとオアシスのあった場所に造られた集落で、集落の一角には緑に囲まれた湖があった。ここは砂漠の中にある、潤いに恵まれた集落だった。

この集落には宿がなかった。小さい集落なのでしかたない。けれども、よくあることなのでセイは慌てずに今晚泊めてもらえる家を探し歩いた。

何件かの家を回り、セイは一人暮らしのお婆さんの家に泊めてもらえることになった。その家にはセイ以外にもうひとり旅人が泊まっているらしい。

お婆さんが語るには綺麗で色っぽい女性だとのことだが、ちょうど今はどこかに出かけてセイは顔を合わせることはできなかった。

セイは砂漠を歩く途中に砂煙にまかれ、全身が砂だらけになっていたために、お婆さんにお風呂がありますかと尋ねると、外の湖で流しておいでと言われた。

身体を拭く大き目の布を借りたセイは湖に向かうことにした。すでに空には星が煌き、三日月が静かに輝いている。

夜の砂漠は寒かった。昼間との温度差のせいでよけいに寒く感じる。

セイが湖に着くと、そこでは先客が水浴びをしていた。月明かりに照らされる美しき身体の曲線美。セイは思わず目を伏せた。水浴びをしていたが女性だったのだ。

セイは早々に立ち去ろうとすると、その背中に声をかけられてしまった。

「ちよつとあんた！」

「はい、なんででしょうか？」

セイは振り向かずには返事をした。すると、セイの耳に女性が近づいて来る足音が届いた。

「あんた、あの時の子だよな？」

「え、あの……」

「もう着替えたからこつち向いて平気だよ」

振り向いたその先には露出度の高い衣装を身に纏ったベリーダンサー風の女性が立っていた。その姿に見覚えのあったセイは声をあげた。

「アズイーザさん！」

「ええと、坊やの名前は……？」

「セイです」

セイが花人の都ハナンで出会ったダンサーの女性。その正体は世間を賑わす怪盗ジャックだった。それがアズイーザである。「坊やとこんなところで出会うなんてね。運がよかったわ」

「運がよかった？」

「そうさ、あたしの正体を知る者を生かしてはおけないからね」

不気味に笑うアズイーザを見たセイは脅えて後退りをした。

「僕を殺すってことですか？」

「冗談よ、冗談」

「よかった……」

「盗みはしても人殺しはしない。まあ、あんたが治安官に知らせて行ったらそんな時はそんな時で、さっさととんずらするだけさ」

「僕は治安官になんか知らせて行きません。怪盗ジャックは民衆の味方らしいですし、アズイーザさんはそんなに悪い人じゃないですから」

「そいつはどーも」

アズイーザはニツコリと笑った。

「ところで坊やはこんな辺境の地でなにしてるんだい？」

「気の向くままに旅をしてるんです」

「あたしも似たようなもんだね。怪盗家業は休業中で放浪の旅をしてるんだよ」

「そうなんですか」

セイの手は先程から首から提げたバッグの中を出たり入ったりしていた。セイはアズイーザに渡さなければならぬ物があつた。しかし、タイミングがなかなか掴めずに話を切り出せない。

「あんたさつきからなにやってるんだい、鞆に手を入れたり出したり？」

「あのこれ！」

セイは勢いよくバッグの中から二つの紅い宝石を取り出し、アズイーザの胸の前に差し出した。

「なんだいこれは？」

「弟さんの形見です」

「セシルの……」

「薔薇の宝玉」という魔導具だそうです」

静かに手を伸ばし 薔薇の宝玉 を受け取ったアズイーザは、瞳に涙を浮かべながらも決して流さず、口元を微かに綻ばせて笑った。

「やっぱり死んでたんだね。町の奴らは行方不明だとか噂してたけど、あたしにはわかってたよ」

「僕の目の前で亡くなりました。いいえ、僕が殺したんです……僕が……」

セイの瞳から涙が頬を伝って止め処なく零れ落ちていた。

セシルはセイの目の前で自分の瞳に嵌め込まれていた 薔薇の宝玉 を抉り取り、そのまま力尽きて地面に倒れ、町や人を元通りに戻した後に ドウローの禁書 とともにこの世から去った。しかし、セイは自分が使った魔法のせいでセシルが死んだのだと悔やんでいる。 自分は人を殺してしまったのだと。

泣き止まぬセイの身体をアズイーザはそつと抱きしめた。

「誰もあんたを責めたりしないから、泣くのはおよしよ」

アズイーザはそつとセイの頭を撫でた。そして、誰にも見られずに一粒の涙で砂漠の乾いた砂を濡らした。

そして、アズイーザはセイの身体をそつと離れた。

「あたしさ、実は怪盗やめてトレージャーハンターやろうと思ってるんだけど、坊やもあたしと一緒に大宝探し行かないかい？」

アズイーザの表情も口調も今さっきとはガラッと変わって明るいものになっていた。

「お宝ですか？」

「そう、お宝。あたしの仲間になるっていうなら、取って置きの情報教えてやるけど、どうだい？」

「別に分けまいとかはいらないんですけど、その宝の話には興味があります」

「じゃあ仲間になるってことだね？」

「え、まあ、はい」

アズイーザは自分の胸の間に隠していた一枚の地図を取り出した。

「これはこの辺りを記した地図さ。で、ここんところにある×印に昔都市があっただ」

「都市ですか？」

「黄金の都市 ってのがあつたらしいんだよ。今は砂の底に埋まっちゃまってみたいだけだね。アウロの庭の黄金塔に大魔導師が住んでたって聞いたことないかい？」

アウロの庭 という言葉にセイは聞き覚えがあつた。そして、はっとした顔をしたセイが声を荒げる。

「砂漠の魔女 と呼ばれていた大魔導師ファティマの住んでいた都市ですか!？」

「その都市だよ」

「絶対行きませ、絶対アズイーザさんについて行きます！」

「なんだい急に、さっきまでそんなに乗り気でもなかったのに

……？」

「僕はそこに行かなきゃいけないんです」

セイはバッグの中から焼け焦げた魔導書を取り出してアズイーザに見せた。

「その魔導書がどうかしたかい？」

「僕と一緒にいた猫人の少女を覚えてますか？」

「ああ、あの子はどうしたんだい？ まだ一緒に旅してるのかい？」

「あの子はこの魔導書に宿る精霊ファティマ。大魔導師ファティマの記した ファティマの書 に宿っていた精霊です」

魔法についても精通しているアズイーザはすぐに悟った。

「それだけ魔導書が焼け焦げたら、あの子はもういないんだね……」

「はい……」

セイは力なく頷いた。しかし、セイは希望が見えていた。

黄金の都市 に行けば、なにかが自分を待っているような気がしていた。

翌日、日がまだ昇りきっていないうちから、セイとアズイーザは 黄金の都市 を探すために旅立っていた。

広大な砂漠はどこまでも同じような景色が広がり、目印などは見当たらない。本来は空に星がある涼しいうちに星を見ながら進路を取り、昼間の暑いうちに休むのがよいとされている。だが、セイとアズイーザは昼間のうちに、時刻と太陽の位置を

確認しながら進路を取っていた。実はこの砂漠、夜になると怪物たちが跋扈し、厄介なことに磁場のせいも方位磁石も仕様でないのだ。

アズイーザは地図を片手に辺りを見回した。

「たぶんここらにあると思うんだけど、どこにあるのかなえ？」

「都市の大きさはそれなりにあると思うので、だいたいの場所がわかれば、その下にあるんじゃないですか？」

「じゃあ、ここらにあるのかねえ？」

黄砂に吹かれながらアズイーザは足元を見た。きめ細やかな砂に足が少し埋もれている。この下に 黄金の都市 があるかもしれない。しかし、アズイーザはどうやって地中にある都市に入るつもりなのか？

「アズイーザさん、どうやって砂に埋もれた都市に入るつもりなんですか？ 都市ごと掘り起こさないと無理ですよね？」

「伝説によるとだねえ、都市はドーム上の見えない壁に包まれていて、意図的に地中に潜ったって云われてるんだよ」

「意図的に？」

「そう、意図的に。大魔導師ファティマがそれを命じて、都市に住む人々は都市を捨ててバラバラに世界各地に旅立ったらしいって話だけだ」

「目的は？」

「さあねえ、一説にはここらの気温が上昇して劣悪な環境になったからとか」

「えっと、それで、どうやって都市に入るんですか？」

アズイーザは額の汗を軽く拭いた後、背中に背負っていた皮袋から一冊の本を取り出した。

「これは 名も無き魔導書 って云ってね、作者不明の魔導書なんだけど、この魔導書がすごいなのって、ちょっと見てな」

開かれた魔導書のページにはとても精密に描かれた指輪の絵があった。そのページにアズイーザはなんと手を突っ込んだのだ。そして、驚くべきことに、引き抜かれた手の指には指輪が挟まれていた。

「どうだい、すごいだろ？」

「本の中から取り出したんですか!？」

指輪は魔導書の中から取り出された。指輪が描かれていたページは白紙になっている。つまり、魔導書の中に指輪が保存してあったのだ。

ビツクリした顔をするセイを見てアズイーザは自慢げに微笑んだ。

「この魔導書は物体を二次元空間に封じることができなんだよ。入れられる数は一ページにつき一つで、全部でだいたい五〇〇くらいは入るのかねえ。水なんかだと、一定の量までしか入れられないみたいで、入れられるものの大きさも制限があるみたいだね」

「すごく便利ですね。それでその指輪は？」

指に嵌められた指輪は太陽の光を浴びて煌びやかに輝いた。

「アウロの指輪 さ。四界王のひとり、火を司^{つかさど}るアウロの力が込められている指輪だって云われてるけど、信憑性は薄いかね。この指輪を 黄金都市 の真上で天に掲げると門が現れるって云うんだけど……？」

アズイーザが指輪を天に向けると、指輪についていた宝石が太陽のように燦然と輝きだした。眩い光で辺りは真っ白になり、アズイーザとセイは目を瞑^{つぶ}って腕で顔を覆い隠した。しかし、それでも光が目飛び込んでくる。

しばらくして光は治まった。けれど、二人は目がチカチカして、辺りを見回しても真っ白にしか見えない。

地面が揺れた。そして、砂が大きく盛り上がり波を造り上げた。しかし、二人の目は治っておらず、視界には白い世界が広がっている。

轟々と風を鳴らすような音とともに黄砂が雲のように舞い上がり、地中から巨大なミミズに似た生物 ワームが現れた。その身体の大部分は砂に埋もれてよくわからないが、盛り上がった砂の山が崩れずに遙か遠くまで続いているところを見ると、その全長は約一〇〇メートル。普通のワームは五〇メートル程と言われているので、今ここに現れたワームの巨大さがわかるだろう。

「なんだい、なにがいるんだい!？」

アズイーザは声をあげたが、そこになにがいるのかわからない。だが、本能は危険性を感知している。

「僕が思うに巨大な何かがいると思うんですけど？」

「砂漠で巨大な生物って言ったらワームかい。逃げるよ、全速力で走るんだよ！」

「目が見えないのにな？」

「つべこべ言わずに走れ！」

二人は別々の方向に全速力で走った。しかし、砂漠の砂は細かく足が取られやすく、なかなか思うように走れない。それに相手の全長は一〇〇以上もある。そんな巨大生物から走って逃げるなど不可能だった。

ワームが捕食を開始する。ワームの捕食は単純で、辺りにあるもの全てを強力な吸引力で吸い込む。砂も空気も全部吸い込んで、あとで排出するのだ。

轟々と風が鳴り叫び、セイの足が宙に浮く。

「助けて！」

とセイが叫んでも、誰も助けしてくれる者はいない。それどころか、近くでアズイーザの声が、風の音に紛れて千切れ千切れに聞こえる。

セイもアズイーザも砂まみれになってワームの中に吸い込まれていく。息がうまくできなくて苦しい。砂に揉みくちやにされてどうにもならない。

そして、砂のベッドの上にセイとアズイーザは落下した。しかし、まだ目を開けても視界がぼやけている。

「アズイーザさん無事ですか？」

「ああ、なんとかね。でも、あたしら本当にワームの腹ん中に収まっちゃったのかい？」

「僕まだ視界がぼやけてて」

「あたしもだよ」

次第に二人の視力は回復し、辺りを見回したセイとアズイーザは息を呑んだ。

「ここどこだい？」

アズイーザは目を丸くして、ちよつと離れたところにいたセイも驚いた顔をした。

「どこでしょう……遺跡みたいですけど？」

「まさか、ここが黄金の都市 かい？」

「そうかもしれませんが」

眼前に広がる都市の風景。建物は黄色がかった石で造られていて、黄金でできているというわけではなかったが、ここはまさしく捜し求めていた黄金の都市 だった。なぜならば、上を見上げると見えないドーム状の壁に覆いかぶさっていた。ここは砂漠の下なのだ。

ここは砂漠の下のはずなのだが、陽光の下と間違えるほど明るかった。その輝きのもとには辺りにある建物や石を敷かれた地面だった。この都市全体が淡くが輝いている。

しばらく辺りを見回していたアズイーザが少し残念そうな顔をした。

「黄金の都市 っていうもんだから、建物が黄金でできてるんじゃないかと、少し期待してたんだけどねえ。建物そのものは輝いてるけど、ちよつと違うみたいだねえ。まあ、財宝や魔導具は多くの残ってることを期待しようかね」

「財宝や魔導具なんて残ってるんですか？　だって、普通は大
事な物を持って行きますよね」

「男のクセにロマンのないこと言うんだねえ、あんたは。古の
都なんだから、なんかあるに決まってるじゃないか」

「そういうもんなんですかねえ」

財宝目当てに来たわけではないセイには、財宝があるうがな
かるうがどうでもよかった。目的はフアティマに関すること探
し調べることにした。そのためだけにセイはアズイーザについて来た
のだ。

二人は身体に塗れた砂をバサバサと叩き落として、なんと
く辺りを歩きはじめた。

民家らしき石造りの四角い家に入った二人は、その中である
ことに気が付き、疑問を覚えた。

テーブルの上には食べかけの食事が置いてあり、台所に向か
ったアズイーザはそこで奇妙の物を見た。火にかけられた鍋が
あったのだ。その鍋の中はスープで満たされていた。

台所にやって来たセイがアズイーザに声をかけた。

「誰か住んでるんですかね？」

「さあねえ、でも、不思議なことあるんだよ」

「不思議なこと？」

「そうさ、この火をよく見てごらん」

そう言われてセイは鍋の下に木がくべられ燃えている火をよ
く見た。その火は燃えていなかった。火が揺らめいていないの
だ。

驚いた顔をしたセイは火の近くに手をかざしてみた。熱くない。そこで思い切って火に触れて見た。すると全く熱くなく、火はカチカチに固まっていた。

「そんなまさか、火が固まるなんて聞いたことない」

「そのまさかだろうさ。その中のスープも触ってみな、カチカチだから」

セイは言われるままに鍋の中のスープに触った。アズイーザの言うとおりカチカチに固まっていた。見た目はどう見ても液体なのにだ。

「どういうことですか？」

「あたしの考えが正しければだけど、時間が止まってるんだらうね。この部屋にある物は全部時間が止まっちまって、動かすことができない。そんなところじゃないかい」

「もしかして都市全体でしょうか？」

「あり得るねえ。じゃあ、他の場所も調べて見るかい？」

「そうしましょう」

この後、セイとアズイーザは都市中を調べて回った。そして、結果は同じだった。物が全く動いていないし、動かせない。しかも、部屋の中はどこもついさっきまで人々が生活していたような感じが見受けられた。

そう、ここは都市中の人々が神隠しに遭い、都市の時間が止まってしまったような場所だった。

街の路地を歩きながらセイは横にいるアズイーザに顔を向けた。

「なんだかすごいとこに来ちゃいましたね」

「きつとこの都市にはすごい秘密と一緒に、想像も及ばないようなお宝があるに違いないねえ」

「宝があるかは別として、人々が都市から消えた理由にはなにか大きな秘密がありそうですね」

歩く二人の視線は斜め上に向けられていた。二人が考えていることは同じだった。

前方には天井いっぱいまで伸びる塔が聳え立っていた。そこになにかが必ずある。二人は確信して、示し合わせることもなく、二人の足はその塔へ運ばれていた。

塔の中に入った二人は多角形の石を敷き詰めた床を歩きながら辺りを見回した。塔の中は広く、時間を刻まぬ炎が辺りを照らしている。少し薄暗く、怪物や亡霊が出そうな雰囲気だった。「じゃ、坊やは適当にあつちを探して、あたしは向こうにお宝がないか探すから」

こうアズイーザに言われたセイは少し嫌な顔をした。

「別行動ですか？」

「こんな広い塔なんだから二手に分かれた方がいいに決まっているじゃないさ」

「わかりました。じゃあ、僕はあっち行きます」

ため息をつきながらセイはアズイーザと分かれた。

セイが選んだ道には外に出ることのできる出入り口があり、その出入り口を通って外に出ると、そこには塔の外壁に沿って

造られた階段があった。階段の途中には中に入る出入り口があったが、セイはとりあえず塔の一番上まで登ってみることにした。

ふと、セイは扉から下を覗くと、都市がすでに随分と下の方に見える。だいたい七階建てのビルほどの高さかもしれない。

階段は緩やかに上って行くために、その距離は長く、ようやく終わりが見えてきた。

最上階らしいその入り口には先程まではなかった扉があった。今までは各フロアを出入り口は吹き抜けとなっていたのだ。

扉の前に立ってセイは力いっぱい扉を押してみた、しかし開かない。扉を引いてみた、しかし開かなかった。

「鍵が必要なのかも」

セイが困った顔をしていると、首から提げていたバッグの中から強い波動のようなものを感じた。慌ててバッグの中を開けると、そこには淡く輝く魔導書が入っていた。 ファティ

マの書だ。

魔導書を取り出したセイは、その魔導書を扉の前に翳^{かざ}してみた。すると、扉が軋^{きし}みながら自動的に開いたではないか!?

戸惑いもなくセイはすぐさまこのフロアに足を踏み入れた。

このフロアの構造は幾つもの小部屋で仕切られているらしく、廊下が走り、その途中に幾つもの扉があった。しかし、セイは周りの部屋に目もくれず、突き当たりにある部屋を目指した。そこから何かを感じる。そして、魔導書の輝きも増していた。

廊下の突き当たりにあるドアはセイが触れる前にその口を開

き、セイを中へと導いた。扉の先にはまた廊下があり、その先に扉があり、セイはその扉の前にいる少女を発見した。

「……人がいる!？」

驚いたセイはすぐさま少女に駆け寄った。

猫耳を生やした金髪のメイド風の服を着た少女。彼女は目を瞑り、扉の前にじっと立っていた。

「あの、君は？」

セイが尋ねると少女はその瞳はゆっくりと開き、透き通る蒼い瞳でセイを見つめて静かに微笑んだ。

「お待ちしておりました、新たなご主人様」

「僕がご主人様!？」

驚くセイに猫人の少女は静かに微笑んだ。

「そうでございます。貴方様はわたくしの二人目のご主人様です」

「意味がよくわからないんだけど？」

「わたくしの以前の主人は大魔導師ファティマ様でした。そして、ファティマの書 を持ち、ここに現れる者に仕えるように仰せつかっておりました」

「じゃあ、君は大魔導師ファティマの知り合いだったてこと？」

大魔導師ファティマが生きていたのは一〇〇〇年以上も昔だったとセイは聞いていた。それなのに目の前にいる少女は“少女”なのだ。

「わたくしはファティマ様の知り合いではなく、従者でございます

ます。わたくしはファティマ様に生を与えられ造られた自動人形でございます」

「人形なの君？」

だから歳を取っていないのだ。それに言われてみれば肌は陶器のように白く透き通っていて、顔立ちも整いすぎて人とは思えぬ美しさを誇っていた。

「わたくしはファティマ様に生を与えられ造られた自動人形でございます。では、ご主人様、扉の奥へご案内いたします」

扉を開けようとする機械仕掛けの少女にセイは声をかけた。

「ちよつと待つて、まだ名前聞いてないんだけど？」

「ファティマ様にはアリスと呼ばれておりましたが、新しい呼び名はご主人様がお考えください。それがわたくしの名になります」

「あ、じゃあ、アリスで」

「素敵なお名前、ありがとうございます」

ニツコリと微笑んだアリスは扉を開けて、中にセイを招き入れた。

部屋の中は煌びやかに輝くシャンデリアに照らされ、華麗な彫刻の施された椅子や机や置物が配置されおり、壁一面に置いてある本棚には本が隙間なく入れられていた。

「ここはファティマ様のお部屋でした。そして、今からはご主人様のお部屋です」

「あ、あゝ、あのさ、僕が君の主人になったことは理解したんだけど、僕は具体的に何をすればいいの？」

「ご主人様はこの都を治める新たな長おさまとなるのです」

「長つてこの都で一番偉い人つてこと」

「そうでございます」

「はあ」

なんだか自分の考えが及ばないところで話が進んで知るよう
にセイには思えた。

セイとファティマが出逢った時のそうだった。突然見知らぬ
世界に連れて来られ、ご主人様と呼ばれた。

アリスはセイに椅子に着くように進めると、鉢植えに挿して
あった花を一本引き抜き、その花からティーカップに飲み物を
注いだ。

「ご主人様、どうぞお飲みください」

「あ、どうもありがとう」

飲み物を口に運んだセイはふと思った。 動いている。

「あのさ、この都市にあつた物は全部動かなかったんだけど、
今その花から飲み物を注いだし、このカップも動いてるよね。
そう、それに君の動いてる」

「この都市で時が止まらずにいるのは、この部屋とわたくしだ
けです」

セイがアリスに質問を投げかけようと口を開きかけた時、扉
を開けてアズイーザが飛び込んで来た。

「ここにいたのかい、探しちゃったよ」

アズイーザを確認したアリスの目つきが鋭くなった。

「ここはご主人様のお部屋です。早々にお帰りくださいませ」

「僕の知り合いだから、大丈夫、悪い人とかじゃないから」

セイがアリスにそう言うと、アリスはアズイーザに深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。ご主人様のお知り合いとは知らず、無礼を働いたことをお許しください」

「あたしは別に構わないよ。それよりもこの子なんだい？」

『なんだい？』と顔を向けられたセイは首を横に振った。セイにもまだよく理解しきれていないのだ。

「僕のことを新しいご主人様って呼ぶんだけど、前は大魔導師ファティマに仕えていたんだって。あと、名前はアリスで機械人形なんだ」

機械人形アリスを一瞥いちべつしたアズイーザはふふ〜んと鼻で笑った。

「一家に一台欲しいねえ。それでご主人様ってどういうことだい？」

また顔を向けられたセイはまた困った顔をした。

「だから、僕に顔を向けられても困ります。僕もこれから詳しく質問しようとしてたとこなんですから。あのそれでアリスさん、なんでこの部屋だけ時間が動いていたり、都市中の人々がいないんですか？」

「わたくしに“さん”付けする必要はありません。この部屋だけが時を刻み、都市中の人々や動物たちが姿を消したのは、全てファティマ様の仕業でございます」

「あ、あのアリス、大魔導師ファティマが……？」

余計にセイの中で謎は深まってしまった。

大魔導師ファティマの目的は？

アリスはアズイーザにお茶を差し出すと、静かに目を瞑って語りはじめた。

「ファティマ様は生涯をかけて一冊の魔導書を書き綴り続けました。その書の内容は世界の全てを記すこと。ファティマ様は二千年以上もの永い時を生き、世界中を旅し、多くを書き綴りました。それでも全てを記すことはできませんでした。そして、ファティマ様はある日突然この地に戻り、人々を 大きな神 から守るために封じ込めたのです」

セイもアズイーザも頭の上にはなマークが飛んでしまった。口を開いて説明を続けるようすのないアリスにアズイーザが質問をした。

「それでおしまいかい？ 説明がだいぶ省かれてたように思っただけ。なんでファティマは世界全部を書き綴ろうとして、なんで人々を封じ込める必要があつたんだい？」

「わたくしが知っているのは今説明したものだけです。ファティマ様は多くを語りませんでした。ただ、わたくしとこの部屋の間だけを止めず、新たな主人を待つようにとだけ仰られませんでした」

つまり、アリスに説明を求めてもよい答えは返って来ないということだ。だが、次の一言が状況を発展させる。

「そして、ファティマ様は必要最低限のことは ファティマの書 に記したと仰っております。つまり、そこにご主人様の

求める答えが書かれているのです」

だが、ファティマの書は半分が焼け焦げ、とても読める状態ではなかった。

セイの落胆は大きい。

「魔導書は見てのとおり、破損してもう読むことはできなんです」

謎を解く鍵であった魔導書は使い物にならない。しかし、アリスはニツコリと微笑んだ。

「ご主人様、心配なさらずに肩お上げください。その魔導書からは魔導が感じられます。そう、その魔導書はまだ生きております」

確かに魔導書はまだ微かだが力を持ち、翻訳機としての力も健在だった。しかし、ページを読むことができないのは確かで、それがどうにかなるともいいうのだろうか？

「この魔導書が生きてる？」

セイが不思議な顔をして尋ねると、アリスはコクリと小さく頷いた。

「文字として失われても、知識が死んだわけではございません。魔導書に宿る精霊が魔導書の知識を共有しているのは、文字で表されているからではございません。魔導書そのものが知識を記憶しているからです。しかし、今その魔導書は力を失いつつあります」

「どうすればいいんですか？」

「ご主人様の中に宿らせればよいのです。これはご主人様の知

識が増えるという意味ではなく、ご主人様の中に別の 存在
が住まうスペースをつくるということですよ」

「意味がわからないんですけど？」

「なさればわかります。では」

アリスは ファティマの書 とセイの身体に触れると、静か
に何かを呟いた。すると、セイの身体が輝きだしたではないか
!?

そして、 ファティマの書 は煌く粉になってセイの口に流
れ込んで行ったのだった。

そして、煌く粒子は形作った。

「ファティマ！」

セイが声をあげた。その目の前にいたのは紛れもなくファテ
イマだった。

「期待を裏切るようで悪いが、私はもうひとりの方のファティ
マだ。彼女は今眠っている。君が逢いたかったのは精霊である
ファティマだろ？」

セイの目の前で復活したのは大魔導師ファティマの思念であ
った。しかし、セイは安堵した。あっちのファティマにまた逢
える。

顔を綻ばせるセイが見つめる中、ファティマは椅子に腰掛け
た。

「私が先に現れたのは他でもない、君たちが知りたがっている
ことを語るためだ」

そう言ってファティマはアリスが差し出した飲み物を飲みながら、遠い過去の話を物語を語りはじめた。

「私はある時、不老不死の力を得た。不老不死になったことによつて多くの研究をしたが、それでも時間を持て余すようになった時、私は世界の全てを書き記してみようと思ひ立ったのだ。

私は千年以上もの長い年月をかけて魔導書を書いていた。だが、この作業は永遠に続く。過去の情報は膨大にあり、次の瞬間には未来が訪れ新たな情報が生まれる。

そして、世界を綴っているうちに私はある事実に気が付いてしまったのだよ。それは実に興味深い事実だった。そう、世界はなんども創りかえられていると気が付いた。噛み合わない歴史、在り得ない遺物、大きな神 と呼ばれる存在は自分の納得する世界ができるまで、何度でも世界を創り直す。

大きな神 に目を付けられてしまった私は滅ぼされそうになり、大きな神 はこの都市まで滅ぼそうとした。だから、私は都市の人々を守るためにその精神と身体のある場所に封じ込め、私に万が一のことが起きた時のために、私は私の記憶を魔導書に書き綴った。そして、大きな神 との戦いに備える準備をした。だが、その準備が途中のまま、私は暗殺されてしまったのだ。

死に間に私は魔導書を時空の彼方に飛ばした。そして、長い年月を経て、君のもとに渡ったわけだ」

語り終えたファティマは息をつき、アズイーザは難しい顔をし、セイは一生懸命今の話を理解しようと務めた。

少しの間、思い思いの沈黙があり、セイがはじめに口を開いた。

「僕はファティマさんになにを託されたのでしょうか？」

「私は君にこの世界を託したのだよ。この世界には多くのものが存在している。それを 大きな神 に壊されるなど、私は納得いかない。だから、君には 大きな神 を止めて欲しいのだ」

世界を託された。

セイは自分にはどうにもできない問題を抱えてしまったような気がした。

偶然に魔導書を手に入れただけなのに……。

決断ができない。セイは自分に任せて欲しいとも、無理だとも言えなかった。どちらを言うにしても、その言葉には計り知れない重さが込められていた。

「僕には引き受けることも引き受けないこともできません。そんな大きなこと僕には引き受けれないって気持ちもあるし、そんな大きなことに僕が必要とされているなら、僕は引き受けなきゃいけないと思うんです」

ファティマは小さく笑った。

「君の意思が一番尊重される。君はこの世界の人間ではないのだから、無理強いはできない。今すぐ世界が壊されるわけなさそうだから、君に断られても別の方法を考えるよ」

しばらくこの場は沈黙に包まれた。そして、セイが静かに口を開いた。

「僕でいいなら協力します。僕にできることを頑張ってみます」

自分にできる範囲のことをする。それがセイの答えだった。

「ありがとう、セイ。では、私は眠りに就くとしよう。そうそう、四界王と陰陽神を訪ねるといい……」

ファティマはゆっくりと目を閉じ、そして勢いよく開けた。

「ご主人様！ おお、無事だったんだね、よかったあ」

眠りから醒めたファティマは行き成りセイに抱きついた。ファティマの記憶は暴走したセイを止めようとしたところで止まっていた。

今まで固い顔をしていたセイの顔が綻んだ。

「よかった、また逢えた……」

ふと、セイが顔を横に向けるとアズイーザも微笑んでいた。

「似合いの二人だねえ」

「僕たちはそんなじゃないですよ！」

こんなセリフもファティマと一緒にいる時はよく言った。そう、「ファティマ」は戻ってきたのだ。そして、これから新たな旅がはじまる。

セイが魔導師ファティマの言葉を思い出す。

「そうだ、四界王と陰陽神に会わなきゃいけないんだけど、陰陽神ってなに？」

ここぞとばかりファティマが胸を張る。

「説明しよう。陰陽神とは四界王よりも高位な神であり、光と闇を司る神である。そんなもって補足をする、光神ヒリカ、

闇神イーマ、火界王アウロ、風界王ゼーク、土界王ディティア、水界王イズムって感じ」

セイは風界王ゼークと会ったことがある。そして、火界王アウロの名前は聞いたことがある。そう、この都市がある場所はアウロの庭 と呼ばれる砂漠地帯だった。

「あ、そのさ、ここって アウロの庭 って言われてるよね。近くにアウロさんがいるってことかな。だったら、アウロさんにもまず会いに行こうと思うんだけど」

「よし、なんだかよくわかんないけど、アウロに会いに行こう！」

セイの言葉を受けてファティマは出かける気満々になり、セイも椅子から立ち上がったが、アズイーザは立ち上がるようすを見せなかった。

「あたしはここでゆっくりしようかね。食事くらいあるんだろう？」

アズイーザに顔を向けられたアリスは軽く頷いた。

「ございます。この部屋には生活に必要な物が取り揃っております」

「じゃ、あたしはここで厄介になろうかね」

もともとアズイーザはこの都市の宝を求めてやって来た。セイとともにこちらからも旅をする義理はなかった。

アズイーザは自分の持っていた 名も無き魔導書 をセイに手渡した。

「これ持ってたきな」

「僕に、いいんですか？」

「この中には今まであたしが集めた魔導具が入ってる。きつと坊やの役に立つからさ」

「でもどうして僕に？　なんでアズイーザさんは魔導具を集めてたんですか？」

「あたしはね、魔導具とか魔法なんて物騒なもんはこの世になきゃいいと思ってる。だから、世界中の魔導具をあたしの手元に集めていつか処分してやろうと思っただけさ」

アズイーザ　過去の名をアリア。彼女はある魔導書によって悲劇に見舞われたことがあった。それが理由。

セイはアズイーザから　名も無き魔導書　を受け取ると、頭を下げて部屋を出て行くとした。その時に後ろを振り返り、二人に別れを言った。

「アリス、アズイーザさんの面倒は君に任せるから。じゃあ、また会いましょう」

「坊やも達者だね」

「ご主人様のお帰りをお待ちしております」

アズイーザとアリスに見送られ、セイはファティマとともに部屋を出た。

塔の階段を下りるセイの足取りは少し重たかった。

「ご主人様どうしたの？　ちよつと疲れてる？」

「ううん、別にそうじゃないんだ。この世界に来ているんなことがあったなって思っただけ」

「楽しいこといっぱいあったよね。ボクはご主人様と旅できて

ホントに楽しいよ」

「うん、でも悲しいことも辛いこともあった。また、会いたい人もたくさんいるな。旅がひと段落したら、今度は旅先で会った人にもう一度会う旅がしたいな」

「ボクも一緒にね！」

「そう、ファティマと一緒にね」

街道を進み、セイはあることに気づいて足を止めた。

「あ、そうだ」

「どうしたの？」

「どうやってここから出るか聞いてなかった。地上にどうやって出たらいいんだろ？」

「ボクが知ってるよ。だって、ここはボクの故郷だもん」

「もしかして、いろんなこと思い出したの？」

「うん。魔導書の中から出れなかった時に 砂漠の魔女 と一緒に話したんだ」

精霊であるファティマは自分のことに関して多くの記憶が抜け落ちていた。それが、いつに補われたということだ。

ファティマの案内でセイは長い梯子はしこを登り、都市の天井に開いた穴に入り、ゴツゴツした洞窟のような場所を進んだ。そこで、セイはあることに気が付いた。

「ここってもしかしてワームの体内？」

「そうだよ。巨大なワームが洞窟になってるんだよ」

都市と地上を繋ぐ道 それはワームの体内だった。ワームの口が砂漠からの入り口となり、尻尾が都市の天井と繋がって

いたのだ。このワームは普段は砂の中に潜り、都市への入り口を隠して守っていたのだ。そして、ワームの尻尾が埋まっている場所から、半径一〇〇メートルほどの範囲で、アウロの指輪を使うことによつて入り口であるワームの口が現れる仕組みだったのだ。

ワームの口からセイとファティマが出ると、ワームは砂の中に砂煙と大きな音を立てながら帰って行った。

ここは砂漠のど真ん中だった。

そして、その照り輝く陽のもとで黄砂が舞い上がり、その奥で銀髪の少女が槍を持って佇んでいた。

「地下に隠れて居ったか……」

砂漠の陽のもとで、少女は冷たい月のように微笑んだ。

黄砂を浴びて、髪を振り乱し、エムは槍で風を斬った。

「ファティマよ、覚醒したのであるう。槍を取れ、妾と一戦交えるのだ」

静かに微笑むエムに対してファティマは身構えた。しかし、それは戦いの構えを取ったわけではない。逃げる準備だ。

「ご主人様逃げるよ！」

ファティマの背中から金色の翼が生え、ふわりと羽根が宙に舞う。

なにが起ころうとしているかわからないまま、セイはファティマに背中から腰に手を回された。

「え、なに？」

「空飛ぶ」

羽を激しく華麗に広げたファティマはセイを抱きかかえたまま空に舞い上がった。

「逃がさぬぞ！」

空に逃げたファティマたちを追撃するべく、エムが砂煙を立てながら空に舞い上がった。その背中には白銀の羽が生えていた。

空を飛びながらファティマは後ろを振り返った。

「うわっ!? 追ってきてるよ」

ロンギヌスの槍を構えたエムは、彼女自身が槍のようになって空を高速で飛んでいた。このままでは追いつかれてしまいそうだ。

セイを抱きかかえて飛んでいるファティマはすでに体力の限界といった感じで、空を飛ぶ高度がどんどん下がって行っている。

「ご主人様……重い、限界、落ちる」

「落ちないでよ！」

力尽きたファティマはセイを手放した後、自分の砂の上へと落下した。

砂煙が舞い、セイが空を見上げると、逆光を浴びたエムが槍を地面に突き刺す格好で落下して来るではないか!?

だが、エムは急にセイたちに背中を向けて天に身体を向けた。「邪魔立てする気か！」

声を上げたエムの身体を十二分に包み込む炎が天から降り注

いできた。その遙か向こうでは、燃えるように朱い服を着た男が翼を大きく広げて飛んでいた。

向かい来る業火を討つべく、エムが炎に向かって手を翳す。

「水よ喰れ呑み込め！」

エムの手から水が渦巻く蛇と化して業火に挑む。しかし、その水にはいつも勢いが無い。

炎を放った男は大そうな笑いを浮かべた。

「我が領地で水を使うなど愚かな！」

業火は一瞬にして水を蒸発させ、エムの身体をも呑み込んだ。炎に包まれたエムは火車になりながら地面に落下してしまっただ。しかし、これで終わりではない。エムはゆっくりと立ち上がりると白銀の翼を激しく広げ、炎を全て消し去ってしまったのだ。

「確かに妾は不覚を取った」

炎を振り払ったエムであったが、その身体は液体状に溶け出していた。身体を構成していたエーテル体がヒト型を保てなくなったのだ。

天から舞い降りてきた男は砂煙を豪快に上げながら地面に降り立った。

「止めを刺してくれるわ！」

新たな炎を出そうとする男の目の前でエムは微笑んだ。

「二人と相手をするほど力は残っておらぬ。ここはいったん引くことにしよう。さらばだ、アウロ　そしてファティマよ」
エムの身体は砂漠の幻影のように消えた。

消えるエムを鼻で笑ったアウロはその後、地面に座り込んでいたセイとファティマのもとに歩み寄ってきた。

「貴女がファティマか、そしてそちらがセイだな。二人のことはゼークに聞いた」

「もしかして、あなたがアウロさんですか？」

セイが尋ねるとアウロは大きく頷いた。

「俺がアウロだ。エムの気配がしたんで来たんだ」

「あの、僕、大魔導師ファティマにアウロさんや他の四界王と陰陽神に会って言われたんです」

「俺に会えか……ついに全面戦争の時が来たってわけだな。それよりも、その娘を助けなくていいのか？」

「はい？」

アウロの視線の先を追って行って、セイはそこであるものを目撃した。頭から砂に首を突っ込んで、足をバタバタさせながらスカートが捲れ上がってしまっている人物。

「……主……様……す……て！」

砂の中でもがいているのは紛れもなくファティマだった。地面に墜落してそのままなのだ。

セイは慌ててファティマの足首を掴んで、力いっぱい引っっこ抜いた。

「ご主人様あゝ」

ファティマの顔はパン粉をまぶしたみたいに砂だらけになっていた。それをセイが手で丁寧に落とすと、横にいたアウロが呆れたような顔をしていた。

「これが 砂漠の魔女 の魔導書の精霊か。なんでこんな間抜けそうな奴が生まれてしまったんだか、考え深いものがあるな」

「ボク間抜けなんかじゃないもん。これでも強いんだからね」とファティマは空を何度もパンチして見せるが、あまり強そうには見えなかった。

好戦体制のファティマを無視してアウロは首に提げていた角笛を吹いた。すると、東の空から二頭の空翔ける馬が、炎の車輪を持つ馬車を引いて飛んで来た。

空飛ぶ馬車が自分の前に来ると、アウロは御者台に乗って後ろの荷台を指差した。

「乗れ、これから運がいいことに四界王の集会がある。内容も大きな神 との戦いについてだ」

セイとファティマが馬車に乗り込むと、空翔ける馬は甲高く鳴いて空に舞い上がった。

アウロの庭 がどんどん小さくなっていく。あちらに見えるのはセイが昨晚世話になった村だ。その村もやがて見えなくなり、空翔ける馬は信じられない速さで先を急いだ。

やがて見えて来る天空城。この空に浮く城こそが、風界王ゼークの城だ。

翼竜たちが城の周りを飛び交い警備する中、セイたちを乗せた馬車は城の屋上に停車した。

馬車から降りたセイは無言のまま、前を歩くアウロについていく。そして、連れてこられた会議場にはすでに三人の人物が

席に着いていた。おそらく、四界王の残りの三人だろう。

一人目の透き通る感じがする少女は風界王ゼーク。これはセイも知っている。

二人目は銀と青を基調にしたドレスにスレンダーなボディを包む翼有の美女。その顔は蒼白く、どこか冷たい感じのする女性だった。この人が水界王イズムだとセイはなんとなく思った。

三人目は太い胸板と腕、見るからに強そうな岩のような男だった。この男にも翼はちゃんと生えている。この人が土界王デイトリアだとセイは確信した。

セイの顔を確認したゼークが気さくに手を振ってくる。

「お久あゝっ！」

それとは正反対にイズムは横目で少しセイとファティマを確認しただけだった。そして、巨漢のデイトリアは椅子から立ち上がり、のしのとセイたちの前に仁王立ちした。

「君がセイで、君が精霊ファティマだな。我輩の名前はデイトリアだ、よろしく頼む！」

セイは差し出されたデイトリアの大きな手と握手した。ちょっと力が強くて痛い。

握手を終えたセイが手を振って痛みを和らげていると、横でファティマもぎゅつとされていた。

「イタタタタ……痛いよデイトリアのばかり！」

「おお、すまないすまない。力の加減が難しくくてな」

丁寧に頭を下げるデイトリアと顔を膨らませて仁王立ちする

ファティマの構図。神に暴言を吐いて、頭を下げさせるファティマもファティマだが、巨漢が頭を下げているのもすごい。礼儀正しい神なのか、身体はデカイが気は小さいかのどちらだろうか。

ディティアと握手を終えた二人は、そのままディティアに進められるままに会議の席に着いた。

この場にいる六人が全員席に着いたところで、ゼークが会話を切り出した。

「じゃ、アウロくとセイとファティマが来たことだし会議はじめよつか。うんじゃ、今回の議長をやるアタシの進行で会議はじめちゃいまゝす」

会議の場所は四界神と陰陽神の六人の城で行い、会場となった城の主が会議の議長もやることになっていた。

ゼークが話しはじめてすぐ、イズムが無表情のままボソリと呟いた。

「ゼークが議長で会議がまとまるはずないわ」

これから本題を話しはじめようとしていたゼークの耳がピクリと動いた。

「イズムちゃんなんか言ったあ？」

「いいえ、言っていないわ」

小さな声でそう言ったイズムは、ゼークと話している時も相手と視線を合わさず、斜め下の机の一点を見つめていた。

セイの横ではファティマが自分の腕で腕枕をして机に突っ伏してすでに寝ている。もう一方のセイの横では、アウロが机に

足を投げ出して鼻歌を口ずさんでいる。真剣にゼークの言葉に耳を傾けているのは堅物のディティアだけだった。

「ゼーク、早く話の本題を話してくれたまえ」

ディティアに促されてゼークはヤル気なさそうに話しはじめた。

「えーとお、魔導砲の整備は完了って報告が入ってて、あとは会議に来てないヒリカちゃんとイーマ様待ちなのよねえ。あの二人が 大きな神 の居場所さえ特定してくれば、ドーンと一発かましてやるんだケド」

大あくびをしたアウロが突然席を立った。

「それじゃあ、俺はヒリカとイーマの報告が入るまでベッド借りて寝てるぞ。おやすみ」

背中を向けながら手を振るアウロは本当に会議室を出て行ってしまった。

次に静かにイズムが席を立った。

「厭あきたわ。わたしもヒリカとイーマから連絡が来るまで休んでくる」

足音も立てずにイズムは会議室を後にした。

そして、ディティアはこう言う。

「さっ、ゼーク会議を続けてくれ」

真面目なディティアに見つめられたゼークは、オーバーリアクションでおでこをべちんと叩いた。そして、そのままうずくまって頭を抱える。

「サイテー！」

ディティアは無言のままゼークを見つめ、彼女が話すのを待っている。しかし、ゼークはうずくまったままで立とうとしない。

どこからかいびき声が聞こえてきた。ファティマだ、ファティマ爆睡していた。

もう、とても会議が続けられるような状況ではなかった。

ため息をついたセイは心の底から『こんな人たちが神様なんだ』としみじみ思った。

立ち上がった風界王ゼークが叫んだ。

「会議なんてやってられないわよ、ば〜か、ば〜か、ば〜か！」

こうして会議は一時中断となった。

土界王ディティアは腕組みをして岩のように目を瞑っている。ファティマはまだいびきをかきながら寝ている。横にいるセイは大きくため息を漏らした。

「ゼークさん、会議っていつもこんなんですか？」

「ええ、いつもいつももの一〇〇乗くらい、いつものことよ！」

「そうなんですか……」

いつもこんな会議じゃ大変だなとセイは思った。

ちよつと不機嫌そうな顔をするゼークの顔をチラッと見たセ

イは、顔の向きを変えてディティアに話しかけた。

「あの、ディティアさん」

岩が割れたようにディティアが目を開けた。

「なんだね？」

「僕はわからないことばかりなので、質問したいことがいっぱいあるんですけど？」

「言ってみたまえ」

「魔導砲ってゼークさんが言っていましたけど、それってなんですか？」

「大きな神 を倒すために我輩たちが開発した兵器だ。この世界にあるありとあらゆる魔法のエネルギーを魔導砲に注ぎ込み、圧縮して一気に撃ち放つ。まだ一度も仕様したことはないが、魔導砲をくればば 大きな神 と言えどただでは済まんだらう」

「あと、もうひとつ。僕が本当に役に立ってるんですか？」

ディティアはセイの顔を見て、ファティマの寝顔を見つめた。
「砂漠の魔女 と呼ばれていた大魔導師ファティマはこの世界最強の魔導師だった。後にも先にもあの魔導師を越える者は現れないだらう。あの魔導師が君に魔導書を託したのなら、君は多くの者に必要とされる存在なのだ。自分では気づいておらぬかもしれないが、君には大きな才能があるのだらう」

「僕にですか、そんなまさか。実は僕はこの世界の人間じゃないんです。異世界からこの世界に来てしまったんです」

「異世界？ おお、そうか。だから、少し変わった印象を受けるのか。君をひと目見た時から不思議なものを感じていた」

ディディアはセイの話をすぐに受け止めた。そして、こんな

話をしはじめた。

「異世界という考えはこの世界にも昔からある。我輩たちは大きな神によつて創られた種族だ。だが、我輩は大きな神の顔を知らん。だが、大きな神が存在するのは確かなことだ。その大きな神は外なる宇宙から来たと云われておる。つまり大きな神は異世界の住人であるのだ。異世界の者を倒すために、異世界に住んでいた君を選んだか……ファティマ殿も考えたものだ」

「でも、僕はそんな神様を倒せる力なんてないと思います。僕のいた世界には剣を持って街中を歩く人なんていませんでしたし、魔法なんてものもなかったです。僕がどうして選ばれたのかわかりません」

近くで話をずっと聞いていたゼークが口を開いた。

「でも選ばれちゃったんでしょ？ 男なら腹くくってあきらめなさいよ。ファティマ様を選んだから間違いなし！」

「でも僕がどうして……。あの、大魔導師ファティマってそんなにすごい人だったんですか？」

ゼークとデйтиアは同時に頷いた。

「アンタねえ、ばかじゃないの？ ファティマ様はそりゃーすごかったんだから」

「我輩たち小さな神をも凌ぐ魔導師だった。我輩は土を主に管轄しておるが、この我輩よりもあのお方は土の魔法に長けておった」

そんなに凄い魔導師がなぜ今この世にいないのか？

大魔導師ファティマは自分のことを不老不死だと語っていた。そして、暗殺されたとも語っていた。

「ええと、大魔導師ファティマは自分は暗殺されたのだと語ってくれました。でも、いったい誰に殺されたんですか？」

ゼークとディティアは顔を見合わせた。

「アタシは知らない。てゆーか、みんな知らないと思う」

「我輩も詳しくは知らんが、一説には 大きな神 本人が手を下したとも云われておる。だが、実際のことは誰も知らんだ」

「そうなんですか……」

セイは深くため息をついた。そして、大魔導師ファティマが表に出てきた時に聞いてみようと思った。

会話がひと段落して部屋がしばらく静かになった。

再び目を閉じて岩と化すディティア。ファティマはまだ寝ていて、ゼークもだらんとしている。

突然、外から大きな物音が聞こえ、しばらくして男の悲鳴があがった。

岩と化していたディティアが椅子から立ち上がり、ゼークも真剣な顔つきになって身構えた。

扉が打ち破られ、部屋に緊迫が走る。

銀に輝く髪が揺れた。左右違う色の瞳を持つ少女。大きな神の僕 光天の書 に宿る精霊メシア・エム。

「ここに四界王を居ると思ったのじゃが、少し顔ぶれが違うらしいのぉ」

槍を構えたエムがセイとファティマを見て微笑んだ。

この部屋の天井は高く、部屋自体も広い。そのため槍で戦うには問題がないが、魔法で戦うとなれば問題が生じてくる。自然と武器を取り接近戦となることは必定だった。

ディティアは巨大なハンマーをどこから取り出し、肩に担いで目はエムを見据えて放さない。

ゼークは風で作った刃を両腕の手首から肘までの部分に装着させた。つまり、これは相手を殴る格好で刃を向けるという武器だ。

宙に軽やかに舞ったゼークは円舞を踊るように刃でエムを切り裂かんとする。だが、エムは一撃目を槍の穂先で、すぐさまゼークから繰り出された二撃目を柄で弾き返した。

エムの前からゼークが後ろに飛び退き間合いを開ける。そして、すぐさまエムの背中に巨大なハンマーが振り下ろされる。

ハンマーが空気を唸らせエムの脳天を打ち砕こうとしたが、エムはそれを素早く避けてディティアに回し蹴りを放った。

両手でハンマーを持っていたディティアは回し蹴りをかわ躲す術もなく、小さな足に頬を挟られながら地面の上を回転しながら転倒した。巨体を誇るディティアが小柄な少女の一撃で吹っ飛ばされたのだ。

舌打ちをしたゼークは作戦を変えた。

「風よ弾丸となりなさい！」

ゼークの手から空気を圧縮させた玉が連続して発射され、エムの身体を連続して吹き飛ばした。

「アタシの城ごとアンタ倒してやるわよ！」

ゼークが建物を気にせずに戦うと宣言すると、むくりと立ち上がったディティアを頷いた。

「土よ其奴そいつを押し潰すのだ！」

ディティアの言葉とともに城が揺れ、部屋の外壁だった岩の壁が剥がれて、幾つもの岩がエムに襲い掛かった。

遅い来る岩をエムは槍で鮮やかに切り裂き、地面を軽く蹴り上げて飛んだ。エムが牙を向けたその先にはファティマがいた。そして、ファティマはまだ眠っていた。

「ファティマ起きて危ない！」

セイがファティマの身体を揺さぶって起こそうとするが、ファティマは全く起きようとしない。

槍の切っ先はファティマのすぐそこまで迫っていた。

絶対にファティマを守りたい。その気持ちを想った時にセイの口は自然と動いていた。

「光よ、無数の槍と化して全てを貫け　　ホーリースピア
ー！」

セイの身体から輝く槍が幾つも放たれ、槍を構え宙にいたエムの四肢と腹を貫いた。

後方に吹き飛びエムの身体が床にバウンドしながら落ちた。

そして、エムの身体からは煌く粉が流れ出ていた。

空かさず巨大ハンマーを構えたディティアがエムに止めを刺した。振り下ろされるハンマー。そして、その一撃を受けたエムの身体は煌く物体と化し、水が弾けと飛ぶように四方に弾け

て消えた。

最期を決めたディティアの頭をゼークが飛び上がりながら叩いた。

「ばか！ アンタばかじゃないの、アタシの城壊してどうすんのよ！」

「莫迦とはなんだ。お主が城ごとエムを倒すと言ったのではないか」

「ここはアタシの城なの。アタシが壊すのはいいけど、アンタに壊されるのはゴメンよ！」

部屋がミシミシと音を立てながら揺れた。天井からは砂埃が落ちてくる。

辺りを見回したゼークが叫ぶ。

「部屋の外に逃げて！」

部屋が倒壊する。ゼークは一目散に逃げて、ディティアは身体に似合わない素早い動きで、寝ているファティマを抱きかかえてセイと共に逃げた。

四人が部屋を出た直後に会議室を倒壊してしまった。

会議室の前には警備をしていた兵士の惨殺された死体が転がり、その先の廊下にもおびただしい血と死体が転がっていた。それを見たセイは思わずむせ返る。

「げほっ、げほっ……これを全部エムが……」

エムが通った道にいた者は全てこつなっているに違いない。

セイの前に立っていたゼークが、セイの後ろを見て叫ぶ。

「セイ^{かわ}躲せ！」

「!？」

後ろを振り向こうとした時は遅かった。瓦礫がれきの隙間から流れ出てきた煌く粉が手を形作り、セイの片足をしっかりと掴んでいた。

足を引きずられてセイが床に転倒する。ゼークが動こうとした。ファティマを抱えたディティアが動こうとした。しかし、それよりも早く動いた者がいた。

「闇よ呑み込みなさい」

どこからか伸びた闇の触手がセイの足を掴んでいた手を引きずり、手は煌く粉を尻尾のように引きながら、空間に空いた闇の中に引きずり込まれていった。

空間に空いた闇が口を閉ざし、その奥の廊下には美しい黒衣の美女が立っていた。その女性の背中には美しい漆黒の翼が生えていた。

「二人とも詰めが甘いわよおん。嗚呼ああ、わたくしが参らねばどうなっていたことか……この借りは後で返してくださいさるかしら？」

ディティアが黒衣の女性に向かって頭を下げた。

「危ないところを助けてもらい心から感謝する」

「お礼の言葉なんかいらなから、形として残るもので返してちょうだい」

黒衣の女性はそう言つて静かに微笑んだ。それを見てゼークは呆れたように言う。

「イーマ様は相変わらずガメツイ」

セイを救った黒衣の女性は闇神イーマだった。この女性がイーマだと知ったセイはまた神に幻滅した。

イーマはセイとファティマは見て鼻で笑った。

「期待薄の秘密兵器ね。こんなんじゃ 大きな神 に負けるわね、確実に。あ、そうそう、大きな神 がいる場所に繋がる道を見つけたわよ。でも、空間がどうしても開けられなくてヒリカがそこで待機してるわ。それで空間を空けるのにみんなの力が必要なんだけど、アウロと引きこもりイズムはどこ？」

「二人ともアタシの城のどつかにいるわ」

「じゃあ、すぐに呼び出してヒリカと合流しましょう。セイとファティマも来るのよ」

セイが頷くとイーマは静かに笑った。

アウロの馬車に乗せてもらい、セイが四界王と来た場所は海のと真ん中だった。陸地の見えない大海原が続く。

この場所には大勢の人々がいて、その人たちは背中に羽を持っていてセイレーンのようにも思えたが、セイはそれがすぐに

小さな神 の軍勢だと知った。この世界の 小さな神 が陸地の見えない海の上に集結していたのだ。

セイを乗せる馬車の周りには四界王と闇神イーマが集結して話し合いをしていた。セイはその会話に耳を傾けていたが、会話に参加することはできず、空間が空いたらセイも一緒に中に乗り込むということだけ告げられた。

しばらくして、純白の法衣ほういを着た若い男性がやって来た。

「みなさんようやく集まりましたね。そちらのお子さんがセイですね、よろしく願います。そして、そちらで寝ていらっしやるのがファティマですか、どこか 砂漠の魔女 の面影がありますね」

「ぜんぜんないしい〜」

ツツコミを入れたのはゼークだった。

「ヒリカくんの目は節穴？ アタシはどー見たってファティマ様の面影なんて感じないケド」

ゼークの言うとおり、精霊ファティマを見た人々の反応は『これがあの……？』という反応ばかりだった。

優しい笑みを絶やさないヒリカはファティマの寝顔を見ながら静かに言った。

「あのお方もここにいる者のように、可愛らしいお方でしたよ。それにゼークはこの者の側面しか見ていないのでは？」

「アタシが側面だけって、こんなお子様の精霊ちゃんもファティマ様と同等のわけないじゃん、ヒリカくんのぼ〜か」

ゼークに莫迦と言われてもヒリカはただ笑っているだけだった。それを見たゼークは少しムツとしている。この二人の間にイーマが割って入った。

「はいはい、あなたたちは貴重な時間を無駄に使おうとしているわあん。今私たちしなきゃいけないことは、さっさとゲートを開くことですよ？」

「そうですね」

と頷いたヒリカは天を指差した。

「ちょうどぼくが指差すあの位置が　大きな神　のいる場所と空間的に繋がっています」

ヒリ力が示した場所には何もなかった。今からそこに穴を空けるのだ。そして、作戦は開始された。

作戦の内容は四界神と陰陽神の六人が無理やり空間をこじ開け、大きな神　が住むと云われる　最果ての地　とこの空間とを繋ぎ、空かさず魔導砲を最大出力で打ち込む。その後には小さな神　たちが　最果ての地　に乗り込んで総攻撃をかけるのだ。

この作戦の要となっていてるのが魔導砲だ。しかし、セイが辺りを見回しても、その魔導砲らしきものが見当たらない。

「あの、魔導砲っていうのはどこにあるんですか？」

セイがそう尋ねると、近くにいたゼークが答えてくれた。

「ああ、魔導砲ね。魔導砲はこの星の軌道にあるのよ。つまり、空の上ね」

ゼークは空を見上げ、セイも空を見上げた。

空を見ながらセイは自分に問う。

なぜここに自分はあるのか？

知らない世界へ連れて来られ、知らない世界を旅した。

多くの人と出会い、多くの人と別れた。

だから、ここにいます。この世界が好きだから。この世界を守りたいから。

四界神と陰陽神が宙で陣形を組む。その配置はちょうど線で繋ぐと六芒星むくぼうせいの形であった。その六芒星の中心に　最果ての

地　　に続くゲートを空ける。

六芒星の周りから四界王と陰陽神を残して、小さな神たちが退避していく。六芒星から遠く離れた場所で、セイも馬車の上からこれから起こることを見守っていた。

馬車の上ではファティマがまだ深い眠りから覚めていなかった。

「ねえ、ファティマ起きてよ、大事なところなんだ」

セイはファティマの身体を揺さぶったが、ファティマは全く目を覚まそうとしない。

「ファティマってば！」

少しも反応がない。目を閉じて、微かに呼吸をしているだけだった。明らかに可笑しい。

セイは慌ててファティマの身体を揺さぶるが、やはり目を覚まそうとはしなかった。

「起きてよ！」

セイがファティマを起こそうとしている間にも、四界王と陰神はゲートを空けようとしていた。

陽が辺りを照らし、風が激しく舞い、海が高波を上げ、大地を吼える。

光がなければ闇は生まれず、闇がなければ光は輝きを失う。

互いが互いの存在を確認し合うからこそ　存在　する。

空に六芒星の光が浮き上がり、その中心の空間が避けていく。轟く何かが避けた空間から現れる。それは　混沌。形あるものとして他に　存在　を確認されていないもの。

四界王と陰陽神が六芒星の光から急速に離れ、魔導砲を発射する合図がなされた。

世界が静まり返り、セイは息を呑んだ。
何も起こらない。魔導砲が発射されないのだ。

沈黙を破るようにアウロが叫ぶ。

「どうなってるんだ！ 早く撃て！」

しかし、何も起きなかった。

小さな神 たちに動揺が走る。

四界王や陰陽神が辺りの動揺を鎮めようとするが、その動揺は治まることを知らず、声が波のように巻き起こってしまった。

空間に空いた穴が蠢いている。その蠢きは次第に激しくなり、神々の目はそこに集中された。そして。

穴の中から銀色の光が漏れ出し辺りを包み込んだ。

セイは薄目を開けながら見た。穴の中から人が出てくる。銀色の翼を持ち、銀色の髪を風に靡なびかせる少女たちが出てくる。

そう、幾人ものエムが 混沌 の中から次々と生まれ出てくるのだ。

辺りは一気に戦場と化した。

すでに開かれていたゲートは口を閉じ、最果ての地 への道は閉ざされている。

セイは馬車の中で身を屈めていることしかできなかった。

「ファティマ起きて、大変なんだ！」

辺りが戦場に化そうとも、セイの声はファティマに届かなかった。

エムの軍勢は 小さな神 たちを圧倒する数だった。明らかに神々が押されていた。神々が負ける。

小さな神 たちが次々と海の底に沈んでいく。

全ては仕組まれていたとしか思えなかった。待ち伏せをされていたとしか考えられなかった。小さな神 は 大きな神 の力を測り切れていなかったのだ。

エムと応戦しながらアウロがセイのもとまで飛んで来た。

「おまえも戦え、魔導書を持つ魔導師だろ！」

「僕が……無理です、僕は魔導師なんかじゃありません」

「アウロさん危ない！」

セイの目が見開かれ、アウロはセイの目の前で翼を斬られ海に落ちた。

声すら出せないでいるセイは信じられなかった。アウロを斬ったのはエムではないのだ。閻神イーマだったのだ。

大きな鎌を構えているイーマは静かに笑った。

「ごめんなさいねアウロ。貴方には怨みはないんだけど、わたしは生き残りたいから」

「イーマさん、どういうことなんですか!？」

声をあげるセイは理解した。イーマは仲間を裏切ったのだ。

「わたしが協力すれば 大きな神 はわたしを殺さずに、次の世界でも閻神にしてくれる約束なのよ。ここにみんなを集めたのも罠だし、魔導砲が作動しなかったのもわたしがやったこと

よ」

「それは真かイーマ！」

叫び声をあげたのは巨大ハンマーを振り下ろそうとしている
ディティアだった。

油断していたイーマは振り向きざまにディティアの一撃を受
けて海に沈んだ。

「大丈夫であつたかセイ？」

ディティアの言葉にセイは頷くが、動揺は隠せなかった。

「まさかイーマさんが裏切るなんて……」

「なにが正しいかは人それぞれなのだ。我輩はイーマの裏切り
を責めはせん。我輩はわが道をゆくのみ」

「でも……」

「セイはここから逃げるのだ。そして、我輩たちの意思をでき
れば受け継いで欲しい」

ディティアは馬の背中を叩きなにかを言った。すると、急に
馬たちが走り出し、セイとファティマを乗せた馬車は戦場から
離れようとした。

「ディティアさん！」

セイが叫んだ時には、ディティアは何人ものエム相手にハン
マーを振るっていた。

この場から逃げたくないと思つた。でも、自分には力
がなくて、なにをしていいのかわからない。魔法だつて自由に
使うことができない。でも、戦わなければならぬと思つた。
歯を食いしばつたセイは御者台に行つて、馬の手綱をとにか
く力いっぱい引いた。

「止まつて！」

馬は止まった。しかし、セイの言うことを聞いたわけではなかった。

空の向こうで光が瞬いた。その光は徐々に大きくなり、誰もがそれがなんであるかを悟った。魔導砲が今になって放たれたのだ。

宇宙から飛来して来た光は太陽よりも明るく輝き、大気圏を突き抜けて空気を燃やし、全てを呑み込みながら落ちて来る。

魔導砲が大地に直撃する前に空気が揺れ、海も大地も揺れた。それはまるで全てのものが脅えるように。

轟々という凄まじい音を立てながら落ちて来る。

今まで眠りに落ちていたファティマが急に起きだし空を見上げた。そして、輝く翼をはばたかせ、空に舞い上がると光となり、その光は世界中に散っていった。

「ファティマ!？」

なにが起きたのかセイには理解できなかった。そして、そのことを考える間もなく、目を開けられないほどの光が地上に降り注ぎ、人々は空の上で何が起きているのか、感じることでしか確認できなかった。

セイは息を呑む暇さえ与えられなかった。

魔導砲は地面に墮ちた。

光は世界から闇を消し去り、全てを白い世界で包み、全てを呑み込んだ。

冷たい床の上でセイは目を覚ました。

黄金色に輝く床と柱と壁。ここは全てが金色に輝く神殿のよ
うな建物だった。

自分は死んで天国に来たのだとセイは思った。

天から降り注ぐ魔導砲の光に抱かれ、全てが消えてしまった。
あの状況で助かった者は誰一人いないと思う。だから、セイも
自分が死んだのだと思った。

床に手を突いてゆつくりと立ち上がったセイは辺りを見回し
た。

石造りの広くどこまでも続く床の両脇には柱が立ち並び、そ
の先には大きな扉があった。

静寂の中にセイの足音が響き渡る。

扉の奥に何があるのか、それが知りたかった。

両手をゆつくりと上げて、セイは扉に体重をかけた。すると、
扉は軋みながらゆつくりとその口を開けた。

紅い絨毯が一直線に敷かれ、その先の玉座に座る男と傍らに
佇む銀髪の少女。

セイの顔を驚きの表情を浮かべた。

「エム!？」

そう、男の傍らに立っていたのは、大きな神の僕、光
天の書に宿る精霊メシア・エムだった。

エムの横に座る男を見たセイはもしやと思った。

「あなたが、大きな神?」

男は笑みを浮かべながら深く頷いた。

「いかにも、私が、大きな神だ」

あの世界ノースでノエルと呼ばれていた種族。そして、セイにとても酷似した種族。大きな神の姿は地球の人間に酷似していた。

果たしてセイは本当に死んだのか？

「僕は死んだんですか？」

「いや、君は死んでない。他の者たちは滅びたけどね」

目の前にいる大きな神にしては神らしくないとセイは思った。口調も雰囲気も姿形も、全てが想像していたものと違った。目の前にいる神はどこにでもいそうな若い男だったのだ。

他の者たちは滅びた。それはつまり、あの場所にいた小さな神たちが滅びたということだろうか。だとしたら、なぜセイは助かったのか？

「僕はなんで助かったんですか？」

「さあな、なぜだろうか……。ファティマの守護かもしれないな。それに私の住まいに君を転送したのもファティマの仕業だろう」

「僕にはなにが起きたのかわかりません。そこにいる彼女がいっぱい現れて、戦いがはじまって、空が激しく輝いて……？」

「あの後なにが起きたのか教えてあげよう。私はあの場所に集結した小さな神を一掃しようとした。それが目的だった。

そして、私が魔導砲を撃ち、あの場所にいた小さな神のほとんども滅びた」

「……そうですか。それで世界はどうなっただんですか？」

「もちろん滅びた。今はただの荒地になってしまっている」

全ては 大きな神 の手によって滅ぼされた。

もう一度逢いたかった人々に二度と会えなくなってしまった。

セイは言葉を失って床に膝を突いた。

項垂れるセイを 大きな神 は静かな眼差しで見下した。

「生きる希望もないか？ そうだな、君の居場所はこの世のど

こにもないな。 大きな神 が君に救いを与えてあげよう。メ

シア・エム、彼の魂を解放してあげたまえ」

「御意のままに」

ロンギヌスの槍を構えたエムが切っ先をセイに向けた。

銀の髪が風に戯れて波を打った。

左右色の違う蒼と翠の瞳がセイを見据えた。

そして、エムは月のように優しく微笑みを浮かべた。

ロンギヌスの槍が疾風のごとくセイを射抜かんとする。

静寂。

沈黙。

叫び。

「ファティマーっ！」

エムの叫びがあがった。

セイの前に立つファティマの手には光の槍 ブリューナク

が握られていた。

「ご主人様はボクのただひとりのご主人様なんだ。だから、ボクが必ず守ってみせる」

「……ファティマ」

セイはゆっくりと顔を上げた。その瞳に映るファティマの姿。

いなくなってしまうのだと思っていた。

エムの身体を貫いていた五本の切っ先が抜かれ、エムは床に膝を突いた。その傷口からは煌く粉が流れ出し、エムの身体が徐々に消え溶け逝く。そして、床に前のめりに倒れたエムは煌く粉となって弾け飛んだ。

静かに立ち上がる 大きな神。彼の手には一冊の魔導書が握られていた。

「魔導書に宿る精霊の本体は魔導書そのものだ。つまり、エムは生きているよ」

大きな神 の持つ 光天の書 が輝き、その中から煌く粉が宙に舞い出てエムを形作った。

ブリューナクを構え直したファティマがエムを見据えながら、静かに手を横に伸ばしてセイを守った。

「ご主人様、ボクの後ろに下がって……。私が相手をしよう」

何時になく真剣な表情をするファティマ。そう、精霊ファティマは大魔導師ファティマに人格が入れ替わっていた。

エムがロンギヌスの槍を構え床を激しく蹴り上げる。それに合わせてファティマも飛んだ。

重なり合う運命が唸り、弾き合う槍が叫び、二人は激しく荒れ狂い舞い躍る。

大きな神 はエムを見守り佇んでいた。その 大きな神 にセイは静かに忍び寄っていた。そして、セイは 大きな神 に飛び掛かった！

飛び掛かったセイは 大きな神 の腕に飛び付き、光天の書 を奪い去ろうとした。がしかし、大きな神 に触れる前に見えない壁によつて弾き返されてしまった。

「無駄だよ、君は私には勝てない。そう、私にはね」

果たして 大きな神 に打ち勝つことは不可能なのか？

床に転がったセイにファティマが視線を向けた。

「セイ！」

一瞬エムから気を離れた刹那、ファティマの肩が槍によつて射抜かれ、その反動でファティマの握っていたブリーナクが宙に舞い、硬音を鳴らしながら床に落ちた。

武器を失ったファティマはすぐさま呪文を唱えようとした。

だが、ファティマの口が、身体が、白い布によつて拘束された。その布を握っているのは 大きな神 だった。

「メシア・エム、ファティマに止めを！」

「御意のままに」

エムの持つ槍がファティマを襲う。

「ファティマ！」

セイの叫びが木霊し、木霊は風の竜となりて、大きな神 に襲い掛かった。

大きな神 の持つていた 光天の書 が宙に舞い、ページがバラバラになり竜巻の中に舞い上がった。

ファティマに止めを刺そうとしていたエムの顔が狂気を浮かべる。凍りついていた月が音を立てて砕けたのだ。

拘束されていたファティマが白い布を断ち切り、呪文を唱え

た。

「風よ火よ、爆炎を巻き起こし障壁を破壊せよ　ファイアーボール！」

ファティマの掌から紅蓮の炎が飛び出し、宙に舞い上がっていた紙切れが燃え上がり、火炎の蝶へ、黒蝶へ。光天の書は灰と化して塵と消えた。

エムの身体が足から徐々に上へと煌く粉に変わっていく。だが、その顔は輝く月の笑みを浮かべていた。

ロンギヌスを持つ手に力が込められ、最期の一撃が繰り出された。

執念の一撃がファティマの身体を射抜いていた。いや、射抜くという生易しいものではなかった。ファティマの半身は吹き飛ばされ、煌く粉と化して消えゆくとしていた。

セイは見ていることしかできなかった。ただ、見つめるその中で、二人の精霊が煌く粉となって消えた。そして、二本の槍が地面に音を立てて落ちた。寂しい金属音が辺りに響き渡る。

大きな神　が静かに深く玉座に着いた。

「痛み分けと言ったところか……」

「痛み分け……？　ファティマだけじゃないよ、あなたはあの世界も僕から奪ったんだ」

「奪った、私が？　あの世界は私が創ったんだ、どうしようも私の勝手だろう。それにあの世界を創ったのは私なのだから、本を正せばファティマも私の所有物さ」

「所有物って、みんな生きてたのに……なんで、何度も何度も

壊しては創って、子供の遊びじゃないか!？」

「わかった、わかった、最初から全部話そうじゃないか。」「僕がこの世界に来た時”の話から」

セイの表情が急に変わった。大きな神の言葉になにかを感じ取ったのだ。

玉座に座りながら前に足を投げ出した 大きな神 は、一息ついてから話をはじめた。

「そうだね、まずこの話からしよう。時間というものは球体なんだ。丸い玉をまず頭に思い浮かべて、次にどこか一点に記しをつけてそこをスタート地点にする。そしたら、無限の数の時間 がスタートから出発し、次の瞬間にも無限の数の 時間 がスタートから出発するっていうのが無限に続く。スタート地点を出発した 時間 はどんなルートを辿ってもいいから、グルッと回ってスタート地点に戻ってくる。これが 時間 さ」

「言ってる意味がわからない」

「未来は無限にあり、いくつもの歴史がある。僕という存在がこの世に誕生しなかった歴史もある。で、スタート地点にAという 時間 が戻って来ると、Aはリセットされてゼロに戻る。そしたら、またスタートからスタートに戻ってくる」

「意味がわからない」

大きな神 は不気味に笑い口を開いた。

「つまりだ。なにが言いたいかって言うと、君は僕で、僕は君だ」

「えっ!？」

「さつき説明したとおり、過去か未来かという概念は存在しない。確かに私の方が身体的に成長はしているけど、時間は球体だから、君の方が過去かもしれないし、未来かもしれない」

時間　の話は理解できなかったが、セイは目の前にいる男が自分だという話は理解したしかし、その話を信じることはできない。

「僕があなた？　そんなまさか、僕はあなたじゃない!」

「確かに違う存在ではある。ここに訪れた何人もの“僕”たちはみんな違っていた。持っている魔導書も違ったし、性格も私とは違ったようだ。でも、元は全部同じ存在で、歩んだ道が違っただけさ」

「今、何人ものって言ったよね？　僕がここに何度も来た……?」

「ああ、私はなんども過去の“僕”を殺した」

この言葉はセイにショックを与えた。僕が僕に殺された。そんなことがあるのか？

「僕が僕をどうして……なんで殺したんだよ!」

「私が世界を創っては“僕”がやって来て私の邪魔をする。その度に私は“僕”を殺し、何度も何度も世界を創り直し、理想の世界を創ろうとした」

「わからないよ、もうなにがなんだか……」

席を立った　大きな神　は項垂れるセイの横を通り過ぎ、床

に落ちていた二本の槍を拾い上げ、ファティマの槍　ブリユ
ーナクをセイの足元に投げた。

「槍を取れ、なにもせずに私に殺される気か？」

「別にもうどうでもいいよ」

「戦意喪失か……ならば仕方ないな。君の心臓をこの槍で一突
きにしてあげよう」

地面を駆ける　大きな神　はロンギヌスの槍を構え、一直線
にセイに向かって牙を剥いた。

《ご主人様！》

セイは心の中でファティマの声を聞いた。そして、次の瞬間
セイの握るブリユーナクは　大きな神　の腹を射抜いてい
た。

「僕は……こんなこと……」

「いや、これでいい。君は死にたくなかったんだ。だから私を
刺した」

「……………」

柄を握るセイの手は震え、脚も身体も全身が震えていた。

大きな神　が鼻で笑った。

「このシチエーションは僕がはじめてこの世界に来て、大き
な神　だった“僕”を殺した時に似ているよ。僕がなぜ世界を
何度も何度も創り直したと思う？」

セイは脅えた顔で首を横に振った。そして、口を閉ざしたセ
イを見て　大きな神　が再び笑う。

「私が最初に訪れた世界が“僕”によって壊されたからさ。私

「私が最初に訪れたこの世界の姿に戻りたかった。私が最初に異世界に来て、旅した世界をもう一度創りたかった。君も私と同じことするかもしれないね」

「……………」

「でも、私は失敗した。同じ世界は創れなかった。実を言うとね、もう疲れたんださすがに。同じ世界が創れないことに疲れて、私は死にたくなかった。だから、今回はわざと君に殺されたんだ」

最期に意地悪く笑って 大きな神 は動かなくなった。

セイがブリューナクを手放し、大きな神 が床に崩れ落ちる。そして、セイもまた 。

「僕は……………僕はどうすれば……………」

床で泣き崩れるセイの前に少女が立った。

「ご主人様、ボクがいるから平気だよ！」

「ファティマ？」

顔を上げたセイの瞳にはファティマの姿が映し出されていた。

「ボクが死んだとでも思ったの？ ばかだなあ、ご主人様は」

「どうして？」

「どうしてもなにも、だって ファティマの書 はセイの中で生きてるもん。セイが行き続ける限りボクは不死身だよ！」

「よかった……………でも、世界は壊れちゃったし、なにもないよ、なにも……………」

床に膝を突くセイの瞳からは止め処ない涙が零れ落ちた。

ファティマがそっとセイの身体を包み込んだ。

「大丈夫だよ、世界はボクの身体の中に生きてる。世界が滅びる前にボクは世界の全てを記したんだ」

「えっ？」

「まあ、任せとけてご主人様！」

ファティマは胸を張って最高の笑みを浮かべた。

エピソード

砂漠の都市に住む魔導師は一冊の魔導書を書いた。

魔導師がその魔導書につけた真実の名は 創造の書。

全ての 存在 は他があつて初めてそこに 存在 する。

創造の書 は 世界 に対する他になつたのだ。

世界 が 存在 するからこそ、 創造の書 は 存在 した。

光がなければ闇は生まれず、闇がなければ光は輝きを失つ。

互いが互いの 存在 を確認し合うからこそ 存在 するのだ。

ボクを記した魔導師は全てをボクに記す前に死んじゃつたんだ。

世界が広がり続ける限りボクは無知であり続けるよ。

だから、ボクらの旅は続くんだよ。

ねっ、セイ！